

資料

(平成二十八年十二月)

第六十一回 「合宿教室」 (西日本・東日本) 感想文集

——日本人としての自覚をもとめて——

公益社団法人

国民文化研究会

第六十一回 「合宿教室」(西日本・東日本)全参加者の感想文と短歌詠草



西日本

「合宿教室」

と き 平成二十八年八月十九日(金)から二十一日(日)まで二泊三日間

ところ 福岡県福岡市「さわやかトレーニングセンター福岡」

参加総数 七十四名

「合宿教室」 第二部 “油山慰霊祭”

と き 平成二十八年八月二十八日(日)

ところ 福岡県福岡市油山

参加総数 十九名(うち右記「合宿教室」参加者十六名)

「合宿教室」 第三部 “短歌研修”

と き 平成二十八年十月二日(日)

ところ 福岡県福岡市「福岡大学セミナーハウス」

参加総数 三十二名(うち右記「合宿教室」参加者二十三名)

東日本

「合宿教室」

と き 平成二十八年九月二日(金)から五日(月)まで三泊四日間

ところ 静岡県御殿場市「国立中央青少年交流の家」

参加総数 六十九名



目次

“はしがき”に代へて……………	理事長 今林賢郁	3
大学別参加者数・その他の人数の内訳……………		6
「合宿教室」61年の歩み……………		8
西日本「合宿教室」……………		11
日程表（二泊三日）……………		12
あらし……………		13
走り書きの“感想文”……………		23
「合宿教室」第二部“油山慰霊祭”……………		59
「合宿教室」第三部“短歌研修”……………		63
東日本「合宿教室」……………		71
日程表（三泊四日）……………		72
あらし……………		73
走り書きの“感想文”と第二回目の“短歌詠草”……………		89
合宿中に創作された「短歌詠草」……………		125
あとがき……………		134
カメラ・レポート34枚（25～57、91～121の奇数ページに掲載）……………		134

“はしがき”に代へて

公益社団法人 国民文化研究会 理事長

今 林 賢 郁

当会の「全国学生青年合宿教室」は、昭和三十一年（一九五六）に鹿児島県の霧島神宮で第一回を開催して以来今年で六十二回を迎えました。戦後思想の混乱のなかで、次代を担ふ学生、青年たちが祖国日本への自信と誇りを取り戻し、堂々たる日本人として生き抜く力を身につけて欲しい、そのために若い皆さんに研修の「場」を提供し、共に学んできたのがこの合宿教室でした。

さて、今年の合宿教室は、わが国を取り巻く国際環境がいよいよ厳しさを増すなかで、隣国をはじめ世界の諸国にわが国はどのやうに対処すればいいのか、また我々ひとりひとりが本物の自立した日本人になるためにはどのやうな心構へが必要なのか、などについて参加者一同心を傾けて取組みましたが、今年をはじめての試みとして、左記の通り二ヶ所で開催致しました。

【西日本】合宿

①平成二十八年八月十九日～二十一日（二泊三日）、

福岡市東区香椎浜「さわやかトレーニングセンター」で開催

②平成二十八年十月二日（一日）、「短歌」研修合宿、

福岡市中央区六本松「福岡大学セミナーハウス」で開催

西日本合宿では本会会員が全講義を担当しました。「先人の言葉に触れよう―吉田松陰の「土規七則」を辿る」（高木悠氏）、「学問

とはどういふものか―西郷隆盛の言葉から考へる」(武田有朋氏)、「短歌と日本人」(山口秀範氏)、「歴史を生きるといふこと―森鷗外と吉田松陰を読んで」(廣木寧氏)、「日本の国がら」(今林賢郁氏)、この五つの講義が行われました。先人たちの言葉を辿り、現代につながる短歌の歴史を回顧し、歴史を生きるとはどういふことを考へ、また世界でも稀有なわが国の国柄について、各講師はそれぞれの演題に沿って、自分の経験も踏まへながら参加者に語りかけました。

合宿の終りに、九州電力榊相談役 松尾新吾先生に「持論ア・ラ・カルト―戦後七十年に思ひを馳せて―」と題して講話をいただきました。

【東日本】合宿

平成二十八年九月二日～五日(三泊四日)、

静岡県御殿場市「国立中央青少年交流の家」で開催

東日本では招聘講師として評論家石 平先生をお招きし、「中国の覇権戦略と日本の課題」の演題でご講義をいただきました。中国の覇権主義について、歴史を回顧しながら華夷秩序の成立と崩壊の経緯について語られ、華夷秩序の再建といふ命題が現在の習近平政権に引き継がれてゐること、この中国の華夷秩序再建のための覇権主義に日本が対処するために憲法改正といふ課題があり、平和主義を守ることと、実際に平和を守ることとは全く違ふ、日本人のための日本人による憲法改正が大きな課題である、と強く訴へられました。

東日本も西日本と同じく、会員諸氏が登壇して講義を行いました。「わが国を取り巻く危機と学生青年諸君に期待するもの」(伊藤哲朗氏)、「聖徳太子の憲法十七条を読む」(前田秀一郎氏)、「日本の国がら」(今林賢郁氏)、「若き友らに語りかける言葉」(國武忠彦氏)、この四つの講義では、わが国を取り巻く危機の状況と危機感覚の稀薄さ、危機に対処するリーダーの資格条件などが語られ、また「和」の実現を願はれた聖徳太子の強い意志を「憲法十七条」に偲び、更には古来から連綿と続いてきたわが国の国柄を回顧

し、はたまた学問の要諦は「思ふ」ことであり、現実の問題に対処する工夫や智恵を働かせることの大切さなど、各講師は心をこめて語ってくれました。加へて、合宿の特徴である「短歌創作」については、「導入講義」（須田清文氏）と「全体批評」（澤部壽孫氏）が行はれ、全体批評の時間はなごやかで楽しいひと時となりました。

このやうに東日本、西日本を問はず、参加者は各講師の講義を一心に聴き、班別討論の場では講義の資料を皆で読み味ひながら友の話しに耳を傾け、自分の疑問や思ひを語り合ふなかで、限られた日程とは言へ、参加者は次第に自分が日本人であることを体験的に把握し、自国の現状と将来に思ひを馳せていったやうに思はれます。

この「感想文集」は合宿最後の帰り際に「走り書き」で書かれたもので、充分意をつくされたものではありませんが、精魂を傾けて過ごした合宿での思ひを率直に書き留めてくれたものです。紙面の都合で全文を載せられないのが残念ですが、ご精読賜りますれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、この合宿教室を実施するにあたり、今年もまた、各界からお寄せいただいたご支援に対し、会員一同に替り心から厚く御礼申し上げます。

尚、来夏（平成二十九年）の「第六十二回合宿教室」は、再び一ヶ所での開催とし、時期は来年の八月中、下旬の二泊三日、場所は今年の西日本合宿を行った福岡市の「さわやかトレーニングセンター」を最有力地として検討中です。



第 61 回全国学生青年合宿教室（西日本）（平成 28 年 8 月 19 日～21 日）
於「さわやかトレーニングセンター福岡」

西日本「合宿教室」参加者

（学生班）（算用数字は参加学生数）

東京大学 1 名古屋大学 1 皇學館大学 1

京都大学 1 大分県立看護科学大学 1

福岡教育大学 1 福岡大学 7 中村学園大学 2

西南学院大学 2 佐賀大学 3 長崎大学 1

長崎県立大学 1 鹿児島大学 1

計 二十三名（うち女子六名）

（社会人参加者） 十五名（うち女子七名）

（講話） 一名

（国民文化研究会） 三十四名

（事務局） 一名

総計 七十四名



第 61 回全国学生青年合宿教室（東日本）（平成 28 年 9 月 2 日～5 日）
於「国立中央青少年交流の家」

東日本「合宿教室」参加者

（学生班）（算用数字は参加学生数）

東京大学 1 早稲田大学 2 横浜国立大学 1

國學院大學 1 立命館大学 1 京都産業大学 1

福岡大学 1 福岡教育大学 1 佐賀大学 1

長崎大学 3 鹿児島大学 1

計 十四名（うち女子三名）

（社会人参加者）七名（うち女子二名）

（招聘講師）一名

（国民文化研究会）四十五名

（事務局）一名

（慰霊祭協力）一名

総計 六十九名

— 「合宿教室」61年の歩み —

回数	年度	開催地	参加人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	〃 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿 蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧 島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲 仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島 原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島 原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島 原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿 蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚 木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿 蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥富修一
38	〃 5年	厚 木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿 蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚 木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道
41	〃 8年	阿 蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚 木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村聰一郎
43	〃 10年	阿 蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃 11年	富 士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃 12年	阿 蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義

回数	年 度	開催地	参加 人員	主 要 講 師
46	〃 13年	富 士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・小野吉宣
47	〃 14年	江田島	244	中西輝政・山内健生・青山直幸
48	〃 15年	富 士	171	小堀桂一郎・伊藤哲夫・占部賢志
49	〃 16年	阿 蘇	169	中西輝政・小田村四郎
50	〃 17年	伊 勢	219	長谷川三千子・松浦光修
51	〃 18年	霧 島	191	井尻千男・吉田好克・占部賢志
52	〃 19年	奈 良	175	小堀桂一郎・小川三夫・小野吉宣
53	〃 20年	伊 勢	150	伊藤哲夫・占部賢志
54	〃 21年	厚 木	160	長谷川三千子・ペマギヤルボ・占部賢志
55	〃 22年	阿 蘇	151	中西輝政・小柳左門
56	〃 23年	江田島	141	小堀桂一郎・山内健生
57	〃 24年	阿 蘇	152	竹田恒泰・小柳志乃夫
58	〃 25年	厚 木	142	伊藤哲夫・國武忠彦
59	〃 26年	淡 路	108	中西輝政・小柳左門
60	〃 27年	富 士	115	長谷川三千子・小柳志乃夫
61	〃 28年	福 岡	74	今林賢郁
		富 士	69	石平・今林賢郁
累計・参加人数				14,959 名

西日本「合宿教室」



第61回 全国学生青年合宿教室(西日本) 日程表

	8月19日 (金)	8月20日 (土)	8月21日 (日)
6:30		起床	起床
7:00		朝の集い	朝の集い
7:15		朝食	朝食
8:30		講義 「学問とはどういうものか - 西郷隆盛の言葉から考える」 武田有朋	講義 「日本の国がら」 今林賢郁
10:00		班別研修	班別研修
11:30		昼食 (写真撮影)	昼食
12:00		野外研修 (香椎宮散策)	合宿をかえりみて
12:30	班別研修		
13:00	感想文執筆		
15:00		講義 「短歌と日本人」 山口秀範	講話
15:30		班別研修	閉会式
16:00			解散
16:30	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; width: fit-content; margin: auto;"> ①夕食は済ませてく ること ②入浴は午後5時か ら可能です。また、 各部屋にも浴室があ ります </div>		
18:00		夕食 入浴	
19:00	開会式		
19:30	班別自己紹介	古典講義 「歴史を生きるということ - 森鷗外と吉田松陰を讀んで」 廣木寧	
20:00	合宿導入講義 「先人の言葉に触れよう - 吉田松陰の「土規七則」をたどる」 高木 悠		
21:00	班別研修	班別研修	
22:30	消灯	消灯	22:30

第六十一回「合宿教室」(西日本)のあらまし

第一日目

(八月十九日・金曜日)

第六十一回全国学生青年合宿教室(西日本)は、福岡県福岡市香椎浜の「さわやかトレーニングセンター福岡」にて開催された。参加者は、北は東京、南は鹿児島から集った。

開会式

合宿教室は福岡大学法学部二年の伊藤駿輝君の開会宣言で幕を開けた。主催者代表挨拶で今林賢郁理事長は「今回で六十一回目を迎へるこの合宿教室で私たちはこれまで何を訴へてきたのか。それは私たちが生れ育った『日本』はどのやうな国なのか、わが国の歴史とその中で育まれてきた伝統・文化とはどのやうなものなのかについて、次の若い世代に正しく知って欲しいといふことであった。先人観やマスコミの流す情報などに惑はされることなく、今を生きる一人の日本人としてどのやうな心構へで生きていけば良いのかを、まづ自分自身の心と頭で考へて貰ひたい」と語った。次いで古川広治合宿運営委員長は『歴史に学ぶ』といふこの合宿のテーマの意味するものは何か。その意味するものに真正面から向き合つてほしい」と呼びかけた。

合宿導入講義 「先人の言葉に触れよう―吉田松陰の「士規七則」を辿る」

東京大学大学院理学系研究科生 高木 悠氏

「先人の言葉は単に難しいものとされがちであるが、先人の言葉に心が動かされ、自分の中からエネルギーが湧いてくると感じることもある」と、自らの体験を語って、そのやうな先人の言葉の一つとして吉田松陰の「士規七則」への思ひを述べた。



書き出しの一節である「冊子を披繙せば、嘉言林のごとく躍々として人に迫る」について、松陰自身に実際にこのやうに文章を読んでみたのではないかと述べた。そして「七則」を①「人間たれ」、②「日本人たれ」、③「武士たれ」、④「光明正大であれ」、⑤「読書せよ」、⑥「交遊を慎め」、⑦「決死の覚悟で事に臨め」を意味するものとして、各項目を丁寧に解説した。「一つ目と二つ目の項目で、まづ『人間たれ』『日本人たれ』と言はれてゐることに着目してほしい。そして次に具体的に『武士たれ』としてゐる。これは自己の自分を尽せといふことだから、学生なら『学生として為すべきことに努めよ』となる。従つて『武士たれ』と『光明正大たれ』の二項目はこの後の班別研修から実践することが出来る。そこでは堂々と自らの思ひを述べ、友の言葉に耳を傾けてほしい」と語つた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義についての班別研修を行った。講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかつたこと、重要なことは何かを確認し、その上で各々の思ふことを論じ合つた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも行はれた。緊張のせみか、始めのうちは意見も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、班員相互の交流が深められていった。

第二日目 (八月二十日・土曜日)

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。朝の清々しい空気を胸一杯に吸ひながら体操を行ひ、その後、上野学園高等学校音楽科講師の武澤陽介氏による唱歌の歌唱指導を受け、合唱した。唱歌は次の通りである。

二日目 (八月二十日) 「我は海の子」

三日目 (八月二十一日) 「里の秋」

講義 「学問とはどういふものか―西郷隆盛の言葉から考へる」

西日本電信電話(株) 武田 有朋 氏



まづは自身が初参加した合宿で、物の知り方には知解(頭で知ること)、体解(身体で知ること)、信解(真心で知ること)の三種類があることを長内俊平先生から教はった体験を紹介し、学校教育が「知解」中心であることに對して、学生時代から参加してきたこの合宿教室で触れた学問は、「信解」の世界であったと語った。

続いて、『西郷南洲遺訓』を取り上げて、そこに通底するものは「無私」「至誠」ではないかと指摘して、読むたびに「お前はどくなのだと問ひかけられる心地がする」と述べ、特に「命もいららず、名もいららず、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るもの也。此の仕末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり」といふ一節は、信解の端緒となるものと思ふ。班員と味はって信解といふ知り方を心に留めてほしいと述べた。また、勝海舟の西郷隆盛評について、『氷川清話』の一節を取り上げ、「勝海舟から見ても西郷の強さはその大膽識(実行力を伴ふ決断力)と大誠意にあつたのだ」と紹介した。

そして最後に、西郷の語録から窺はれる「無私」「至誠」に通じる生き方や考へ方は、昔から日本人が大切にしてきたものであり、この合宿の中で触れる文章や短歌からも、真心で学ぶ学問の大切さを感じてほしいと呼びかけた。

野外研修(香椎宮参拝)

講義聴講の後、全参加者はバスで香椎宮(福岡市東区)に向った。

香椎宮では、宮司様のご挨拶をいただいて、地元福岡の榊石村萬盛堂社長の石村善悟氏(本会参与)から、香椎宮が仲哀天皇

及び神功皇后を御祭神（主神）としてお祀りしてゐる古きお社であり、明治十八年に官幣大社の指定を受け定期的に勅使のご差遣を仰ぐ勅祭社であるなどの説明があった。

真夏の厳しい日差しのもと、境内の石段を上るとすぐに、神功皇后が植ゑられたといふ御神木「綾杉あやせ」の見事な枝ぶりが目に飛び込んできた。さらに本殿横を抜け、林の中を吹きくる風を受けながら、香椎宮起源地の地「古宮」へと歩を延ばし、天を突くが如き「古宮」の御神木「棺掛樵かたかかし」を仰ぎ見ながら遙か古へを偲んだ。

講義 「短歌と日本人」

榎寺子屋モデル 代表取締役社長 山口 秀範氏



香椎宮の御神木「綾杉」の前に、掲げられてゐた「千早ぶる香椎の宮の綾杉は神のみそぎに立てるなりけり」の歌を紹介し、「五七五七七といふ定型の短歌は、長い歴史を通じて日本人の心情を写し出してきた」と述べて講義は始まった。

昭和四十三年ノーベル賞受賞記念講演で、「小説家の川端康成が『美しい日本の私』と題して、ほぼ全編を道元・明恵・良寛などの短歌について語ったのは驚きだった」と振り返り、月と作者が一体となつてゐる明恵上人の歌「隈くまもなく澄める心の輝けば我が光とや月思ふらむ」（参禅する作者の澄み切つた心の輝きを、月は月自身の光と思ふだらう）を参加者と一緒に読み味はつた。

続いて柿本人麻呂が草壁皇子を悼みつつ、軽皇子の狩に同行した折の長歌と短歌を取り上げ、我が国にまだ文字がなかった時代の人々のコミュニケーションひびがひとそれを後世に伝へる「文字（記録）化」のために工夫された「万葉仮名」について解説を加へた。人麻呂の代表作「東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ」の五句目「月かたぶきぬ」が、本文（万葉仮名）では「月西渡」となつてゐることを紹介し、『万葉集』にこのやうに表記した人、江戸時代に苦心を重ねて読み解いた国

学者たち、明治時代に『万葉集』を再評価した正岡子規等々の多くの先人たちのお陰で今があることを語った。
最後に防人の歌に触れて、幕末の志士や戦歿学徒たちが自らを「新防人」と自任して歌を詠んだことから、参加の学生にも、日本人の心を受け継ぐ若者として「新防人」の自覚を持つべく努めようと説いた。

古典講義 「歴史を生きるといふこと——森鷗外と吉田松陰を読んで」

（株）寺子屋モデル 講師頭 廣木 寧氏



「徳川時代末期の年号である嘉永と安政の時代の文章を皆さんと読み味はほしい」と語って講義を始めた。まづ森鷗外が大正五年に発表した『渋江抽斎』を取り上げて、「抽斎は、吉田松陰の父親とほぼ同年齢で、医官にして文学哲学に造詣の深い人であって、鷗外はたまたま知って深い愛着を覚えた。『もしわたくしが抽斎のコンタンポラン（同時代人）であったなら』と親愛の情を語ってゐた」との話を紹介し、歴史上の人物にふれて「コンタンポランであったなら」といふ感慨を覚えたならば、その時、人は歴史上の人物と同じ時空を生きてゐることになると説いた。

続いて、嘉永安政の時代を烈しく生きた松陰の文章を取りあげ、「嘉永四年（一八五一）に江戸に出て勉学にはげむ松陰は、自己の血肉とならぬ学問修業に不安であった。郷里の兄宛の書簡で『僕学ぶ所未だ要領を得ざるか、一言を得て而して斯の心の動揺を定めんと欲す』と書いた。その『一言』が松陰にとつては、二年後に突如浦賀に來寇したペリー率ある米國艦隊である」と指摘した。「ペリー來寇以降、松陰は活き活きと目覚め、日本の危機が松陰になすべきことを明確に教へた」と説いて、松陰が日本を守るために、師佐久間象山と謀つたのが下田踏海事件であつたと語った。

嘉永安政期に生きた抽斎と松陰の人生はそれぞれ異なるが、「私たちに日本人とは何かを自覚させるものである」と述べ講義を終へた。

講義 「日本の国から」

国民文化研究会理事長 今林 賢 郁 氏



まづ「日本の国柄」について、「かうあつて欲しいといふことではなくて、かうであつたといふ『事実』について話をしたい、特に若い諸君に『事実』を知つてほしい」と語つた。

国柄や国体の意味について辞書の言葉を紹介した後、「憲法」には国柄や国体の内容が書き込まれてゐてこそ国家の根本法たり得るはずと、日本国憲法と大日本帝国憲法とを比較、「天皇を抜きにして日本の歴史を述べることは出来ない」として、今上天皇、昭和天皇、明治天皇、孝明天皇の四人の天皇方のお言葉や御行動の跡を辿りながら、「天皇はいつの時代にあつても、天皇のみ位については厳しい内省のお心を持ち続けられながら、常に国平たひらかなれ、民安たみやらかなれと祈り続けられ、国難ともなれば御自らのいのちを投げ出される。このやうな方が天皇であり、我が父祖たちはそのお言葉や御行動を見て、天皇を敬ひ忠誠を尽してきた。慈愛と忠誠、これが日本の国柄である。この姿が国が始まって以来二千年以上にわたつて一度も途絶へることなく続いてきた事実は世界の奇跡と言つていい」と説いた。

この後、徳川幕府の朝廷への厳しい干渉、監視の中で、どのやうなお心で天皇方が幕府に対峙されたかを七人の天皇のお歌に触れられた後、遡つて「神武天皇即位建都の大詔」を紹介し、初代の神武天皇から今日に至るまで、ご歴代の天皇は国民を「大御宝」おみたまからとして常に大事にされて来たこと、そして、この国柄を守ることができるかどうかは国民の心ゆたに委ねられてゐると語つた。



冒頭で、今合宿が古い日本の歴史の中でも重要な「香椎の地」で開かれたことに触れ、さらに恩師（福岡県立修猷館高校の元教諭）で、国民文化研究会で長くご指導をいただいた故小柳陽太郎先生のご自宅が近くにある思ひ出の地でもあると語った。そして、今後私達がどのやうに勉強していったらいいのか、レジュメを繕きながら各講義を振り返った。

高木悠、武田有朋両氏の講義で取り上げた吉田松陰や西郷隆盛の言葉からは「どう生きるのですか」と問ひ懸けられてみたと指摘した。また和歌を取り上げた山口秀範氏によって古代の防人から「無窮国体を防護」すべく自刃した将校までの系譜がたどられたと語った。森鷗外と松陰の文章を取り上げた廣木寧氏では、歴史上の人物と「同時代」の時空に生きて自由に行き来する学びの体験を示されてみたと指摘した。

歴代天皇のお歌と御言葉を取り上げた今林賢郁理事長の講義の中に、靈元天皇の「敷島のこの道のみやいにしへにかへるしるべもなほ残すらむ」といふお歌があったが、こうした深い祈りを味はふことなしに「日本の国がら」を感じ取ることは出来ないだらうと語った。

日本が直面してゐる大きな問題は一人一人が考へていかねばならないが、ここでの学びを折々思ひ起して事に処してほしいと述べた。

講話 「持論ア・ラ・カルト―戦後七十年に思ひを馳せて―」

九州電力株相談役 松尾新吾先生



「日本はサンフランシスコ講和条約で独立してゐるはずだが、日本の実態はどうか。日本はどのやうにしていけばよいのかを考へよう」と述べてお話を始められた。

日本人とは「先祖、先輩を敬ひ、大人も子供も思慮深い」と外国人から見られてゐた」とお述べになつた。

そして「日本が侵略戦争を起したのではないことは資料によつて証明されてゐる」と説かれて、大東亜戦争の『開戦の詔書』に「帝国は今や、自存と自衛の為に、決然と立上がり、一切の障害を破碎する以外はない」と自存自衛の為の戦争であると記されてゐることを指摘され、「敵国の将であるマッカーサーも昭和二十六年五月三日の米国上院軍事外交合同委員会の公聴会での証言で、それを認めてゐる」と説かれた。最後に日米安全保障条約の条文と日本国憲法の成立の経緯にお触れになり、「日本国にふさはしい『真の憲法』の制定が必要である」と述べられた。

閉会式

主催者を代表して小柳左門氏（原土井病院院長、本会会員）は、『歴史に学ぶ』とは自分との出会いである。身近なところに歴史の実体がある。歴史の真髄は先祖の願ひに気づき、それを受け継ぐ慰霊にある。合宿で共に学んだ友と手を携へて歴史の魂を受け継ぎながら取り組んでいませう」と語り掛けた。続いて、古川広治運営委員長は、「開会式の際に『歴史に学ぶ』といふことに真正面から向き合つてほしいと述べたが、この合宿で心に刻まれた言葉を今後も温めて学んでいってほしい」と語つた。そして、京都大学工学部三年江島亨君の閉会宣言を以て「合宿教室（西日本）」は閉幕した。

合宿運営

【本部】

運営委員長 福岡南公共職業安定所
記録班 福岡県立朝倉高等学校教諭
古川 広治
黒岩 真一

【指揮班】

指揮班長 榎ハウインターナショナル
 榎寺子屋モデル 桑木 康宏
福岡大学経済学部科目等履修生 西山 八郎
小林 拓海

【事務局】

事務局長 国民文化研究会事務局長 奥富 修一
福岡中小企業経営者協会 栗方恵美子
横尾 仁美

走り書きの感想文

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、二泊三日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のまま掲載してあります。



第一班

男子学生

事実を知ることの重要性を強く感じた

(東京大学大学院 理学系研究科 博士課程二年 高木 悠)

先人の文章をまごころを持つて感じることの大事さをこれまでの学びで感じてきました。しかし、今回の合宿教室ではそこに至るまでには事実を知ることを缺かすことができないことを強く感じました。廣木寧先生の御講義で「歴史を生きたといふことはその人とコンタンポランだといいなあとと思ふことだが、そのためには知らなければならぬ」と語られ、それが強く響いたからです。各先生の御講義でも事実を知ることの重要性が語られ、班別研修でもこのことを感じました。班別研修では合宿教室が終った後、これから何をしていくかについて語り合ふことが出来良かったと思ひます。一人一人がそれぞれの場で、励まし合ひながら学びを深めてゆければと思ひます。私は御製を深く読んでゆきたいと思ひます。

香椎宮にて急ぎ不老水へ行く

兩の手に注ぎてもらひし一口の不老の水は甘くてうまし

歴史とは昔と今とをつなぐものだと感じた

(福岡大学 経 四年 高山拓也)

私は合宿の前まで、歴史とは昔、過去の事というイメージを持っていました。しかし、合宿を通じて、歴史とは昔と今をつなぐものであり、私達は既に歴史の一部、歴史を生きているのだなと強く感じるようになりました。私は自分の中で勝手に今と昔の間に大きな穴を空けていたように思います。講義を受ける中で、その穴をふさぐことのできる歴史を、より身近に感じられたのは、今上天皇陛下の御言葉でした。この御言葉、そして今上天皇陛下の御考えそのものが、講義で学んだ歴史そのものを体現されておられる様に感じました。まずは同じ時代に生きていらっしやる今上天皇陛下、皇后陛下の御考えや御言葉に触れていくことが、私の中では歴史に触れる入り口になるのではないかと考えます。

今上天皇の御言葉を読み

即位以来過去の天皇の歩まれし道に度々に思ひを致されしと
ふ

わが国の歴史は陛下の御言葉に体現されておりと思ひき

充実感と義務感を感じた

(佐賀大学 理工 三年 井上賢生)

合宿を終えた今の率直な感想としては、「充実感」と「義務感」の二つの感情がある。一つ目の「充実感」は、講演、その後の班別での研修で一つのカリキュラムに対して考える時間が最低三時間のセットでぎっしり予定に入り、班メンバー

と意見を交わし合い学習をより深める事が出来た。二つ目の「義務感」は、この合宿で行われた講義は、全体を通して「日本、日本の歴史」の理解を深めるもので、その中で知ったのは、日本の将来、子孫を想い、命をかけた偉人・賢人・学徒・防人の日本の先輩達の話だった。今までは、何か日本で起きても、自分に直接関係ないことだと知らんぷりを決め込む自分であったが、今回の合宿で、日本のために命をかけ、猛烈に生きた人々を知ってしまったことで、日本で起こることに無視を続ける程の「無責任さ」は、ほとんど無くなり、むしろ歴史を知った者としての「義務感」を感じている。

吉田松陰の言葉を輪読して

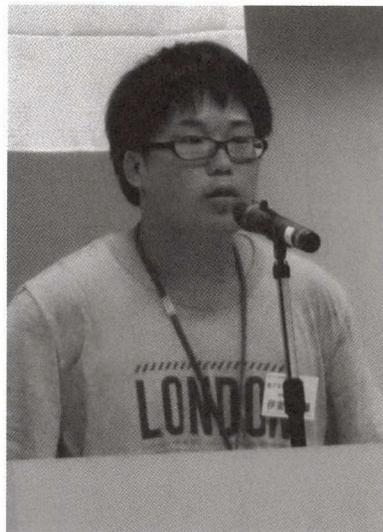
聖賢の言葉を喜び踊るとふ松陰のごと我も学びたし

次の合宿に参加する時は成長した姿を見せたい

(皇學館大学 文 三年 江崎義訓)

今回で三度目の参加となったが、毎回合宿が終わる度に次来的时候には、より知識を身につけて行こう、と考える。過去の二回はもう過ぎたことなのでどうしようも無いが、今回の経験こそは自分で生かすことが出来るよう、努力をするつもりだ。吉田松陰は士規七則の中で「聖賢を師とせずんば、則ち鄙夫のみ」と言ったが、大学三年になってやっと師とすべき聖賢をみつけることが出来た。大学生活は残り一年半しか無く、学業のみに専念することが出来る時間は短い。来夏

カメラ・レポート1



開会式。福岡大学法学部二年の伊藤駿輝君（右）の開会宣言で合宿教室は幕を開けた。主催者を代表して今林賢郁理事長（左）は、先入観やマスキの流す情報などに惑はされることなく、今を生きる一人の日本人としてどのやうな心構へで生きていけば良いのかを、まづ自分自身の心と頭で考へて貰ひたい、と挨拶した。

は実習等の関係上参加が難しいかもしれないが、又いつか合宿に参加する時迄には必ず成長した姿を見せたい。

吉田松陰の土規七則を辿る講義を聴きて

先人の遺せし文を鏡とし我も心をみがかむと思ふ

一緒に勉強をしてくれる仲間を大切にしようと思う

(福岡大学 法 二年 伊東駿輝)

合宿教室では講義の後に班別研修がありました。講演会の時は感想を一人で考えるのですが、合宿教室では自分の分がなかった所、他の班員の視点を知ることが出来、自分の間違っている部分を理解することが出来たので、いつもよりもお話をして下さる方の伝えたいことが掴めたと思いました。しかし、この折角手に入れた知識も、これからまだまだ勉強していかないと、合宿が終わってすぐに忘れてしまうと山口秀範先生にお言葉をいただきました。今までも全く勉強が足りないと感じていたのに、より勉強が足りないと感じてきました。歴史の知識を身に付けるには本を読む以上の手段は無いので、本を読む機会を増やさないといけないと感じました。それを続けていくためにも、一緒に勉強をしてくれる仲間を大切にしようと思います。

班別研修の折に

一人では解らぬ文も友皆と読み進むれば胸に響き来

歴史に学ぶとは偉人の生き方を
心で感ずることだと気づいた

(中村学園大学 流通科学 一年 野村陸斗)

「学ぶ」ことに関して、私は間違つた認識をしていました。知識を蓄える、それを応用する、その程度だと思つていたのです。歴史に学ぶ、この合宿を受ける前と後では、この言葉に大きな「差」があります。歴史に学ぶとは、出来事や偉人達を知るだけでなく、生き方、考え方、ポリシーを心で感じることだと気づきました。そして、吉田松陰や森鷗外、西郷隆盛の著作を輪読して、全体を通して一つ気付いたことがあります。歴史を築いた偉人達は、一本大きな太い芯を持っているということです。これは単純に格好が良いもので、私が持つておらず、欲しいと思つていました。今まで色々なことを諦めて来て、それが癖ようになっていたので、これから私は、何事も簡単に諦めないようにしていきたいです。

班別研修の折に

班友の感想聞けども先人の思ひに迫れず悔しく思ひぬ

祖先の思ひが現代につながつてゐることを感じた

(鹿児島県鹿児島市役所 有村浩明 53歳)

山口秀範先生の御講義の後、万葉集の防人の歌、その後の防人の系譜に連なる歌を班員皆でじっくりと味はふことができたと思ふ。遠い昔の祖先の思ひが昭和の時代につながつて

あることを、実に不思議なことながら素直に受けとめることができた。そのことが、今上陛下の御製、御言葉にも連なつてゐることを感じられたと思ふ。

山口秀範先生の御講義を聴き人麻呂の歌を読み

安騎の野に皇子を守りて宿りする臣らの姿目に浮かび来ぬ

亡くなりし父皇子偲び寝ねがてに夜空を仰ぎ過ぐしましけむ

東の野に光射す瞬間に臣らは西の月を見やりぬと

父皇子を西に見送り東に朝を迎ふる皇子を仰ぎぬと

班別研修で御製を拝誦して

友皆で声をあはせて大御歌読みあげゆけば心すがしき

繰り返し読みあげゆけば声そろひ歌の調べのとのひゆくも

室内に友らの声のみ響きわたり御歌の調べ胸に迫りく

第二班 | 男子学生

「無私」「至誠」の生き方に心を動かされた

(日本電信電話株 武田有朋 34歳)

今回は二泊三日といふ短い日程であつたが、初日の班別研修から硬くならず各々の意見、考へが述べられ、日程を順調に終へられた様に思ふ。テキストの理解に苦しみながらも輪読や意見交換を行ひながら、作者の心に迫っていく時間を持つことができ、大変良かった。

カメラ・レポート2



オリエンテーション。古川広治合宿運営委員長は、「歴史に学ぶ」といふこの合宿のテーマの意味するものは何か。その意味するものに真正面から向き合つてほしい、と呼びかけた。

また、今回の合宿を通じて強く感じたのは、私が選んだ文章や講師の方々が選んだ文章に、通底するものがあるといふことである。吉田松陰の激しい文章、天皇陛下の静かで穏やかな御言葉、西郷隆盛の飾らないきつぱりとした言葉、それが作者のお人柄を表す様に異なつた姿として感じられたが、いづれにも「無私」「至誠」の心が感じられた。我々日本人は古へより、かういふ生き方をしてきたのだ。だから現代の我々もこの生き方に心を動かされるのだ、と思ひ嬉しくなつた。

最後に、西郷南洲遺訓について、読めば読むほど、お前は どう生きるのか問はれる気持ちが強くなり、恐ろしくなつた。初めての経験だつた。その点においても思ひ出深い合宿となつた。

廣木寧大兄の「講義

先人の心はふみよりひたすらに学ぶ外なしと大人ののたまふ

日本のため世界のために、何かを為したい

(佐賀大学 理工 四年 古賀王誠)

この合宿に参加して気付けたことが二つあります。一つは、偉人たちのカッコよさを深く知れたことです。吉田松陰、西郷隆盛、森鷗外、正岡子規の語つた言葉や手紙を読み、その情景がイメージでき、とても分かりやすく、このような感じで生きてたのかとタイムスリップして実際に見ているかのよ

うに理解できました。

二つ目は、日本の良さを知れたことです。古典が嫌いだつた私は、万葉集は純粹に日本人の考えを知れるんだよと学んだ時、感動して古典や短歌に対する考え方が変わりました。また、天皇が国民を思う姿勢が、初代く一二五代まで続いている事実を知り、日本に対する誇らしさを抱きました。

最後に、カッコいい先輩達、時には困難に遭いながらも信念をもつて突き進む姿に心を打たれ、私も何か日本のため、世界のために為したい、とより一層思いました。有難うございました。

我知りぬみ祖の努力でここにありしからば我はいかに進まん

「大事なものは目に見えない」

(京都大学 工 三年 江島 亨)

私がこの合宿に参加したのは、父親に勧められたこと、そして、以前から大河ドラマが好きで日本史に興味があつたからです。今回の合宿では初めて学んだことが多く、中には未だに自分の中で噛み砕くことができていないものもあります。自分の心に残つたものをいくつか取り上げたいと思ひます。

一つは、「大事なものは目に見えない」という言葉です。以前より私はあまり語学が好きではなく、実際に長い時間をかけて噛み砕いていけば、どれも深い意味があるということ

薄々気付いていたにも拘らず、そういう時間とは無縁の生活を送ってきました。今回の合宿でこのような体験をしてどんな問題に対しても真剣に向き合ってこそ得られるものがあるということを実感することができました。

二つ目は言葉、文章というものの素晴らしさです。最初の高木悠先生の講義の中で「冊子を披繙せば、嘉言林の如く、躍々として人に迫る」という松陰の言葉が出てきました。その後の講義でも様々な文章に触れてきましたが、その時の情景やその人の内面が自分の中に映し出される感覚や、体に沁み渡るような感覚を実際に体験し、これまで表面の意味だけをなぞってきたものとは違う言葉の素晴らしさを実感しました。一つ目と繋がる場所もありますが、これが言葉の目に見えない大事なものの、素晴らしいところなのかなと思いました。

最初に私は、未だに自分の中で噛み砕けていないものもあると書きましたが、それに対し、「分からないうところがあるのも楽しみの一つだよ」と班付の方がおっしゃってくれました。また「分からなくても、一つ自分の心に残ったものがあるならば、それをずっと心に留めておけばいい」ともおっしゃってくれました。そういう意味で私は、この合宿で学べたことも、少し分からなかったことも、今後の自分の生活の糧になるのではないかと思います。

カメラ・レポート 3



合宿導入講義。東京大学大学院理学系研究科生 高木悠氏は、自らの体験を交へつつ吉田松陰の『土規七則』を読み解き、班別研修では堂々と自らの思ひを述べ友の言葉に耳を傾けてほしい、と語りかけた。

自分の命をかけて民を守ろうとした

天皇陛下の姿勢に心を奪われた

(福岡大学 経 一年 西田忠正)

この合宿で一番心に残った事は、昭和天皇の話です。『終戦秘史』の中に書かれてあった「自分は如何になろうとも、万民の命を助けたい」という覚悟、『宮中見聞録』の中に書かれていた和歌の中にも「身はいかにならむとも」という言葉が何度も出てきました。自分の命をかけて民を守ろうとした天皇陛下の姿勢に心を奪われ、皇室に対する尊敬の念が今まで以上に膨れ上がりました。天皇制とは何か？国体護持とは何か？それを今一度考えるいきっかけになりました。参加して良かったです。

夏の暮れ見知らぬ人とくらす時不思議な縁よまことうれしき

先人の言葉は、とても深みがあつた

(福岡大学 経 一年 赤嶺遼介)

今回、大学の授業の一環で合宿教室に参加しました。普段はこのように昔の人々の考え方や思想、日本に対する思いをじっくり勉強する機会がないので、一度自分が学校で習った内容はリセットし、新しい知識を得るつもりで臨みました。

まず、吉田松陰の言葉に触れるという講義があり、続いて西郷隆盛の言葉に触れる講義がありました。なぜ先生方が幕

末の人々の言葉を引用したのか、今になって考えると、その時代こそ、まさに日本とは何か、天皇とは何か、といった日本国と日本人の関係があらわになった時代だったからだと思います。大きな変動の中で日本がより良い道に進むために命をかけて尽くした先人の言葉はとても深みがありました。そして先人が守りたかった日本の一員として、私は今考えるべきことがたくさんあります。

先人の言葉をみつめ己を見生きる責任また伝へ行く

歴史を学ぶのではなく、歴史に学ぶことを教わつた

(中村学園大 流通科学 一年 井上 諒)

今回、全国学生青年合宿教室に参加したことで得られたものはとても多いと私は思えた。まず一つ目に、多くの先生方の講義を間近で受講できたことが挙げられる。普段通りの生活では受講することのない、東京大学の院生の方や国民文化研究会の理事長の方など、多くの素晴らしい先生方より、歴史を学ぶのではなく、歴史に学ぶための講義をしていただけだ。その中でも、高木悠先生の土規七則のお話は、吉田松陰の書を読み、行動する情熱がひしひしと伝わってきた。二つ目は、班別研修が挙げられる。大学の授業では講義が終わるとそれまでであるが、今回の合宿の様に、講義が終わるとすぐに私以外の感想を聞くことにより、私の中では見出せなかつた発想や考えを聞くことのできるとても有意義な時間とな

り、さらに友人をつくるきっかけになった時間でもあった。香椎宮の散策では、とても大きな綾杉を見ることができ、暑い中ではあったが、楽しい時間を過ごした。

私はこの合宿で、これからの自分の生き方や大東亜戦争についての真実について考えることで、確実に成長できたと確信している。最後になりますが、今回はためになる合宿に参加できたことに感謝しています。ありがとうございました。

文章に表現するしかない

(福岡県立明善高等学校教諭 與島誠史 54歳)

平成十二年の夏合宿に参加して以来、十六年ぶりの夏合宿参加となった。その間、小田村寅二郎先生、小柳陽太郎先生をはじめとして、数多くの先生方、先輩、友人が他界された。

私の学びの道に指針を与へて頂いた夏合宿の運営が、年を追ふごとに困難を極めてある現状を思ふとき、自分に何ができるのか、模索しつつあります。今回、二班の班付として5名の学生諸君と二泊三日を共に過ごし、素直な感想を述べ合ふ彼らの姿勢に、今後にむけての希望を抱きました。その上で、今の自分が出ることは、学んできたことをより具体的な文章に表現する途しかないと思つてゐます。運営委員長をとめた古川広治君をはじめ、この合宿に携はられた方々に感謝申し上げます。

香椎なる地に生まれしこの集ひわれらが行く手照らし給へや

カメラ・レポート 4



朝の集ひ。朝の清々しい空気を胸一杯に吸ひながら体操を行った。

第三班 男子学生

諸先輩方のような人物になれるよう励んでいきたい

（上野学園高等学校音楽科講師 武澤陽介 36歳）

私にとって今回の合宿は、初めて責任ある班長の立場での参加だった。経験や学識に乏しい私が、班別研修で若い学生たちの意見をまとめていくことができるのか不安だった。しかし、実際の班別研修では、初日は若干消極的な場面があったものの、ご講義に対する瑞々しい感想が次々と出てきたため有意義な時間を持つことができた。また、私が特に感動したのは、学生に対する班付の折田豊生さんの接し方である。どのような発言に対しても誠実に優しく応え、導いていく姿勢は、毎時間、驚きと感激の連続だった。至誠とはまさにこのようなことを言うのだろうと思つた。まだまだ勉強の足らなさを痛感してばかりだが、今後も勉強を続け、諸先輩方のような人物になれるよう励んでいきたい。

よりよく生きようとした先人の姿、言葉を

学ばなければならぬ

（福岡大学 経 卒 岡部智哉）

合宿教室では様々な偉人の言葉・歌に真摯に向き合い、講

義の最中や班別研修で抱いた自分の考えと、同じ班員から発せられる意見を交えながら、その人物の伝えようとすることばの真意を汲み取らなければならぬ。今合宿のテーマは「歴史に学ぶ」、副題を「現在をよりよく生きるために」と掲げており、各先生方の取り扱う先人や言葉は選んでおり、常に掲げられたテーマを頭で思い返ししながら、講義に臨んでいた。

吉田松陰や西郷隆盛の生き方、言葉に触れるにあたり思う事は、生きることを問うていることである。土規七則然り、南洲遺訓然り、両者が、生きる点であるような事を大切にしていたという事実がそこに在り、共通し得る志を立てる重要性や至誠を持って人に接するということも、生き方を問うその中で自然と生まれ出たものであるように感じる。

よりよく生きるには、よりよく生きようとした先人の姿を、言葉を学ばなければならぬ。そんな考えが今合宿教室で学び得たことの一つである。

より多くを吸収できるように集中した

（佐賀大学 文科教育 四年 田中幸輝）

「感想文を書いて終わりか」と思うと「ホッ」としてしまいます。今回の合宿二泊三日は早かったような短かったような。今改めて振り返るとあつというまだったと思います。

合宿期間中は、寝そうになった場面が何度か。その度に周

りの参加者を見て気持ちを高めました。皮膚を爪でつねり寝ないように時間を無駄にしないように、より多くを吸収できるように集中しました。

内容については、私は、二度登場した吉田松陰さんについて関心・興味が湧きました。教育以外の事業は、全て上手くいかず、月に四十冊は読み、自分と重ねて狂った様に感情を表す。すごく一生懸命で不器用で、なんだか可笑しいな、と思いました。しかし、もし松陰さんと一緒にいたとしたら、(僕が)あまり居心地がよくないかもしれません。死を恐れずにつつこむ姿勢は、学びたいものです。

歴史に学ぶという事の奥深さ、難しさを感じた

(西南学院大学 法 四年 松野尾京介)

私はこの合宿に参加し、多くの事を学ばせていただきました。

先ず合宿のタイトルにも在る様に「歴史に学ぶ」という点につき「現代に生を受けた我々が、これほどまでに過去の人々の教えを今に生かす事が出来るのか」と感銘を受けました。

又、班長・班付を務めてくださった方々の知識量の多さに圧倒されましたが、自分では知ったつもり、分かったつもりでいた事が、年長者の方々のお話を伺うと実は理解出来ていなかった。又、考えが浅かったという事に気付くという経験をし、自らの勉強不足を恥じるばかりでおりました。加えて、

カメラ・レポート5



朝の集ひ。上野学園高等学校音楽科講師の武澤陽介氏による唱歌の歌唱指導を受け、合唱した。

歴史に学ぶという事の奥深さ、難しさを感じ、今後よりいっ
そうの努力をしようと心に決めるきっかけともなりました。

今回の合宿で、素晴らしい方々と出会い、素晴らしい講義
を受ける事が出来、大変ありがたく感じております。関係者
の皆様、本当にありがとうございました。

自分自身の欠点を見つめ直す機会になった

(福岡大学 経 一年 福地晃大)

開かれる前の準備の日も含めて三泊四日の合宿教室に私は
今回初めて参加しました。実際にこの合宿を通して吉田松陰
や西郷隆盛の知られざる一面や、短歌の本質に触れられる事
ができ、充実した日々を過ごせたと思います。しかしその反
面に、私は自分自身の欠点を見つめ直す機会にもなりました。
私はあまり人と話す事に慣れてなく、普段の生活の中で人
と触れ合う事も少なかつたのですが、今回の班の研修などを
通して様々な人たちと触れ合いながら、ダメな自分と対峙す
る事ができたと思いました。

今回の合宿で学び経験した事はとても貴重な事だと思つて
おります。これから勉学に励む上で今回の経験を大切にし頑
張りたいと思います。このような機会を設けて頂きありがと
うございました。

講義の内容を再び考えて、自分の力にしていきたい

(長崎県立大学 地域創造 一年 橋本侑樹)

私は今回はじめて全国学生青年合宿教室に参加して、吉田
松陰の「士規七則」、西郷隆盛の「西郷南洲遺訓」など多くの
ことをはじめて学びました。講義の内容は難しかったですが、
講義の後の班別研修のところで班の人の感想や意見を聞いて
別の視点からみることで、少しは理解できたのではないかと
思いました。

今回の講義で出てきた「士規七則」や「西郷南洲遺訓」は
原文のままであったので理解するのにとても時間がかかった
が、高木悠先生の講義の中で出てきた、古典はするめに似て
いて、かめばかむほど味がでて味わうためには顎を鍛えてい
かなければならないと思いました。

今回三日間で学んだことをすぐに忘れてしまわないように、
もう一度レジュメを読みなおしたりして講義の内容を再び考
えて、自分の力にしていきたいと思いました。

次回参加するまでもっと勉強してきたいと思いました。

率直で真摯な諸兄と出会った機縁を

心から有難く思つてゐる

(元熊本市役所 折田豊生 65歳)

余りに短い合宿で、語り尽くせない思ひが残る。今年も率
直で真摯な諸兄と出会った機縁を心から有難く思つてゐる。

国文研は研究会である。新たな友らが新たな研究者の一員として永く学びの輪につらなり、交友の志を共有し、延いては共に国家社会を支へる力となつて、協け合つていけるやうになつたら有難い。

陽の光照射す広き芝の上に友らと語る朝の集ひに

学び合ふ集ひの恵みの深まりは友らのおもにも表はれてあり
よき友らに恵まれにけりこの年も学びのにはに寄り集ひ来て
人麻呂の胸惚びつつ仰ぐかな傾ぶきゆる有明の月

第四班—女子

学問とはどういうものか

(株)ファミリーマート 平井仁子 32歳

運営の皆様、講師の皆様のおかげで大変濃密な合宿となりました。班員の皆さんが、それぞれの悩みや実体験を本音で語って下さり「人生とは、学問とは、短歌とは、日本とは」ということを深められました。特に、「学問とはどういうものか」ということは考えたことがなかった学生さんも多かったのですが、皆が大変ポジティブなことを言ってくれました。『西郷南洲遺訓』七の「其の指支（その場しのぎ）」の例で大学で単位を取ることがそうなる人がいると話していて、大学の皆さんが「その場しのぎ」ではなく、学問をしようと思

カメラ・レポート6



講義。西日本電信電話(株) 武田有朋氏は、『西郷南洲遺訓』に窺はれる「無私」「至誠」に通じる生き方や考へ方は、昔から日本人が大切にしてきたものであり、この合宿の中で触れる文章や短歌からも、真心で学ぶ学問の大切さを感じてほしいと呼びかけた。

つていらつしやるのがとても嬉しいです。

「短歌のエネルギ―、お茶目さ、純粋さや、天皇陛下の大御心についても改めて感動しました。先人の方々の生き方、志は憧れ尊敬するものばかりです。この度はたくさんの気づきを頂きまして、ありがとうございます。」

暑き中歩き回ってたどり着き見つけし水の冷たさしみる
敗戦し国防教育奪はれて英霊祀れぬことの悔しき

「短歌の世界は情景が思い浮かぶ

(学校法人中村学園 森 光世 32歳)

日本人としての自覚を持つことについて、先人の生き様や言葉から多くのことを学びました。まさにテーマの通り「歴史に学ぶ」ことから、自分自身や自分の周りにいる様々な人々、日本中・世界中の人達がよりよく生きるために、何が大切なのか、ヒントをいただきました。今後はまず歴史の事実を知っていくこと、先人の行動から自分自身の志を見つけて行動をとっていくことを始めたいです。また、短歌の世界からは、歴史の様々な情景が思い浮かびました。その時の気持ちを歌に残すということは、とても大事なことだと感じました。日常生活で取り入れていきたいと思っています。

大学職員として、時代の変化に対応した教育活動の必要性を感じています。学生さんと腹を割って話すことができ、このような場で学べたことに感謝致します。ありがとうございます。

ました。

躍々として私に迫る

(鹿児島大学 医 六年 市地さくら)

この合宿で学んだことは私の人生の宝となるだらう。知らないといふことは罪ではないが、知らうとしないことは罪である―今、日本に生きる日本人として、この国の歩み、先人たちの思ひを知らうとすることは、私たちの務めである。何不自由なく、根のない草が漂ふやうに生きてゐる私のやうな若者を見て、(こ)講義で「金塊集について」が取り上げられてゐた(茶谷武さんのやうな、この国を守る為に命を捧げた方々はどう感じられるだらうか。偉大な先人たちに恥づかしくない生き方をしていきたい。

「冊子を被緋せば、嘉言林の如く、躍々として人に迫る」松陰先生の『士規七則』にあるやうに今回の合宿教室では先人たちの御言葉や講師の先生方の熱い想ひ、班員たちの学ぶ意欲が躍々と私に迫ってきた。この貴重な経験を与へてくださった全ての方々に、感謝致します。

輝ける緑に子らの笑ひ声今日も穏やか戦後七十一年

生きていくうえで何を大切にしたいか

(名古屋大学 情報文化 四年 森下実佐都)

これまで学校生活で学んできたものとは異なる見方、又、知識に対する解釈の仕方を知りました。今はまだ「信解」には到らず、今後も深めていかなければと思いますが、これまでの「知解」から次のステップへ向かう進み方を習いました。今回、この合宿に参加して良かったと思う点は、これまで知って満足していた歴史や偉人について改めて深めていきたいと思います。深め広げることでも何を学ぶことができるのかを知り、今後社会で生きていくうえで自分自身が何を大切にしたいかを考え直すきっかけになりました。班別研修においては様々な経験を積んだ班員と講義の解釈や互いの考えを交換し、自分の考えだけでは思いつかなかった視点や素直な言葉を聞くことができ、とても充実していました。良いメンバーにめぐまれ、実りの多い合宿でした。ありがとうございました。

日本の深き歴史を語りつつ新たに進む未来を思ふ

一昔前の同年代の若者の生き方

(福岡教育大学 教 二 年 有馬佳奈子)

今までの人生の中で得た歴史に対しての認識、知識はまだまだ浅く知らないことだらけだったことを実感させられました。日本人として生を頂き、何不自由なく学問を続けていられる今のこの時代、環境は決して当たり前のことではなく、多くの日本人の我が国発展への思い、熱い心があつてこそで

カメラ・レポート 7



野外研修。挨拶される香椎宮宮司様(右)。榊石村萬盛堂社長 本会参与石村善信氏(左)から、香椎宮が仲哀天皇及び神功皇后を御祭神(主神)としてお祀りしてある古きお社であり、明治十八年に官幣大社の指定を受け定期的な勅使のご差遣を仰ぐ勅祭社であるなどの説明があった。

あり、改めて多くの先輩方の存在があるからだと感じさせられました。自分と同世代の若者が一昔前では命をかけ学問を究め、国について考え、行動を起こしていたという姿がいかに今の若い世代が日本人として生をうけたことに対しての自覚が足りないかを考えさせてくれました。また、歴史を学ぶのではなく歴史に学ぶことをきっかけに、自己の反省として今後は、今以上に学問に励み、日本人として日本のために、多くの先輩方の思いを引き継ぐ気持ちで世のため人のために働かせて頂ける人材になれるように精進させて頂きたいと思えました。

同年の防人のうた口ずさむ心に染むる言葉の力

目標に向かって真つ直ぐ

(大分県立看護科学大学 看護 一年 向江南歩)

歴史に学ぶためには、歴史についてのある程度の知識が必要で、自分の中の引き出しが多くあると自分の思いや考えも言葉にして伝えやすいということを班の皆さんに気づかせてもらった。自分を成長させるという意味で、自分から積極的に様々な世界に飛び込み、勉強していきたい。

講義のレジュメで例に出た人物たちは、それぞれ何か目標を持っていて、それに向かって真つ直ぐだと感心した。現代を生きている私から見ると驚くほど真つ直ぐで、謙虚で、人間として見習うべきことがたくさんあり、本当にすごい人

だなと思つた。そのような立派で、すごい人を知ることができて、少し日本人に対する見方や考え方が変わったと思うので、この合宿に参加して本当に良かった。まだ講義での内容が自分の中で整理できていないので、もう一度復習して、理解を深めたい。本当にありがとうございました。

まっすぐな思ひを胸に明日を向く学ぶべきこと多くあるかな

たくさんの学びを受け継ぎたい

(長崎大学 教 一年 原田美咲)

高木悠先生の講義では書物を読むこと、思いついた時に行動すること、挫折しても立ち上がることが大切だと感じました。武田有朋先生の講義では「信解」という言葉が心に残り、自分の体験談で考えることができました。また、学問とは人を成長させるものだと考えました。山口秀範先生の講義では短歌、日本人の素晴らしさを学ぶことができました。廣木寧先生の講義はすごく難しかったので、これから理解を深めることができればいいと思います。今林賢郁先生の講義では初めて知ることがたくさんありました。天皇は本当に国民のことを第一に考えてくれていて、本当に日本の象徴だなと思いました。班別研修で色々な意見を聞いて、得るものはたくさんありました。語り合える仲間とも出会えてよかったです。そして一番感じたことは、長い歴史のある日本に生まれたことに誇りを持って生きようということです。機会があれば、

また参加したいです。

歴史から学んだことで感じたな受け継いでいこう大和魂

若い講師陣の登場

(原土井病院 小柳左門 68歳)

香椎といふ私の住み慣れた地で合宿が行はれたといふことに、不思議な、また有難い縁を感じてゐます。父が亡くなつてまもなく一年、父が生きてゐればどれほど喜んだことでありませう。

武田有朋君や高木悠君といふ若い講師陣の登場は画期的なことでした。若い諸君が、日本の国の命に目覚め、その命を受け継いでいくことこそ、私共の願ひであると思ひます。

今林賢郁理事長の講義には、誠に感動致しました。若い学生諸君の心に沿ひながら、現下の日本のかかへる最も重要な憲法や天皇の問題に、事実を見る目を求めながら、国の最も深層について語られました。

山口秀範、廣木寧、古川広治、桑木康宏君らの御努力に感謝致します。なほ一人の病人もなく、恙なく合宿が終了しました。

亡き父の御霊もよころび見ますらむ香椎の浜に集ふ友らを
父上の好みたまひし香椎宮楠の並木路をみ友らはゆく
あけぼのの空にたなびく西雲の上にかがよふ月の影かな

カメラ・レポート 8



野外研修。神功皇后が植ゑられたといふ御神木「綾杉」(右)。天を突くが如き「古宮」の御神木「棺掛権」(左)。

第五班 社会人

残された言葉を正確に辿る

(福岡県立鞍手高等学校教諭 日比生哲也 52歳)

歴史に学ぶには、残された言葉を正確に辿るしかなく、その力を継続して磨くことが求められてみると、あらためて感じた合宿でした。

また、班別研修では、明恵上人の「雲を出でて我にともなふ冬の月風や身にしむ雪や冷たき」について、一人の班員の素朴な疑問から討論が深まり、睦み学び合ふことの喜びを感じました。

今回、日程の都合で短歌創作の時間が割愛されましたが、散策後、班毎にホワイトボードを活用するなりして相互批評することも可能ではないかと思ひました。御製や名歌を鑑賞するにあたっては、やはり創作の体験が欠かせないのでないかと感じます。

香椎宮散策

仰ぎ見る綾杉の幹太くして四方に分かるる姿雄々しき

読書を深めたい

(熊本県立熊本高等学校教諭 久保田真 50歳)

班員として講義を聴き、班別討論に参加でき、勉強してきたいといふ気持ちが強くなりました。三日間共に語り合っていたいただいた班員の皆さんありがとうございました。

自分は聖賢にならなくていいと思つておりましたが、西郷隆盛の「聖賢に成らんと欲する志無く、古人の事跡を見、逆も企て及ばぬと云ふ様な心ならば、戦に臨みて逃るより猶ほ卑怯なり」との言葉に、まゐりました。「誠意を以て聖賢の書を読み、其の処分せられたる心を身に体し、心に験する修行致さず(ば)・・・何の栓無きもの也」とあり、本は読まない訳ではないですが、自分のものとなるやう、また松陰のやうに生き生きと感動しながらの読書を深めたいと思ひました。

合宿開催まで御尽力いただいた古川広治運営委員長はじめ、関係の皆様ありがとうございました。

歴史の学びを深めたい

(平山直樹税理士事務所 北村公一 49歳)

先の参院選で改憲勢力が三分の二を占め、いよいよ改憲への気運が高まるかと思はれた矢先、陛下の「生前退位」に関する報道がなされ、また八月八日のお言葉があり、どう受け止めれば良いのか戸惑つてをりました。

合宿中、講義で先人の言葉を読み味はひ、班別研修で班員の皆さんと心を砕いて話をする中で、ややもすれば性急に時流に反応しがちな自分に気付きました。

歴史の学びを深めつつ、先述した問題についても自分なりの言葉で答へを見つけたかと思ひます。

香椎宮参拝

照りつくる日差しの中を友どちと天高くそびゆる綾杉を見つ
古宮の木もれ陽のさす森の中をカラスアゲハのひらひらと舞
ふ

国のこと学びのことを夜更けまで若きみ友と語り合ひたり
とつとつと言葉を選びて胸の中語りし友の面輪輝く

深く自己の内面と向き合う

(アズ広川店 永野貴彦 37歳)

初めての合宿を通して、知識の重要性をあらためて感じました。先ず、外部環境を正しく知ることです。これまでの時代背景を踏まえた上で、現状の社会・歴史の流れをつかむために知識が重要になるということです。次に、己を知るといふことです。先人の例から、今、自分は何を考え実行していくべきか、より深く自己の内面と向き合うために、人として日本人としての精神を知る必要があるからです。また、人生を歩む上で、悔いのない、より世の為になる判断を下し続けていくために、知識に基づいた決断力が必要となるからです。知識を多く吸収し、人生において実践していく糧にしていきたく感じました。知行合一の行動が果たせるよう人に学び、本に学び、旅に学ぶ人生を続けていきたく思います。

カメラ・レポート9



講義。㈱寺子屋モデル代表取締役社長山口秀範氏は、防人の歌に触れ、幕末の志士や戦歿学徒たちが自らを防人に因んで「新防人」と自任して歌を詠んだやうに、諸君も日本人の心を受け継ぐ若者として、「新防人」たれと訴へた。

稲の苗水面に映る夕焼けよ蛙の声は喜びにけり

意義ある合宿だった

(鶴花園 礎 俊則 35歳)

今回、上司(園主)の勧めで初めて合宿教室に参加させていただきました。園主からこの合宿に行つて欲しいと言われた時は、正直戸惑いました。なぜなら、人前で発表することが苦手な社会人としても経験が少なく語れることがあまりないからです。しかし、何事も経験しないと分らないと、聞き直つて参加することにしました。実際、合宿の講義を受けて、吉田松陰、西郷隆盛、森鷗外のことを今までより少し深く知れたので良かったと思います。そして何より母国である日本のこと(天皇・国柄)を知らないということが認識できたので意義ある合宿でした。少し遅いかもしれませんが、本や資料で勉強していこうと思います。

合宿で感じた情熱を忘れずに

(榎ハウインターナショナル 石井 匠 26歳)

一昨年の淡路島合宿に引き続き二度目の参加となった。今回も先人の生きた歴史を学び、またその力強い言葉遣いに圧倒された。中でも吉田松陰先生が強烈であった。国のために命をも投げ出す姿に、私は殴られたような衝撃を受

けた。ただ無謀な事をするのではなく、しっかりと学び自分で考え、それに則つて筋の通つた行動をしようとところが特に素晴らしいと思つた。私自身、思つて行動に移すという事は頭では分かるのだが、実際に行動に移すとできなない。松陰先生は相当な覚悟を持つて行動されていて、私もなるべく近づきたいと思つた。合宿後も、ここで感じた情熱を忘れずに、より一層日本人としてのアイデンティティについて考え、仲間と意見を交わし深めていきたい。

久々の学びの機会をいただき日々力を蓄へんとす

第六十一回合宿教室の折に
(元直方高等学校教諭 小野吉宣 69歳)

玄海の潮風強く寄するらむ学びの庭の木々はゆれをり
さるすべり紅の花付け美しく我らの合宿愛でてくるるや
日の本の歴史に学び人生をより良く生きむと友等と語りき
勅使道皆と通れば今は亡き師の君偲ばれ胸熱くなる
去年の秋神去り給ふ師の君は多みを浮かべてみそなはずらむ
山口秀範兄の講義の折に

平成の新防人の伝統につながり給へとあつく語り

廣木寧兄の講義の折に

時代越え囁みが生まれ抽齋と同じ時代に生きる思ひに
(運営・指揮に尽力された方々に深く感謝致します。)

講義の内容に感嘆の連続であった

(福岡県立嘉徳総合高等学校大隈城山校教諭 酒村聡一郎 59歳)

「歴史に学ぶ」「歴史を生きる」を自らのテーマとして講義を拝聴した。まづは登壇された講師の先生方の資料の分量に圧倒され、また綿密に正確に読み解かれてゆくお話に感嘆の連続であった。鷗外の云ふ「コンタンポラン(同時代人)」と受け止め深い共感を得るためには、このやうな幅広い知識と緻密な読解が不可欠であることを痛感させられた。

今回は社会人班の班長をさせて頂いたが、班別研修では皆さんそれぞれに講義の感想や疑問点、日頃考へてをられることを肩の力を抜いて率直に語ってゆかれた。とても和やかな雰囲気での時間を共有できたことは、本当に有難いことであった。皆さんのお話から、歴史問題、時事問題、教育問題等に日頃から高い意識を持って関心を持たれてゐることが窺はれ、大いに刺激を受けた。

二泊三日の例年より短い日程での開催ではあったが、例年と変はらぬ実り多き合宿教室であった。

武田有朋・高木悠尚兄の講義を拝聴して

年若き友は日頃ゆ親しみし先人の書読み解きてゆく
忙しき生業なまひの中自らの立つべき基もと求め読みけむ



講義に真剣に聞き入る参加者達。

自らの体験かへりみ先人の言葉に迫る姿勢

一人の日本人としてどう生きるか

(S I S 棟 内田巖彦 70歳)

最近では毎年のやうに合宿教室に参加させて頂いてゐますが、今年もまた、多くのことを学ばせて頂きました。この合宿教室ではいつも、「二人の日本人としてどう生きるか」「どう覚悟して生きるか」を問はれてゐる気がします。

今回の合宿教室のテーマである「歴史に学ぶ」といふことを、諸先生方は講義の中で、用意された題材の古典や短歌を通して、若い人達に熱く語りかけられました。その姿に余す所なく現れてゐたと思ひます。これが「歴史に学ぶ」といふことなのだと感じました。

今まで何度も合宿教室に参加し、数多くの講義を聞かせて頂きましたが、日本人として生きる覚悟を一番強く問ひ続けられたのは、昨年十一月に亡くなられた小柳陽太郎先生ではなかったかと思ひます。今回、その先生のお住まひの近くの香椎浜でかういふ研鑽の場が持たれたことは、先生の御霊におかれても悦ばれてゐること、拝察する次第です。

時を隔て偉大な先人達と出会へる喜び

(農業・元小学校教員 猪部敬彦 64歳)

私は、今年が去年に続いて二回目の参加である。この合宿教室に参加することで、日頃の不勉強に喝を入れることが出来ると感じてゐる。具体的には、一人よがりの勉強ではなく、先に歩んでをられる方々の講義で、改めて方向性を確認出来ることが大きいといふことである。

また、ここに来ることで、自分の求めてゐる新しい知識を得、時を隔てた偉大な先人達と「会へる」喜びも大きい。日頃田舎に住み、地域のつながりの中で、時間を自分の思ふやうには使へないもどかしさもあるが、スローな自分の勉強に刺激を貰へることは有難い。

今回は車で来られる場所ので、短い日程が私にとっては参加のハードルを下げてくれた。本当は、私と同じ大分県に住む若者に多く参加してほしかったが…。

暑熱の中、香椎宮を散策、古の大本営跡の石碑を見て
吹き出づる汗ふき辿る奥宮に誇り伝へし石碑は立てり

懐かしいふるさとに帰つてきた想ひ

(農業 小田正三 61歳)

久しぶりに国文研の先輩方、親友に会ふことができ、喜び一杯です。元気な表情や、昔と変はらない面影、その人柄に接し、懐かしい「ふるさと」に帰つて来た想ひでした。

講義を聴き、班別の研修でたくさん意見を聞くことができました。人の生き方、考へ方、受け止め方を語り合ひ、互

ひに交はる中で、何かが生まれてくると思ひます。

久しくも声を掛け合ふ友と先輩言葉少なければど面輪に満ちて
皆ともに声に出し読み読むほどに味はひ深き古き言の葉

香椎宮

畏くもしづまりませる大宮に幹かへり立ち綾杉生きる

古典や短歌に触れ新しい自分に出会えた

(元東京海上火災保険㈱ 武田真理子 60歳)

今回初めての参加で少しドキドキした気持ちでしたが、班員の皆さんの温かく静かな雰囲気の中で、二日目、三日目になるにしたがい、楽しい班別の話し合いとなりました。

「歴史に学ぶ」というテーマのもと、それぞれの講義も深く考えさせられる事が多く、一人では難解だった内容も、班別研修で質問することによって、その都度スッキリする事が出来て有難い事でした。

今回特に印象に残った事は、神武天皇から今上天皇まで、その御製やお言葉の中に共通して貫かれたもの、それは自身の事よりもどんなに国民の事を大切に思われ、またそれを実行して来られたかということです。その事を実感しました。また、古典や短歌に触れることで、私自身その時代にタイムスリップしたような気持ちになることがあります。そのような時間を持つことで、毎日の慌ただしい生活では得られない、新しい自分にも出会えるのではないかと思えます。

カメラ・レポート 11



古典講義。榊寺子屋モデル講師頭 廣木寧氏は、徳川時代末期の同じ頃を生きた松江抽斎と吉田松陰を、森鷗外作品と遺文にそれぞれ惚んだ後、歴史上の人物に「コンタンポラン（同時代人）であったなら」といふ感慨を覚えたならば、その人は歴史上の人物と同じ時空を生きてゐることになると説いた。

わがこころ歴史の中にみつけたく香椎の宮につどひてまなぶ

中身の濃い充実した二泊三日であつた

(上天草総合病院 福田 誠 60歳)

従来の合宿教室と比べて、日程・場所の変更があつたが、より参加し易く、かつ中身の濃い充実した合宿教室であつたと思ひます。運営委員長はじめ運営に携はれた方々、御苦労様でした。

講義や班別研修も充実した時間で、自分の勉強不足、努力不足を感じ、これから努力しようと思ひます。

香椎宮の散策は、古事記の世界を目の当たりにしたやうで、大変貴重な時間でした。

充実した二泊三日の合宿教室でした。ありがとうございました。

仲哀天皇御崩御の地を訪ひて

古事記にも記されしことをまのあたり見る心地せり香椎の宮は

なまなまに弾き給ひたる琴の音の流れしはことと思へば畏し

日本人としての生き方を伝えていきたい

(熊本県立第二高等学校教諭 今村武人 53歳)

今回は社会人班に所属したが、皆さんそれぞれに日々研鑽

を積まれてをり、大いに刺激を受けた。

今林賢郁先生の御講義の中で、今上陛下のビデオメッセージにどうお応へすべきか考へてゐるといふお話があつたが、私たち日本人はこれまでの歴史の中で、いかにして皇室をお守りしていくかに思ひを致し、一方歴代の天皇様は、国民の安寧を守つていかれることに全身全霊お心を配られてきた。そのことが今回の御講義を受けて改めてよくわかつた。

しかし、今を生きる私たち国民は、今上天皇の御心を理解しようとするか。今日御皇室が続いてゐるのは偶然ではなく、国民を赤子と思はれる天皇の御心に対してそれに応へようとする国民の赤心があつたからであらう。

学校では単に歴史を知識として教へるだけではなく、歴史を作つてきた人々の深い思ひを心で受け止め、日本人としての生き方を伝えるべきだと思ふ。

素直なるおきな心の尊さをあらためて学ぶこの合宿で
合宿二日目早朝に会場に向かう

早朝ゆ一番バスに急ぎ乗りみな待つらむ合宿に向かう
教へ子が笑顔交して班友と語る姿を見ればうれしも

第七班——社会人——

第六十一回全国学生青年合宿教室に

社会人班長として参加して

(折尾愛真短期大学 松田 隆 60歳)

今回の合宿程、自分が何も知らないということが分かった合宿はありませんでした。

今まで分かったつもりであったことに気づき、明日から時間を潰つて勉強しなければならぬと考えております。

この様な状態で班長を仰せつかり、藤新成信さんや班員に助けられて、どうにか班長の役をこなせたかと思っておりますが、班員の皆様には班長として力不足で申し訳なく思います。

合宿の内容としては、学生の為に後一泊か半日程の時間が有った方が良かったのではないかと感じました。

やはり、当合宿は大学生対象の合宿の為、大学生を第一に考えるべきだと思います。

今後数年間は東西で行い、四、五年に一度、東西を一つにして合宿を行うという形が良いかと思っております。色々と大変でしょうが、今後の合宿の運営を宜しくお願い申し上げます。

久々に香椎の宮に参拝しお宮の由来を知りて喜ぶ

千早振る香椎の宮の綾衫を見上げて思ふは敷島の道

香椎宮に参拝したりて妹共々に明日にも参拝したきとぞ思ふ

カメラ・レポート 12



班別研修。講義資料を読み返しながら、心を開いて語り合ふ。

山口秀範先生と今林賢郁先生のご講義に
感銘を受けて

(一社) 福岡中小企業経営者協会 福元晶子 45歳

昨年に引き続き参加した研修では、大変有意義で良質な時間を過ごすことが出来ました。各講義はそれぞれに学びの深いものとなりましたが、中でも山口秀範先生と今林賢郁先生のご講義は本当に感銘を受けました。

山口先生の短歌のご講義では、私の知らなかった歌にたくさん触れることが出来た上に、川端康成のノーベル賞受賞スピーチを通じて、和歌、そして日本の美しさを再認識することが出来ました。恥ずかしながらこのスピーチは読んだことがなかったもので、これからしっかり読みたいと思いました。

今林先生のご講義では、事実としての憲法の比較や御製を通じた各時代における天皇陛下のお気持ち、そして今上天皇の「お気持ち」のビデオメッセージについてなど、様々な事柄から「日本の国柄」を考えることが出来た素晴らしいご講義でした。特に、ご聖断のあった御前会議でのご発言と終戦の日に詠まれた御製のお話は涙が止まらず、四首の御製は何度詠んでも心を揺さぶられました。

「読むアゴ」を鍛える新たなスタート

(南吉田調剤薬局 吉田 喜久子 71歳)

今回初めての参加でしたが大変有意義な時間を過ごす事が出来ました。

「古典を読むと、本を読みたくなく「読むアゴ」が鍛えられる。少々の難解さや退屈さには耐えることが出来る様になる。一度なじんだ古典は、再読する事で読み慣れて楽になるのに、吸収出来る栄養はふえていく。」と言う資料の言葉は示唆に富んでいて、今回はその新たなスタートとなればと思っております。

「短歌と日本人」では言葉のない時代、言葉を持たない時の歌が現代に生々と残っているという素晴らしさを感じ、川端康成のノーベル文学賞受賞記念講演の中に紹介されている先人の数々の短歌は、日本の四季折々の事が分かり易く、感動を覚えました。

講義の内容で消化不良の部分はその後の班別研修で、更に深めて行く事が出来、この研修の大切さが良く分かりました。

合宿を振り返りて

これまでの学び浅きを思ひ知り合宿の夜は寝付けず更くる
君が代もみそひともじの短歌なり国歌に込めし日本の心

元服の甥に与へし松陰の土規七則を新たに学ぶ

まっすぐにいにしへ人の詠はれし和歌に込めたる日本のこころ

雄々しさと優しき心たたへみて誇り持ちたる子等の育てよ
むつかしき人の心を解きほぐす別れ道かな知解と信(心)解は

朝の集ひにて

朝日昇る香椎ヶ浜のグラウンドに声かけ合ひてともどち集ふ
朝露に濡れし芝生のグラウンドに国歌斉唱するは清しき
濟み渡る青空の下懐かしく心ひとつに歌ふ「里の秋」

日本人の底辺に流れているもの

(熊本市嘱託職員 末次直人 63歳)

歴史を勉強する際、悩みを持っていた。日本の偉人、世界の偉人、郷土の偉人、数多く、一人一人どこまで深く勉強できるか焦りを持っていた。今回「歴史に学ぶ」と言うテーマに勉強しようと参加した。合宿の講義を聞き、一つきっかけを掴んだと思う。これは各講義の中で「日本人の底辺に流れているものはなにか?」「ををしくやさしい心が日本民族の心」とあり、これを横糸としてベースに置いて見て行けば、各偉人が繋がってバラバラにならないと思った。「ををしさ」「やさしさ」「誠」「素朴さ」「明るさ」等日本人の底辺に流れているものを、偉人の中に見つけ勉強したいと思う。

また、皇室が国民を「おほみたから」と思っていることを改めて知り、この様な「国がら」を理解し、説明していけば理論抗争になりがちな、安全保障、憲法改正の問題についても廻りの人に理解してもらえらると思う。

カメラ・レポート 13



講義。国民文化研究会理事長 今林賢郁氏は、ご歴代の天皇は国民を「大御室」として常に大事にされて来たこと、そして、この国柄を守ることができるかどうかは国民の心こころに委ねられてみると語った。

言葉を深く味はふ

歴史に学ぶテーマの下、西日本地区合宿で学ばせて頂きました。
(元大村郵便局職員 橋本公明 61歳)

歴史の行き着く所は、結局言葉にぶつかります。言葉の上
つづらでなく、言葉を深く味はふ。この確かな事をこの合宿
で学ばせて頂きました。

それは、文章に残された言葉に、班付きを含めた八人で徹
底して向かひ合ふ。この作業の下、文を味はふ作業がこれ程、
難しく、又、楽しいかを共同作業の下、学びました。

松田隆班長、班付の藤新成信さん、有難うございました。
八人と言葉の意味をあれこれと考へゆくは難しきかな

初めての合宿で先生方の御講義を拝聴して

(門司印刷株 江島和男 58歳)

今回初めて参加させて頂きました。
高木悠先生の御講義の中にあつた「土規七則」は松陰神社
で頂いてはいましたが勉強不足でした。

武田有朋先生からは、長内俊平先生の知解体解信解のこと
をもっと知りたく、この講義内容を更に深く知りたくなりま
した。

「西郷南洲遺訓」はなぜ庄内藩の人々の手によるものなの

か、西郷さんは鹿児島で人気があるのに、薩摩藩によるこの
種のものはないのでしょうか？

山口秀範先生の御講義では、川端康成先生がノーベル賞の
受賞講演で、外国人に日本を分かつて貰おうとしたのかどう
か分からないことをされたことに驚きと尊敬を感じました。

今林賢郁先生からは国体を守るとはどういうことか？国民
と皇室が信頼し合っていれば大丈夫でしょうが、今のマスコ
ミでは心配です。

せっかく学生と合宿をしましたが、交流を持てる時間があ
りませんでした。講義内容はどれもすばらしく、深いもので、
長男も参加させて頂き、感謝致します。長男にはどう感じた
か、これからどうしたら良いと思うか聞いてみます。

いにしへのかしひの宮の綾杉にやまとのくにが永遠へと祈る

初回としての香椎浜東西合宿地にて

(日章工業株 藤新成信 56歳)

香椎浜の本合宿地は東西合宿の初回として適地であつたと
思ひます。香椎宮の散策により二泊三日といふ短期間の中にも
も一定の目的は達せられたと思はれます。油山慰霊祭と短歌
合宿が補足として行はれることが却って先々の共に集ひ学ぶ
機会をつくつていくためにも良いのではと思ひます。

高木悠さんや武田有朋さんといった若い会員が合宿導入や
古典講義を引き受けて下さったことは、今後の合宿運営の新

たな道を示して戴いたものと有難く存じます。

これまで遠隔にあつて参加できなかった方々や中途参加の無理を強ひて運営してまゐつたことも今回の東西合宿試行によつて、全体に良い流れをつくり、盛り上がつて行くのではと思ひます。今後の状況を見つつ東西と全体とを折り交ぜてどうかと思ひました。古川広治さんはじめ運営の皆様まことに有難うございました。

師の君と古き神々に導かれ香榎合宿始まりにけり

歴代天皇方の「国民を先に」との思ひを感じて

(元棟アルバック 北濱 道 54歳)

今林賢郁先生の御講義で、今上陛下から昭和天皇、明治天皇、と時代を遡つてゆき、神武天皇に至る御歴代の天皇方が「国民を先に」との思ひで一貫してゐる御姿が重なつて見へ、涙が込み上げて来て仕方なかつた。

江戸時代の後水尾天皇の御製は、禁中並公家諸法度の重圧の下、御心に満たない中、どのように思はれてゐたか、もつと知りたいと思ふ。

感想文執筆中の講義室にて

おのおのがこの三日間、心籠め過せし思ひをつづりましけむ
静かなる部屋のかしこゆコツコツと聞ゆる音に胸あつくなる

カメラ・レポート 14



合宿をかえりみて。国民文化研究会理事 藤新成信氏は、合宿での各講義を振り返った後、日本が直面してゐる大きな問題は一人一人が考へていかねばならないが、ここでの学びを折々思ひ起して事に処してほしいと述べた。

新しい力を与へる新境地として

(中島法律事務所 中島繁樹 68歳)

武田有朋さんの講義―学問とはどういふものか―西郷隆盛の言葉から考へる―は、思索をしっかりと重ねた結果の素晴らしい話でした。

廣木寧さんの講義―歴史を生きるといふこと―は、日頃の歴史研究と読書と学生指導の熟練の到達度の高さを思はせました。そのご努力に感謝します。

今回から東西二つに分けて開催することになった本合宿はまだ東地区合宿は今日のところ未開催ではあるが、新しい力を与へる新境地となったと考へます。合宿運営委員長古川広治さんに感謝します。

遠き日に帝居ませる古宮の跡のありたり香椎の宮は

今を生きる私達の生き様にかかっている

(池坊華道教授 村田幸子 79歳)

清らかな美しい志に満ちた方々に接して人生が新生しました。先生を始めスタッフの方々、参加された方々、皆様有難うございました。また、どのご講義も研鑽の深さに感動致し

ました。いい加減な読書ばかりしていた自分を反省し、深く読み込んで「歴史を体験」してみようと思います

次に、明治維新より約七十年、太平洋戦争そして終戦。戦後七十年の今。あと七十年経った日本がどんな国になっているか。今を生きる私達(私の)生き様にかかっていると思います。微力であってもそれなりに頑張っていこうと思います。

どの講義もみな素晴らしかったのですが、今林賢郁先生の『日本の国がら』は始めてお聴きする内容で涙がにじみました。

日本中の日本人に聴かせたい貴いお話、有難うございました。

流れゆく時の流れに流されず守りきたれる真尊し

国文研の存在意義を再確認した

(元福岡県立筑紫丘高等学校総括教頭 小林 至 66歳)

第六十一回合宿教室が私が育った香椎の地で開催された事を変有難く感謝している。香椎宮は正しく幼き時代自然に親しみ広場の如く遊び回った場所である。

昨年十一月小柳陽太郎先生がご逝去になった。お住いが勅使道にあり、先生を偲びながら香椎宮に参拝出来た。新たな合宿で国文研の存在意義を再確認でき、若き国文研会員の講義に勇往邁進する熱き使命を確信できた合宿であった。合宿

を運営された古川広治委員長を始め、運営に携わった方々に感謝し、お礼申し上げます。

我が家は、長男家族と同居、孫二人に囲まれ、次代を引き継ぐ良きじじいでありたいと思っている。

早朝ランニングにて

父母が共に歩きし香椎浜朝日を浴びてランニングする
幼き日父に連れられ海水浴せし香椎浜の真向ひに見ゆ
御島崎の鳥居に向ひ拝みけり朝日の登りし立花山見ゆ

作者と対話できるような体験をしたい

(華泉書道会 坂本和代 65歳)

第六十一回全国学生青年合宿教室に参加させて頂き有難うございました。導入から引きつけられる講義ばかりでしたが、いつもですが、和歌が心に残ります。御製はもちろんです、字も知らないだろうと思う防人(庶民)の和歌がなぜ胸にささるのだろう。その時代の言葉は和歌だったのかと思うほどです。古典で今まで教え伝えられ残っている書物(書も文章も)も、本物だから残っているんだと思うのですが、書いた人はどんな生き方をしてあるのか、その時代にタイムスリップして、作者と対話できるように、深く／＼読み、書けたらなんと素晴らしいだろう、そうなりたいと思いました。

香椎宮に参拝して

天地の書に記されし古宮で椎の木そびえ見まもりたまふ

カメラ・レポート 15



講話。九州電力株相談役 松尾新吾先生は、日本人は先祖、先輩を敬ひ、大人も子供も思慮深いと外国人から見られてゐた。大東亜戦争が自衛戦争であったことは『開戦の詔書』に記され、敵国の将マッカーサーも認めてゐる。日本国にふさはしい「真の憲法」の制定が必要であると述べられた。

人生の折り返し過ぎもの知らぬことの多きにとまどひ学ぶ

自分の歩調で勉強を始めたい

（筑前及び博多青松高等学校教諭 藤 寛明 61歳）

久しぶりの合宿参加だった。「歴史に学ぶ」のテーマのもとに、講師の先生方の熱心な講義を拝聴し乍ら、先人の言葉や短歌をぢかに味はふことによつて、日本の歴史の中に流れる素晴らしい精神に触れることができた。再確認もあり、新しい発見もあった。原典にあたって詳しく歴史を知ることの大切さはつとに知つてゐるはずだが、やはり日頃の勉強不足を痛感した。自分の歩調で勉強を始めたいと思ふ。

読書尚友を肝に銘じて

（株）ライフプラザパートナーズ 河崎由起夫 55歳

合宿教室は四度目になります。が再確認できたことと新しい気づきがありました。新しい気づきについて列挙いたします。一士規七則より「志を立てて以て万事の源と為す。交を扱びて以て仁義の行ひを輔く。書を読みて以て聖賢の訓を稽ふ」一長内俊平先生の講義より「体解、信解を得た人は見違へる様に生活態度が変る、即ち非常に慎み深くなる。…それが私達に生きる力―元氣―を恵んで呉れ、…身についた生き方―智慧―を決定し、…文明をして処を得しめる本の力であるこ

とを信知らしめられる」

一明治維新の宸翰より「天下億兆一人も其処を得ざる時は皆朕が罪なれば…」

一神武天皇即位建都の大詔より「夫れ大人の制を立つ、義必ず時に随ふ。苟しくも民に利有らば何ぞ聖造に妨はむ。」

まだまだ媒体として未熟、不勉強であると反省されます。これからも読書尚友を肝に銘じ、皇国の再興に微力ながら貢献してまいります。ありがとうございます。

勅使道上りつめれば初めての香椎の宮は輝きにけり
秋なれどいまだ弱らぬ陽を受けて香椎の宮の綾杉まぶし
古希近き中島兄のこころざし若きころより燃えてやまずや

心に響いた言葉を糧として

（南国殖産株）京田清人 55歳

長内俊平先生のお言葉を拝借すると「知解」を経て「体解」「信解」に至る訓練が必要であることを痛感した。

沢山の講義を受講し、また、久しぶりに班の一員として班別討論にも参加させて頂いたが、感じたところを他からの借り物でなく自らの言葉で正確に表現することの困難さを思ひなかなか班の皆さんに伝えることが出来ないもどかしさを感じたことが残念であった。日頃の怠惰によるものである。

講義の内容は、いずれも素晴らしいものであったと思ふ。レジュメに引用された美しく力強い表現の数々、講師の方々

が語られたお言葉で自らの胸内に響いたものを再度確認し、生きる糧としていきたい。

国民文化研究会

やはり合宿教室は違った

(株)石村萬盛堂 石村善悟 68歳

久しぶりの合宿参加でした。

毎月、会社のほうで、山口秀範さん達と勉強会をしており、まあ、それで良いかとの気持ちがありました。やはり合宿教室は違います。参加者皆さんの学ぼうとする心、或いは求める心が充滿し、又、講師の皆さんが、それぞれの題材に込めた熱き思いがひた〜と伝わってきて、深い感動を覚えめました。

ただの参加勧誘ではなか〜動くまいと思つて(？)、「講師」という役を作つて誘つて戴いた山口さんに、心から感謝したいと思いません。

(株)寺子屋モデル 山口秀範 67歳

ラグビーのボールの影を長く引き合宿場に夕暮れ迫る

六十年を営み来たりてこの夏に初めて集ひし香椎浜の地

古への帝の宮にほど近く亡き師のみ住まひ指呼のうちなり

カメラ・レポート 16



閉会式。主催者を代表して小柳左門氏(原土井病院院長、本会員)は、歴史の真髄は先祖の願ひに気づき、それを受け継ぐ慰霊にある。合宿で共に学んだ友と手を携へて歴史の魂を受け継ぎながら取り組んでいませうと語り掛けた。

国守りし人らの歌に学びつつ新防人と立てよ若人

(株)寺子屋モデル 廣木 寧 61歳)

地球物理学専攻の高木悠くん、

大企業勤務の武田有朋くん講義を担当す

吾子たちとよはひたがはぬきみたちの講義を聴きてうれしと思ふ

研究のいそがしきなか合宿の導入講義引き受けしきみ

ふみづきに会ひしときよりまたさらに面おもやつれせしきみにて

あるぞ (同右)

すちたてて土規七則を丁寧ていねいに説きゆくきみの話うまし

(同右)

壇上ゆ落ち着きみせて南洲の遺訓説きゆく話ゆかし

(武田くん)

をりをりに壁にかかれる時計見つつ南洲翁を語りゆくかな

(同右)

なりはひの中に時間をみつつけつつはげみしきみの見ゆるときあり (同右)

本部・事務局・指揮班

「国のいのち」を学ぶ

合宿教室の威力を再確認した

(福岡県立朝倉高等学校教諭 黒岩真一 60歳)

僅か二泊三日でありましたが、知得、体得、信得を総動員しての「国のいのち」を学ぶ合宿教室の威力を再確認しました。

経済的グローバル化の荒波、中共や北朝鮮、ロシア等の軍事的脅威の中で我が国の世界に比類なき美しい国柄を如何に防衛継承していくか、特に火急の事となって来ました。

私も長年学校現場で意識し乍ら生徒達と過して来ましたが、残り少なくなつて来た職場での営みを今一度見直して、更に真心を込めて臨まうと思つた次第です。

今回、開催地が福岡市であつた事、入所時間にも配慮がなされ、社会人にとつては実に有難い設定でありました。教へ子達の勧誘がし易かつた事も事実です。施設の都合で従来とは違つた班生活ともなりましたが、総じて素晴らしい施設でありました。

俗塵を排して臨みし合宿でまた新しき志を得つ

長八に心が震えた

(株)ハウインターナショナル 桑木康宏 39歳)

今回、合宿で、とりわけ心に残つたのは廣木寧先生の渋江抽斎と長八のお話です。

抽斎の葬式の世話をして家に帰った長八が、晩酌をしながら「お供してもいいな」との思いを漏らし、床に就いたら、そのまま息を引き取った。なんとも不思議な話であると感じるとともに、なぜ心が打ち震え、美しさを感じ、自らもそうありたいと願う気持ちが湧いてきました。また如何にすごい話であるかをうまく説明する言葉はありませんが、そのような生き方をした先人と、また新たに出会わせていただけたことをとてもありがたく思いました。

自らの役目を終へて長八は床に入りて心安めぬ

短歌で広がる美しい世界

(株)寺子屋モデル 西山八郎 63歳

今回の合宿では、指揮班を担当させていただいた。これまで事務局の経験は何度かあったが、指揮班の仕事は初めてで、しかも三人のメンバーが全員未経験者ということで、何から手をつければいいのかと初めはとまどったが、桑木康宏指揮班長の迅速適確な判断により、何とか役を終えることができた。来年度は、できれば経験者が一人入っておいの方がよいと思う。

講義で特に印象に残ったのは山口秀範先生の「短歌と日本人」だった。若い学生の人達に、美しい日本の心とその表象である短歌を知ってほしいという熱情がひしひしと伝わってきた。学生たちもきくと先生の思いをしつかりと受けとめて

カメラ・レポート17



閉会式。古川広治運営委員長(右)、閉会式の際に「歴史に学ぶ」といふことに真正面から向き合ってほしいと述べたが、この合宿で心に刻まれた言葉を今後も温めて学んでいってほしいと語った。京都大学工学部三年江島亨君(左)の閉会宣言を以て「合宿教室(西日本)」は閉幕した。

くれたことと思う。まさに武田有朋先生が紹介された「信解」の世界だった。

山口秀範先生のご講義を聴きて

若きらの心の奥に届けよと熱き思ひを語りたまひぬ

いにしへゆ受けつがれこしきしまの美しき世界広がりにきぬ

自分はどうか生きるのか？を自分に問ひたい

(一社)福岡中小企業経営者協会 横尾仁美

改めて今回、吉田松陰先生の生きざまに触れ、なぜこれほどにも先生の生涯が数多くの人にとって目標や指針になつてゐるのか考へる機会になりました。

先生は(恐らく)天下を獲らうとか自分の思想を広めようといふ思惑はなく、只々人がどうあるべきかを追求し、実行されたのだと思ひます。

さうであるならば、我々も純粹に自分がかうあるべしといふ生き方を貫けば良い。その手本は先生初め様々な偉人が数多く居て、いつも困つた時は彼らの生き様に問へば良い、と思ひます。

確かに戦後様々な事情で歪められた歴史観を植ゑ付けられたのかもしいないが、批判ではなく、では自分はどうか生きるのか？を自分に問ひながら生きたいと改めて思つた合宿でした。

// 油山慰靈祭 //



平成二十八年八月二十八日（日）福岡市油山において、「油山慰霊祭」を斎行した。終戦後の八月二十日、油山の東の斜面「泪が原」と名付けられた地において自刃された、二人の海軍将校―長島秀男海軍技術中佐、寺尾博之海軍少尉―の御霊をお慰めし、志を偲ぶ慰霊祭である。毎年八月のご命日前後に福岡地区有志で行ってきた慰霊祭であるが、今年は合宿教室（西日本）の第二部として位置づけ、本合宿中に参加を呼び掛けたものである。当日は荒天が予想され、雨も強く降りしたが、斎行前には小雨となり、現地慰霊碑前にて斎行することができた。初めて参列する学生を含め十九名の参列であった。

以下、慰霊祭次第を記す。

「故長島秀男海軍技術中佐、故寺尾博之海軍少尉慰霊祭」次第

一、和歌朗詠 山口秀範常務理事

二、終戦の詔書奉読 藤寛明会員

三、御製拝誦 銚信弘会員

四、長島秀男海軍技術中佐の遺書及び遺詠奉読 福岡大学科目等履修生 小林拓海君

五、寺尾博之海軍少尉の遺書及び遺詠奉読 福岡大学四年 高山拓也君

六、全員拝礼

七、献詠

八、「海ゆかば」斉唱

九、「神洲不滅」斉唱

献詠

福岡市・山口秀範

七十年隔てはあれど命らの深きみ思ひ消
ゆる日あらし

宮若市・小野吉宣

はしめやかにして
志継ぎて行かめや心まで負けてならじと
いしづみ仰ぎぬ

この夏のさしもの猛暑収まりて涼しき雨
のみ祭り迎ふ

しとしとと天の恵みは降り注ぎ慰霊の庭

福岡市・小柳左門

若き日の父に引かれてはるばると歩き登りし油山かな

笹の葉におはれし道ふみ分けて夏の日子しの中を登りき

何の碑のあるとも知らず詣で来て父のかたへに頭垂れにき

年どしに登り詣りし父上もつひに帰らぬ人となりにき

戦に命捧げし先輩の御心慕ひ詣で来ませり

なつかしき先生先輩父上も逝きたまひたる集ひかなしも

ひとすぢに御国のために尽しましし命果てなしただに祈らむ

筑紫野市・小林 至
新たなる国文研の合宿を福岡の地にて開催されぬ

益荒夫の命を絶ちし命日に開催されたは意義は大なり

幼き日父に連れられ油山慰霊の庭は雨にけぶりぬ

益荒夫の我らにたくせし日の本を若き友らに継ぎて行きなむ

益城町・折田豊生

悲痛なるみ文み歌のみ調べに身の自ら引き縮まりくる

痛切のみ思ひ偲び佇めば油山辺に秋の雨降る

糸島市・廣木 寧
四十年ほど前、六本松からバスに乗りて油山のふもとまで行き、さらに

歩いて正覚寺に至り、寺尾博之海軍少尉の慰霊祭に列しぬ。

よそとせ前字びのともらに導かれつづらるり道のぼり来しかな

暑き日の上り坂道ぐだぐだになりて御寺の庭に至りぬ

諸先生諸先輩のみ声の響く泪が原に頭を垂れて遺書を聴きにき

北九州市・松田 隆
七十年過ぎし今なほ敗戦の汚名晴らせず時は過ぎゆく

福岡市・藤新成信
西東分れてなせし合宿に新たな息吹感じられたり

合宿の七日の後に油山のみたままつりに集ふうれしき

国のためめささげしますらをのみ心偲び偲びつつ生きむ

香椎宮散策の折りに
高麗人らをもたすけまつりし神功皇后様のたかきみこころ偲び止まずも

熊本市・今村武人
ものふのとるべき道を世に示しみ国守りしみ霊ぞ偲ぶ

筑紫野市・古川広治
この年は新しき友加はりてゆにはの掃除できてうれしき

筑紫野市・横畑雄基
みまつりの近づく夜は虫の音のつねよりしみてきこえくるかな

久留米市・横畑雄基
国の為使命果たせし人々の姿偲びて我が身を省みる

筑紫野市・小林国平
次世代の国を営む人々に伝へてゆかん先人の姿

筑紫野市・小林国平
祖父母を偲びて

ゆきましし國男俱子がみともらとつどひにぎはふ姿浮かびく

日の本を守り支へし君たちの歌声響かん若き日のままに

“短歌研修”



第61回 全国学生青年合宿教室(西日本)一第3部短歌研修一 日程表

とき 平成28年10月2日(日)
ところ 福岡大学セミナーハウス

主催 公益社団法人国民文化研究会

10:00	開会式 オリエンテーション
10:15	班別自己紹介
10:30	短歌創作導入講義
11:00	
11:30	散策案内
11:40	歴史散策 昼食 短歌創作・提出
12:00	
13:40	
14:00	
14:15	歌稿作成
15:00	班別相互批評
16:00	
16:10	
16:20	
16:30	勉強会案内・全体懇親 感想文執筆
16:50	閉会式
17:00	解散

オリエンテーション

1 運営体制について

研修中は班別行動となりますが、班は全部で4班です。研修の運営、進行は指揮班と呼ばれるスタッフが行います。

2 班別行動について

研修中はさまざまな日程がありますが、班別行動をお願いいたします。各班には班長(班の統括)、班付(助言者)を配置しています。体調不良など何か問題がありましたら、班長にご相談ください。

3 歴史散策について

コースは後程説明します。昼食は弁当を用意しています。散策途中で配布予定です。

3 研修室について

班別相互批評で使用使用するセミナー室は以下の通りです。

- 1班: セミナー室A(講義室)
- 2班: セミナー室B
- 3班: セミナー室C
- 4班: セミナー室D

セミナー室B、C、Dは13:30からの使用となっています。

13:30からセミナー室で短歌創作が可能です。使用後は元の形に戻してください。

4 名札について

名札は学校名(勤務先又は元勤務先)、学年、氏名を記入し、左胸に常時着用してください。

平成二十八年十月二日（日）福岡市内の福岡大学セミナーハウスにおいて、全国学生青年合宿教室（西日本）―第三部短歌研修が開催された。夏合宿で行はれてきた、短歌創作導入講義、散策・短歌創作、全体批評、相互批評の流れに沿った日程に特化した企画である。（今回全体批評は実現できなかった）また夏合宿後間もない時期に、参加の呼びかけができる研修の場であり、さらに夏合宿に勧誘したが参加させることができなかつた者を再度勧誘する場でもあつた。夏合宿に参加した者同士が声をかけあひ、また、会員が新たな参加者を求めて勧誘し、学生十名、社会人二十二名の参加があつた。（合宿教室参加者二十三名、短歌研修からの参加者は九名）

国歌斉唱、開会宣言（福岡大学二年伊東駿輝君）、主催者代表挨拶（山口秀範常務理事）と夏合宿さながらの開会式を終へた後、七、八人の班に分かれて自己紹介を行った。その後、今村武人会員（熊本県立第二高等学校教諭）による短歌創作導入講義を受けた参加者は班毎に、秋晴れのもと、福岡県護国神社、大濠公園等福岡の歴史に触れながら、思ひ思ひのコースを散策し、短歌創作に取り組んだ。そして、散策後に提出された短歌は、指揮班が直ちに歌稿を作成し、歌稿は各班に配布され、班別の相互批評が始まつた。二時間の短い時間ではあつたが、心を通はせ合ひ、言葉を直し、歌の調べを整へる、充実した時間であつた。相互批評後は感想文執筆、各勉強会の案内と続き、閉会式では、折田豊生会員による主催者代表挨拶があり、福岡大学一年生福知晃大君の閉会宣言をもって、第三部短歌研修は閉会した。

ここに、第一部香椎での合宿教室から始まる第六十一回全国学生青年合宿教室（西日本）は全ての日程を終了した。以下は、熊本県立第二高等学校教諭 今村武人氏による「短歌創作導入講義」要旨である。

生徒の短歌を収めたクラス短歌集『おほなぬ』を刊行したが、短歌はどれも感性豊かなものであつた。私自身も学級日誌に短歌を書いてゐるが、生徒の日々の成長が自然に目に止まるやうになり、ささやかな生きがひとなつてゐる。

短歌創作上の基本ルールとしては、「五・七・五・七・七の定型詩、一首一文の原則、自分の体験を読む、字余りと字足らず、詞書、連作短歌、文語文」等々がある。実際に短歌をどう詠むか、どんな小さなことでも感動したことをメモしておくことが大

切であつて、飾ることなく自らの気持ちに率直に詠むことである。

短歌を詠む意義は三つある。

その一つは、短歌創作は人々の瑞々しい「心情」や「感情」を取り戻すことにつながる。短歌とは縁遠いやうに思はれる理系の科学者の間においても短歌に親しむ伝統が生きてゐる。湯川秀樹博士はノーベル賞授賞式に臨んだ際に「思ひきや東の国にわれ生れてうつつに今日の日に会はんとは」と詠んでゐる。

二つ目の意義は、日本人の政治道徳を取り戻すことである。政治家の質の低下が今の政治不信をもたらした。その根底には歌を詠む政治家が稀有となり情意の欠落がある。明治天皇は九万首余りの歌を詠まれたが、古くから歴代の天皇方は、今上陛下も勿論だが歌を詠まれてゐる。

三つ目は、短歌には人の心を永遠に伝える力がある。千数百年前の万葉集時代の作者たちは短歌といふ形によつて言葉に尽しがたい精神的価値にあふれた情報を伝えてきた。これから私たちが作る歌も万葉集の歌のやうに永く後世に残り、歌ひ継がれる可能性がある。

短歌詠草 (しきしまのみち) // 短歌研修 // にての創作作品 (班別相互批評をして添削された作品です。)

第一班

中村学園大学 流通科学 一年 井上 諒
全身に陽光浴びつつ散策で皆と語れば絆深まる

福岡大学 経 一年 福地晃大
福岡市美術館が二〇一九年まで
閉館とありて

芸術で数多の人の心惹く開館までのしばしの眠り

福岡大学 経 一年 西田忠正

護国神社散策にて

御国守るみ社の庭に遊ぶ子に日差しそそぎておごそかに見ゆ

鹿児島大学 法文 四年 阿部大輔

父母に感謝の思ひ伝へたし巢立たんとする別れのときに

種々の生命生まれて我もまた御霊の力に生かされてあり

福岡大学 卒 岡部智哉

集まりし数多の人の目そそがるる廣田弘毅

像何思ふかな

夏空とまがふがごとき秋晴れのその日の下に友ら集ひぬ

福岡大学 法 二年 伊東駿輝

短歌提出の時間が迫りて

暑い中仲間と歩き休憩に弁当食べるともう午後一時

佐賀大学 理工 四年 古賀工誠

大濠公園にて

懐かしき友との再会ここにあり美しき景色に包みこまれて

護国神社にて

国のため命ささげしますらをのみふみ読むなり友らとあひ並び

父母にまた恋人に宛てまししみふみの調べ静かなるかな

淡々と綴られしみふみは特攻に出で立つ気負ひいささかもなし

澄み渡るみ心偲び仰ぎ見るみ社の空青く深しも

しも

散策の折

古賀西田井上三人の顔を見て香椎の合宿よみがへるかな

伊東阿部福地岡部に折田さんとそぞろ歩きも楽しひととき

伊東はも弁当三つたひらぐるる大食漢ぞ頼もしき奴

秋晴れの日差しに汗ばむ散策の木立ちゆつくつく法師蟬聞く

第二班

折山 優

大濠公園

夏空を思はず青さ残れども遠き木々には黄葉始まる

龜山成子

日本庭園にて

庭園の緑に映ゆる白無垢や過ぎし日々思ひ胸あつくなる

大濠公園散策

班長 與島誠央

陽光は真夏のごとくも大濠の水面を渡る風はさやかに

北九州市立大学 外国語三年 山本 愛

屋久島登山にて

足場なき石の山道険しいが豊かな自然このままであれ

木の緑海空の青眺めつつ真の意味で心安らぐ

鹿児島大学 医 六年 市地 さくら

日本庭園散策

立ち止まり貼りつくシャツに風通す柳は揺れて水の音涼しく

大濠公園散策

影遊び歩く大人を追ひ越してカラフル帽子の子らの喚声

有限会社 加来建設 加来 恵美子

護国神社

深緑の柱に守らる御社に集へる人と心ひとつに

休日

休日の雲は止まりて葉はそよぎ「ねえーこれ見て」とやはき声する

腰おろし流るる水面ながめつつどんぐり拾ふ休みの昼に

株式会社 寺子屋モデル 山口秀範

大濠公園

幾十度遊びしならむこの水辺遠き記憶の甦り来る

たらちねの母にせがみてボート借り夢中に漕げど岸は揺けし

ゴザ広げ母の握りしむすび食む我は幼く母若かりし

手の平のまめは潰れて数日は悔いたることも今は懐し

思ひ出に耽りて憩ふ公園の水面を渡り吹く風涼し

第三班

護国神社にて

武田 真理子

お参りの後に見かけた巫女さんの優雅な舞にこころ鎮まる

大濠公園にて

池のはた水面をわたる松風に吹かれていただく格別のおひる

日本庭園散策にて

あづまやでほっとひといき涼やかな秋のけはひを友らとわけあふ

一般社団法人 九州地域づくり協会 佐竹芳郎

大濠公園の日本庭園にて

悠然と景色ながめて楽しむ我手入れの苦労偲び止まずも

大濠公園にて

折田 登和子

大堀の池のほとりに座りをればさざ波運ぶ秋風の吹く

震災を遠く忘れて過ごす日よ和歌の友らの温かき声

大濠公園にて

坂本和代

仲間らと感動求めの散策は慣れたる道も緑輝く

日本庭園にて

東屋で木洩れ日ゆれるもみじ葉に時間止まるや神無月の風

有限会社 吉田調剤薬局 吉田 喜久子

護国神社にて

大桶を仰げば樹々の狭間より神無月の空青く澄みたり

大濠公園にて

大濠の池のほとりに寛ろげばさはやかな風頬に清しき

大池に風はそよぎてさざ波のよせ来る様を
飽かず眺むる

尾を振りて跳ねる小魚追ふ先に釣り糸を
引き寄せにけり

今朝

今朝のバスに揺られて初めての短歌散策加
たる日迎ふ

*加たるは参加するといふ

意味の福岡のお国ことは。

初めての歌詠む集ひ案じつつ夜半に目覚め
て書読み始む

熊本市役所嘱託 末次直人

大濠公園 日本庭園にて

石ならば池のほとりで思ひ出す二年前の赤

坂離宮

石ばしる垂水の歌を思ひ出づ流れの音の力

強きよ

農業 小野吉宣

久しぶりに護国神社参拝

国の為尊き生命献げたる我等が英霊み住ひ
給ふや

鳥居下若き親子が立ち止まり頭下ぐるを

ゆかしく見つむ

神聖なところのあるを体解して親子共々頭

を下ぐる

今村武人学兄の講義の折に

生徒との心の通ひ路ありありと生まれたる
かな日々のみ歌ゆ

第四班

合同会社瑞穂恒産 河崎 由紀夫

菊池霊社

博多にて討ち死にしたる忠臣が篤くまつら
れありがたきかな

上天草総合病院 福田 誠

福岡護国神社

街中の樹々に囲まれ美しく並び建ちます御
社詣でぬ

美しく清められたる境内の玉砂利踏みつつ

友らと参りぬ

第二コスモピア熊本 亀山一茂

護国神社参拝

緑濃き社の前に目を閉ちてなみ鎮まるをひ
たすら願ふ

舞鶴公園にて

石垣の前に座りて昼餉すれば聞こえる蟬の
音神無月にして

日章工業株式会社 藤新成信

護国神社、福岡城跡、大濠公園を

散策して

すみわたる秋空なれど夏のごとつよき日差
しに汗かきて行く

国のため命きさげし人々の御魂まつりしみ
社すがしも

福岡の古城の庭に腰下ろし往時しのびつつ
弁当たうべぬ

風わたる湖畔にしばしたらずみていこふ人
らの姿ながむる

忙しき日々を忘れてみ友らと語りひ歩めば
心なごみぬ

熊本県立第二高等学校教諭 今村武人
護国神社に参拝する

ここだけの木々におほはるるみ社の道を歩
めば心なごみぬ

ますぐにと道を歩めば広ごれる芝生の先に
社殿の見えたり

拝殿の賽銭箱のその脇に熊本地震の義援の
箱あり

ふるさとの災ひ案じる福岡の人の心のあり
がたきかな

福岡縣護国神社に詣つ

上米良 恭臣

御國護る大神の邊にぬかづけば巫女舞ひひ
たりすずやかにして

菊池靈社參拜

中興に一死捧げし武時公の末流といふ我が
家なり

祖神なる武時公はさきがけて博多の杜にさ
やに逝きけむ

奇しきかな学び舎のべに鎮まれる菊池の
靈舎に今日会はんとは

指揮班

福岡大学科目等履修生 小林拓海
声をかけ励ましながら母と子の歩く姿の
微笑ましきかな

福岡南公共職業安定所 古川広治

研修所へ向ふ車中にて

雲増えて空くらくなるさまを見て雨降らぬ
やう祈りつつ行く

株式会社 寺子屋モデル 廣木 寧

第三部短歌研修はじまる

福岡の六本松なる福大のセミナーハウスに

三十あまり集ふ

若き人に六十路の人も集ひ来て短歌の道を
学ばんとする

司会者も開会宣言する者も福大生が務め進
むる

一日の研修なれど実作の体験をへて活きた
言葉を

第一部の合宿教室の締めとなる短歌研修は
じまらんとする

株式会社 寺子屋モデル 西山八郎

大濠公園にて

池の澗の石に腰かけひるげとる友ら笑みつ
つ語らひてをり

池の上を吹きくる風をほくにうけ暑さ忘る
る心地するなり

をちこちゆ来たりし友らとしきしまの道学
びゆく集ひたふとし

東日本「合宿教室」



第61回合宿教室(東日本)日程表

(富士)

	9月 2日(金)	9月 3日(土)	9月 4日(日)	9月 5日(月)	
6 00		起床・洗面	起床・洗面	起床・洗面	6 00
7 00		清掃	清掃	朝の集い(合宿教室)	7 00
8 00		朝の集い(交流の家)	朝の集い(交流の家)	朝の集い(交流の家)	8 00
		朝の集い(合宿教室)	朝の集い(合宿教室)		
		朝食	朝食	朝食	
9 00		講義 中国の覇権戦略と 日本の課題 評論家 石平先生	講義 日本の国から 今林賢郁先生	清掃 退所 若き友らに語りかける言葉 国武忠彦先生	9 00
10 00		質疑応答 写真撮影	班別研修	全体感想自由発表	10 00
11 00	班別研修	感想文執筆 憲法問題DVD視聴 閉会式		11 00	
12 00		短歌導入講義 須田清文先生	昼食	(昼食・解散)	12 00
13 00	受付:13:00開始	(バス内昼食弁当)	会員発表 穴井宏明氏		13 00
14 00		野外研修・短歌創作 富士宮口5合目より宝永火口。 雨天時は箱根湿生花園	短歌全体批評 澤部壽孫先生		14 00
15 00	開会式 オリエンテーション		班別相互批評		15 00
16 00	自己紹介 輪読	(短歌提出)			16 00
17 00	夕べの集い(交流の家主催)	夕べの集い(交流の家主催)	夕べの集い(交流の家主催)		17 00
18 00	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩		18 00
19 00					19 00
20 00	合宿導入講義 我が国を取り巻く危機と 学生青年諸君に期待する もの 伊藤哲朗先生	古典講義 聖徳太子の憲法十七条を 読む 前田秀一郎先生	講話 祖国と音楽 武澤陽介先生 慰霊祭説明 原川猛雄先生		20 00
21 00			慰霊祭		21 00
22 00	班別研修	班別研修	班別研修		22 00
23 00	就寝 消灯	就寝 消灯	就寝 消灯		23 00

第六十一回「合宿教室」(東日本)のあらまし

第一日目

(九月二日・金曜日)

第六十一回全国学生青年合宿教室(東日本)は、富士山のもと、静岡県御殿場市の「国立中央青少年交流の家」にて開催された。北は北海道、南は鹿児島から集った参加者は、それぞれの思ひを胸に受付を済ませ、開会式に臨んだ。

開会式

合宿教室は京都産業大学経営学部二年・船岡龍一君の開会宣言で幕を開けた。主催者を代表して澤部壽孫副理事長は「この合宿では現代の学生生活に欠けてゐる、心を寄せ合ふ体験をすることになる。それは人間生活の基本だからだ。班別研修では心が通ひ合ふ喜びを感じて欲しいし、輪読では一人では読めなかつたことが理解できる体験を、また御製や短歌を通しては歴史の中に生きる祖先の心を継承してゐる喜びを感じてほしい」と述べた。小柳志乃夫合宿運営委員長は「この合宿では知識よりも心を動かす体験をしてほしい。人生にとって知識は枝葉で感性が幹を成す。感動が幹を作り、しっかりとした幹があつて葉が繁つてゆく世界を我々は願つてゐる。一人の友、ひとつの大切な言葉をこの合宿でぜひ得てほしい」と語り掛けた。

合宿導入講義 「我が国を取り巻く危機と学生青年諸君に期待するもの」

東京大学客員教授・元内閣危機管理監 伊藤 哲朗氏

はじめに、ビートルズの「イメージ」の一節、「宗教も国家も無い世界を理想とする歌詞」を紹介し、「宗教も国家も無い世界とはどんな世界なのか。なぜこの世に宗教や国家はあるのか。この現実を見つめることが大切である」と問ひ掛けられた。



ついで、我が国を取り巻く危機の数々が紹介され、「東日本大震災の後、日本列島が地震多発期に入っているのにはほとんどの国民が何も対策をとっていない。さらに中国の東シナ海や南シナ海での動きが我が国にとって極めて危機的であるのに、国民の関心が低い」と不断に備へることの重要性が説かれた。そして、「危機の発生に当って対処するリーダーには、即時に方針を決定する勇気が必要であり、その決断には、国民の理解が必要である。そのためにはリーダーには国民にとって何が最善かといふ国家観とこれを裏打ちする歴史観が不可欠だ」と述べられた。これを身につけるためにも吉田松陰先生の「皇国の皇国たる所以、人倫の人倫たる所以、夷狄の悪むべき所以」及び聖徳太子の「背私向公」の教へに学ぶことが重要だと説かれ、最後に、「そのためには自分の頭で考へることが大事で、付和雷同しないで勇氣を持って自分の意見が言へるやうな本當の学問に励んでほしい」と結ばれた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義についての班別研修を行った。講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝えられたこと、重要なことは何かを確認し、その上で各々の思ふことを論じた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも行はれた。緊張のせみか、始めのうちは意見も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、班員相互の交流が深められていった。

第二日目 (九月三日・土曜日)

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。合宿参加者全員で簡単な体操を終へた後、岸本弘会員(元富山県立富山工業高等学校)によって名歌の紹介と解説がなされ(以下に記載)、一同で唱和した。

弟橘比売命

さねさし 相模の小野に もゆる火の 火中にたちて 問ひしきみはも

《九月四日（日）》

山部宿禰赤人が不^ふ尽^{じん}山^{やま}を望^{のぞ}てよめる歌一首また短歌

天地の分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 不^ふ尽^{じん}の高嶺^{たかね}を 天^{あま}の原^{はら}振り^ふり^さけ見れば 渡^{わた}る日^ひの 影も隠^{かく}ろひ 照^てる月の 光も見えず 白雲もい行きはばかり 時じくそ 雪は降りける 語り継ぎ 言ひつぎゆかむ 不^ふ尽^{じん}の高嶺^{たかね}は

反歌

田児の浦ゆ打ち出て見れば真白くそ不^ふ尽^{じん}の高嶺^{たかね}に雪は降りける

《九月五日（月）》

防人の歌（商長首歴）

忘らむと野ゆき山ゆき我来れど我が父母は忘れせぬかも

講義 「中国の覇権戦略と日本の課題」



先生は、中国の覇権主義の全容について歴史を回顧しつつ語られた。

初めに「孔子、孟子の活躍した春秋戦国時代はまだ中国がなかった。秦の始皇帝の統一によって、中国が成立した」と述べられ、そして、「その後、易姓革命による盛衰興亡や他民族統治などの長い歴史の中で、中国が文明の中心の華であり、周辺諸国を未開で野蛮であるとみる華夷秩序の思想が確立した。宗主国と朝貢国の関係である。大陸を統一しても、周辺国を抑へないと王朝が長続きしないことから、王朝は

評論家 石 平 先生

易姓革命で交代しても華夷秩序を維持することでは一貫してゐる」と述べられた。

続けて「アヘン戦争の敗北は中国近代化の始まりであると同時に華夷秩序の崩壊の始まりであった。日清戦争後の講和条約で『朝鮮の独立』が書き込まれたことは華夷秩序の崩壊を意味してゐる。その屈辱を晴らし、華夷秩序の再建といふことが、現在の習近平共産党政権にも引き継がれてゐる。『中華民族の偉大なる復興』をスローガンとするのも、アヘン戦争以降の屈辱を晴らすといふ意味も込められてゐる。そのため取り組みが、経済力の向上と軍事力の強化といふことである。アジアインフラ投資銀行AIIIBの設立もその一環である」と歴史的な視野から近年の対外政策を説かれた。

さらに「南シナ海の軍事拠点化や尖閣諸島を狙ふのも、貿易路を押しへて日本の生命線を危ふくし反抗できなくするといふ意図がある。虚構の南京三十万虐殺を喧伝するのも、華夷秩序を崩壊させた日本への恨みも込められてゐる」とされた。

最後に、「中国の歴史に根差した華夷秩序再興のための覇権主義に、日本が対処するには、憲法改正といふことが大きな課題がある。憲法の掲げる平和主義を守ることと、実際に平和を守ることとは全く違ふ。日本人のための日本人による憲法改正が大きな課題だ」と講義を結ばれた。

短歌創作導入講義



短歌創作をかねた野外研修の前に、短歌に取り組む心得について説かれた。

合宿必携書『短歌のすすめ』の著者の夜久正雄先生が「今日われわれが歌をつくる場合の直接の模範になる」と言はれた香淳皇后の「やつがしら絵巻」連作四十首を紹介し、「初めて短歌をつくる人はもちろんのこと、長年短歌創作を続けてをられる方もこの御歌を拝誦して初心に帰ってみませう」と、参加者全員で四十首を音読した。一首宛一息に音読することで「一首一文の原則」の重要性が示され、表記する際

東京ホワイイト歯科 須田 清 文氏

も一行で書くのが基本であると語られた。

「我々が目指す『しきしまの道』としての短歌は『日本の文化の中核をなすもの』である」として、香淳皇后の御画集『錦芳集』に書かれてゐる皇后の絵の先生である前田青邨画伯の「やつがしら絵巻」を紹介され、再度全員で四十首を音読した。「日常の素朴な感動を自分の心を見つめて正確に表現していくことが大切である」と述べられた。

野外研修(短歌創作)

今回の御殿場合宿では天候に恵まれ連日霊峰富士を仰ぎ見ることができた。時には頂が、或いは中腹が白雲に覆はれることがあったが稜線の美しい富士山を朝夕に目にした。

短歌の創作をかねた富士登山では五合目でバスを降りて、礫岩の山道を六合目の宝永火口まで登った。この時期としては珍しい晴天とのことで、駿河湾まで遠望することができた。参加者は巨大な火口を見ながら、遙か眼下を遠くに望みながら、各々どう短歌に詠むべきか思ひを凝らした。帰路のバスの中でも三十一文字に整へようと指を折る姿がみられた。

古典講義 「聖徳太子の憲法十七条を読む」

公益社団法人山梨科学アカデミー会長 前田 秀一 郎 氏



まづ「聖徳太子の憲法十七条を読んで、太子を御偲びすると同時にわが国の文化への理解を深めよう」と前置きされて、講義が始められた。

「太子は、第一条に『和』を国家統治の根本方針として掲げられた。そして、『和』を実現するための方途を十七条の全てに具体的に示してをられる。これら条章には現実の人間の弱さや醜さを具体的に描写

されながら、それを許容されるのではなく、人々と共に超克して、和を実現しようとの強い御意志が込められてゐる」と太子の
み心を偲しのばれた。

「第二条では、太子は和の実現は三寶への帰依なくしてはあり得ないと述べられる。『三寶に歸せずんば、何を以てか枉まがれるを直たださむ』との御言葉には強い御信念が込められてゐる。第三条の『詔みことりを承うけたまはりては必ず謹め』といふ御言葉は、専制君主制における権力国家思想を表現されたものではない。この条では、『君臣間の和に基づき君臣が慈しきをもつて民に接してこそ、四時しじゆ順行し、萬氣ばんき通ふことを得る』といふわが国統治の根本方針を述べられたのである」と語られた。

次いで、他の条章にも適宜触れた後、詩人・浅野晃氏の「告別」と題する老いた祖父が遺される孫へ呼び掛けた作品を引用されて、「太子の願はれた和の国は未だに実現したとは言へないが、私共一人一人がこの詩のやうに暖かな情意で結ばれた家族の和の実現に努めることよつて、和の国日本の実現に近づくことができるのではないか」と述べられた。

第三日目

(九月四日・日曜日)

講義 「日本の国がら」

国民文化研究会理事長、今林 賢 郁 氏



冒頭で「これからお話しすることは『日本の国がら』はかうあって欲しいといふことではなく、かうであつたといふ『事実』についてである」と強調されて講義は始まつた。

辞書に基づき「国がら」（国柄）、「国体」の語義を紹介した後、英語の constitution（憲法）には国柄や国体の意味があるとして「国柄が書き込まれて初めて国家の根本法となる。日本国憲法も大日本帝国憲法も『第一章天皇』となつてゐる。天皇を抜きにして憲法も日本の歴史も分らないといふことになる」と

して、今上天皇から、昭和天皇、明治天皇、孝明天皇と幕末期まで遡って「天皇と国民」の関係がどうであったかを具体的に語られた。そして、「いつの時代にあっても、み位を襲がれた天皇は厳しい内省のお心を持ち続けられながら、常に国平たいらかなれ、民安やすらかなれの祈り続けられ、国難ともなれば御自らのいのちを投げ出される。このやうな方が天皇であり、わが父祖たちはその言葉や御行動を見て、天皇を敬ひ忠誠を尽してきた。慈愛と忠誠、これが国柄の中核だった。この姿が二千年以上にわたって続いてきた事実は世界の奇跡と言っている」と説かれた。

さらに、江戸幕府の朝廷への干渉、監視の中で、どのやうなお心持ちで幕府に対峙されたかを七人の天皇のお歌に触れられた後、太古に遡って「神武天皇即位建都の大詔」を紹介され、初代の神武天皇から今日に至るまで、歴代天皇は国民を「大御宝」おほみたまからとして常に大切にされて来たことを述べられ、かうした事実への認識を深めることは現在に生きる国民の務めではないかと語られた。

会員発表

㈱テレビ西日本東京支社 穴井 宏 明 氏



「社会人十二年目となるが「今でも学生時代に読んだ小林秀雄氏の『美を求める心』が心の中で生きてある」と語り、その文章を紹介した。また大学一年生の夏の合宿教室で「可愛いんじゃねえんだな、めんこいなんだな」と表現された長内俊平先生のお話から、「言葉の姿」といふものを感じる体験をしたことを述べた。

社会人となり「わかるわからないの世界」で生きていく中で、小林秀雄氏の「立派な芸術といふものは、正しく、豊かに感ずる事を、人々に何時も教へてゐるものなのです」といふ文章を信じて、これからも豊かに美しく感ずる心を育てるやう学んでいきたいと語った。



一端が示された感じだった。

この直後に行はれる班別での短歌相互批評について、「作者がどのやうな気持ちでその歌を詠んだのかを知らうとする努力が大切であり、もし分りにくい表現であったら、正確なものとなるやうに言葉を探し合ふことに努めてほしい」と結ばれた。

班別短歌相互批評

全体批評のあと班別短歌相互批評が行はれた。自分の心の動きを正確に表現し相手に伝へることの難しさ、また人の言はんとしてゐることを正確に受け止めることの難しさを実感させられた。一首一首の短歌を、班員全員が納得できる表現にするため尽力し、自分の心、相手の心をじっくりとみつめるといふ貴重な体験をすることが出来た。

上野学園高等学校音楽科講師 作曲家 武 澤 陽 介氏



苦難の歴史を歩むポーランド国民の心の中に流れるショパンの音楽や、ロシアの圧政の中で祖国の自然を音楽にし続けたシベリウスの「フィンランドディア」、そしてチェコ人にとつてのスメタナの「我が祖国」について紹介し、音楽作品とそれを愛する祖国の人々との悲しくも美しい関係を語られた。

チェロ奏者ヨール・ヨー・マの「音楽は、作曲者、演奏者、聴衆の三つが揃って一つの作品となる」といふ言葉や、岡倉天心が『茶の本』で述べてある「傑作は人の心を強く惹き付けて、ついには人が実際にその作品の一部分となる」といふ言葉を引用されて、「作品は、関つた全ての人々の思ひと現代の自分、今後関るであらう未来の無数の人たち、その全てがその一部なのだと思います。この合宿教室での学びの中で、多くの無数の優れた先人の思ひに触れ、祖国の一部である自分といふものを強く自覚して、その思ひを次の世代にバトンパスしていきたい」と語られた。

慰霊祭



慰霊祭に先立って、原川猛雄会員（元神奈川県立小田原高等学校教諭）から「この祭儀は慰霊祭といふ一つの儀式を通して私達の心をととのへ、平時戦時を問はず国のために尊いいのちを捧げられた全ての祖先のみ霊をお迎へし、その方々が後の世の人に遺されたお気持ちを私達もまた受け継いでゆきたいとの思ひを込めて営まれるものである」とその趣旨が説かれた。

慰霊祭は祓詞はらふまことばに代へて澤部壽孫副理事長による「ますらをの悲しきいのちつきかさねつきかさねもある大和島根を」（三井甲之詠）の朗詠に始まり、北濱道会員（元榊アルバック）による「御製拝誦」、池松

仲典会員（若築建設棟）による「祭文奏上」とつづき、次いで参加者一同で「海ゆかば」を奉唱した。

左は拝誦された御製と、奏上された祭文である。

御製拝誦

明治天皇

友（明治三十六年）

もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき

秋夕（明治三十九年）

國のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

惜春（明治四十五年）

あかずしてくれゆく春はあひおもふ友にわかるるこちこそすれ

昭和天皇

終戦時の御製（昭和二十年）

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかにもいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らむといばら道すすみゆくともいくさとめけり

外国と離れ小島にのこる民のうへ安かれとただいのるなり

今上天皇

第二十五回オリンピック競技大会（平成四年）

日の本の選手の活躍見まほしく朝のニュースの画面に見入る

沖繩平和祈念堂前（平成五年）

激しかりし戦場の跡眺むれば平らけき海その果てに見ゆ

硫黄島（平成六年）

精根を込め戦ひし人未だ地下に眠りて島は悲しき

ブラハにて（平成十四年）

ウルタヴァの豊けき流れ見し夕べブラハ城に聞くスメタナの曲

サイパン島訪問（平成十七年）

あまたなる命の失せし崖の下海深くして青く澄みたり

お題 人（平成二十八年）

戦ひにあまたの人の失せしとふ島緑にて海に横たふ

神宿る富士の高嶺の地の底ゆ真清水さには湧き出づる　ここ御殿場の地の「青少年交流の家」に　「公益社団法人国民文化研究会」の今林賢郁けんゆき理事長をはじめ六十余名集ひ来たりて　第六十一回全国学生青年合宿教室を営みはや三日目となり最後の夜を迎へぬ

今し天つ日はかくろひ　夜のしじまに星はまたたき　草むらのをちこちゆ虫の音さやかに聞こゆる　今宵　平成二十八年九月四日　ここ「野外活動棟」の隈処くまどを齋庭ゆにはと定めまつり　祓ひ清めまつりて　とこしへにみ国守ります遠つみ祖たちをはじめ　み国のために尊きいのちを捧げ給ひしあまたのはらから達　またみ国の行末を憂ひ　まことの道を蘇へらさむと戦ひこられし亡き師　亡き友らの御霊をお迎へし　海の幸山の幸を供へまつり　またまなごめのみ祭り仕へまつらむとす

顧みれば　昭和天皇の御聖断により先のみ戦は収められし後　占領政策による日本文化伝統の破壊にやまとしまねは危ふくなりゆく中　世代の断絶を防ぎ国民同胞感を蘇らせむと明治天皇はじめ歴代天皇の御製にまた聖徳太子のみ教へにわれらの行くべき指標を求め　若き友らと共に　営みきたりし合宿教室も　はや六十一年の歳月としつきを重ねたり

隣国中国、北朝鮮のただならぬ動きと次々にテロ事件の起る厳しい国際情勢のただなかにあつて　豊かに見ゆる我が日本は形ばかりの平和の長きに心は衰へむしばまれゆく様は　み国の行末の危うきを覚ゆ

今ここにわれらは　石平先生をはじめ　諸先生のご講義に耳を傾け　班別討論・古典輪読　はたまた短歌創作を通して友らの言葉に耳を傾け　心を開き語り合ひ　遺されし言葉に心を働かせ　心込めたどりゆくままに　われらのいのちはみ祖らのいのちにつらなりてあるを覚ゆ　今よりのち老いも若きもおのおのも心さだめてもろともに　心を鍛へ言葉を修め　祖国日本をとことばに榮えゆかしめんと誓ひまつらむ

天にますみ祖のみ霊よ　願はくは至らざる我らのゆくてをまもらせたまへと　第六十一回全国学生青年合宿教室参加者一同に代り　池松伸典　謹み敬ひ恐み恐みも白す

第四日目

(九月五日・月曜日)

若き友らへ語りかける言葉

「思ふこと」

昭和音楽大学名誉教授 國 武 忠 彦 氏



まづ先生の恩師である小柳陽太郎先生の「わが国の文化や伝統を学ぶとは、古典と歴史に学ぶことであり」とのお言葉を紹介された。そして「この合宿では、古典や歴史、国が直面してゐる問題を思ひ、心を働かせた。これは、今までにない体験ではなかったでせうか」と語り掛けられ、「和歌も『こころに思ふことをよむ』ことであった。人間とは、『思ふ』ものであることを、歌の創作で意識的に自覚させられたのではないだらうか」と振り返られた。

若き日の井上毅が、先輩の横井小楠に学問とは何かと問ふと、「思ふ」ことだとの答へだった。「それは学んだことを、自らに思ひみることに。思つて得る智慧である。学問とは知ることではなく、臨機応変に現実の問題に対応できるこころの工夫・活用である」。そして「古い『大和魂』（大和心）といふ言葉にも、知識の収集ではなく生活の智慧、生きた常識に重きが置かれてゐた。わが国を取りまく課題は多いが、私たちは、積極的に智慧を働かせてこれに応へて生きていかなければならない」と語られた。

全体感想自由発表

感想文執筆を前に、胸中に湧き来る思ひが次々に発表された。

「国家の危機にあつてはリーダーに歴史観・国家観が不可欠といふことを学んだ」「歴史的視点から行動する中国の国家戦略

を知った」「歴史と伝統を考へることは憲法を考へることに繋がると思った」「日本人として誇りを持って生きていきたい」「和して同ぜず」といふことの大切さが本当に分った」「和」はスローガンではなく太子の御体験から生れた言葉だといふことを学んだ」「明治維新の際の『天下億兆一人も其処を得ざる時は、皆朕が罪なれば』といふ明治天皇のお言葉に心が動いた」「皇室の下にある幸せを実感した」「古典に触れてこんなに美しい言葉があったのかと驚いた」「『古事記』の百年前に国家の歴史があったことを知った」「班別の短歌相互批評で、素直な気持ちで語り合ふことは凄いことだと思った。『和』といふものを実感した」「初めて歌をつくったが、相互批評で作者の思ひを深く知って良かった」等の感想を登壇した参加者が述べた。

閉会式

式に先立ち「日本国憲法」がGHQ（連合国軍総司令部）スタッフによって一週間で起草された「日本抑止」のためのものだったといふ史実を物語るビデオを鑑賞した。

閉会式では主催者を代表して山内健生常務理事は「ここでの講義や短歌創作を通して、大事なことは目には見えない。心で感じなくては分らない」といふことを学んだと思ふ。そこから新たに沢山のことが見えて来たと思ふ。ここでの学びを出発点にお互ひ励んでいきませう」と語った。

続いて小柳志乃夫合宿運営委員長は合宿を振り返りながら「全体感想自由発表の中で、班別研修において『素直な気持ちで語り合った時に、和を感じた』との発言があった。この合宿で大切なものを掴んでもらへたと有難かった。皆さんのご協力に感謝したい」と述べた。最後に早稲田大学政治経済学部二年・若島元暉君の閉会宣言を以て「合宿教室（東日本）」の全日程は終了した。

合宿運営

【本部】

運営委員長

I B J L 東芝リース(株)

東京ホワイト歯科

小柳志乃夫
須田 清文

【指揮班】

指揮班長

東芝電波プロダクツ(株)

若築建設(株)

榊IHIEアロスペース

IMSグループ本部

神谷 正一
池松 伸典
内海 勝彦
最知 浩一

【事務局】

事務局長

国民文化研究会事務局長

奥富 修一
栗方恵美子

元川崎重工業(株)

元(株)講談社

元三菱重工業(株)

元神奈川県立小田原高等学校教諭

山本 博資
磯貝 保博
島津 正數
原川 猛雄

【慰霊祭協力】

根上 久野

走り書きの 感想文

これは閉会間ぎはの一時間で参加者全員に、三泊四日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のまま掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる短歌は、この感想文とともに提出された第二回目的のものです。



男子学生第一班

「国家観・歴史観」は日常でも思ひ出した

(株)ラック 高橋 俊太郎 37歳

今回は学生班の班長を務めさせて頂いたできました。拙い班運営ではあったかと思ひますが、積極的に発言してくれた神谷龍兄、前川大基兄をはじめ、高木悠兄、渡辺幹成兄、山口穂兄、若島元暉兄の皆で有意義な討論にできたと思ひます。また、的確なサポートをしていただいた飯島隆史班付に感謝します。

今回の合宿では「慰霊祭の説明」で防人の歌「父母が頭をか撫で幸くあれといひし言葉忘れかねつる」を詠むことができ、初めて知る歌だけでなく、既知でも良い歌にあらためて触れることができたことが良かったです。

導入講義から繰り返し述べられた「国家観・歴史観を持つ」ことは、日常の仕事に追はれてみると、つい忘れてしまひがちになりますが、日常でも思ひ出したいです。

役目終へ一息ついて若き友と語り合ふのは楽しきことよ

中国の覇権戦略への対応は経済面も考へてゆきたい

(東京大学大学院 理学系研究科 高木 悠)

石平先生のご講義では、現在の中国の覇権戦略について、中国の歴史がどういふものであったかといふ面から分かりやすく説明していただいた。特に中国が歴史を通して周邊の民族を征服しないと安定しない国家だといふ指摘には、目を開かされる思ひがした。その上で日本の課題として軍事面と経済面を挙げられたが、経済面は強く意識することがなかったので、教へていただき大変勉強になったと同時に今後考へてゆきたいと思った。

今回、同じ班の友人は初参加の人が多かったが、班別研修でも皆比較的良好に話してくれ、班別研修は非常に楽しかった。今回出会ふことが出来た友と今後もつながってゆく努力をしたいと思ふ。

久々に会ひし友とも新しき友とも共に語るは楽し

日本の国柄について学びを深め、応えていきたい

(福岡教育大学 教 四年 前川大基)

今回の合宿で、日本の国柄についてより深める事ができた。

今林賢郁先生のご講義で「明治維新の宸翰」と「孝明天皇の家茂への御宸翰」は初めて触れたように思う。その中で、国民、国家の危機を一身に受け止められている御姿勢は容易ではないと思う。私も陛下の御姿勢を仰ぎ、一身に受け止められる器でありたいと思った。また、陛下は受け止めるだけではなく、自らが身を砕かれる決意と共に歩む覚悟も示され

ていた。これは、リーダーとしてあるべき姿を示されていると感じた。伊藤哲朗先生は、リーダーが国家観、歴史観を持つことと言われたが、自分にとって今回学んだことが一つのリーダー像の形であると感じている。まずは、全九州学生文化会議の議長として、日本の国柄をリーダーとしての姿で表していきたい。

皇室をいただく民との自覚もち己の地より応へてゆかむ

「ををしき松」のように「いろかへぬ」
努力をしていきたい

(佐賀大学 経 三年 神谷 龍)

私は佐賀大学の「日本教育研究会」というサークルの部長を務めており、日本の歴史や文化、大東亜戦争、和歌などを学友と共に学んでいます。このサークルで学び始めて三年になる中で、和歌を詠むことが好きだと感じてきました。また、和歌を詠む時に自分の心と向き合う時間が好きで、心と一致する言葉が出ないときも何とか言葉にしたいと思っています。今回の合宿では、現状の課題である憲法について学び、日本人としての姿勢について改めて考えることができました。その中で、まだ日本人としての自覚に目覚めたつもりであったことに気づきました。そのため、講義で紹介された御製「ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ」を心に刻みたいと思います。四日間ありがとうございました。

カメラ・レポート 1



開会式。合宿教室は京都産業大学経営学部二年船岡龍一君(右)の開会宣言で幕を開けた。主催者を代表して澤部壽孫副理事長(左)は、班別研修で心が通ひ合ふ喜びを感じてほしいと挨拶した。

した。

自らの心と向き合ひ思ふことを言葉に表す喜び感ず

終わりへ近づくにつれて名残惜しくなる合宿だった

（早稲田大学 政経 二年 若島元暉）

私は、今回初めてこの合宿教室に参加しました。知合いがほとんどおらず、初めは不安でしたが、同班の方々も多くが同じだったようで、開会式での「お互い心を開き、気持ちをおさらけ出す」もあり、すぐに打ち解け、不安はなくなりました。

講義では、先生方の体験や生きた情報を聴くことが出来ました。班別研修では、全く自分と異なる考えの方が多くあったのが面白く、その中で意見を交し合ったことで、段々と自分に新しい視点が生じてきていることを実感できました。生まれて初めての和歌作りでは、全体批評、班別討論を通じて、自分の和歌の原形は殆ど無くなりましたが、気持ちの良いもの出来あがりしました。終わりが名残惜しく、あつとつという間の合宿でした。心から参加して良かったと思います。我が歌にこもる思ひを友達と語ればさらに思ひ深まる

自国・他国の歴史・伝統・文化を学ぶ大切さ

（鹿児島大学 歯 一年 山口 穠）

私が今回の合宿で学んだことで心に残ったことが二つある。一つ目は、自分の国の歴史・伝統・文化を学ぶ意図だ。私は、歴史を学ぶことに疑問を持っていた。しかし、伊藤哲朗先生のご講義で、歴史を学んで育まれる価値観や歴史観が価値判断の基準になることを知り、感銘を受けた。特に緊急時の優先順位の決め方や国民の総意を得る価値観の話は、将来医療系に進み、人の命を預かる身として身の引き締まる心地がした。

二つ目は、他国の歴史や価値観を学ぶことの重要性だ。私は、今まで中国の行動が不可解であった。だが、石平先生のご講義を聞き、行動の意味が理解できた。同時に相手の価値観を知った上で対応する事の重要性を知った。今後は、他国の歴史や価値観も勉強し、行動の意図を理解できるようにしたい。

富士の嶺の空眺むれど晴れざりし心は澄みけり友と語りて

学んだことは周りに広め、伝えていかなければ
ならない

（横浜国立大学 理工 一年 渡辺幹成）

本合宿には、私が自分の視野やコミュニティを広げたいと思っていた所に、祖父に強く勧められ興味を持ち参加しました。

合宿に参加して最も感じたのは、事実や知識を得て、自分

がそれについて思うことがあれば、周りの人に広め、伝えていかなければならないという事です。単に講義を受けて、自分の中だけで感じたり、班別研修で発表したりするだけでなく、この合宿に参加していない人に、どのように伝えるかが重要だと思います。講義の先生方も、昔の先達から学んで心動かされたことを自分の言葉やわかりやすい言葉で伝えていると思います。自分一人やグループで語らい、心通わせるだけでなく、大きな「わ」を作ることが大事だと思います。この合宿に参加して良かったです。人の弱さを改めて感じました。

第六十一回全国学生青年合宿教室にて

今日ここに集ひて学びし我ら皆聖徳太子をこえねばならぬ

お迎への人々に見えなくても

お応へ下さる両陛下に感激した

(埼玉県庁 飯島隆史 63歳)

今回は男子学生第一班の「班付」を命ぜられました。この班別研修で、合宿導入講義をなされた伊藤哲朗氏から、今上天皇陛下・皇后陛下のエピソードを伺ひました。「お召し列車で行幸啓の際、両陛下は沿線でお迎へなさる人々に起立してお応へいただいております。その時、お迎へする側は、遠方のため、どこに陛下がご乗車してあるかわからないことが多い。だが、両陛下は、それにお応へ下さっております。」といふことでした。これは、木下道雄さんの「宮中見聞録」にある昭和天皇

カメラ・レポート 2



オリエンテーション。小柳志乃夫合宿運営委員長(右)は、一人の友、ひとつの大切な言葉を得てほしいと語り掛けた。神谷正一合宿指揮班長(左)は、合宿生活を営む上での諸注意を説明した。

の「鹿兒島錦江湾で夜間沿岸松明を灯してのお送りに対し、一人艦上で挙手の礼でお応へしてゐる」記事を思ひ出し感激しました。当時「皇宮警察本部長」の伊藤先生が、直に拝見したエピソードであり、貴重なことであると思ひました。沿線はるか迎へる民に起立して車中に応へる御姿たふとし

男子学生第二班

未完の事業

(元棟アルバック 北濱道 54歳)

前田秀一郎先生のご講義で、聖徳太子が願はれた「和」は、一度実現されたらそれでお終ひといふものではなく、つねに問ひかけられ、新たにしなければならぬ未完の事業であるといふ意味のことを伺ひ、目が覚める思ひがした。

前田先生の、聖徳太子のお言葉との、これまでの対話の長い時間の積み重なり的一端を垣間見る思ひがした。

他のご講義も、講師のご体験に根差す先人の言葉との厳しい応酬を偲ばせる、素晴らしいものであつた。
もつと学生を連れて来たかつた。

原川猛雄先輩の慰霊祭の説明をお聞きして

国のため命捧げしますらをの心を歌に偲び給ひぬ

父母を思ひて歌ふ防人の心をやさしく説き給ひけり

松陰先生の親思ひます歌読みてうつつにお姿偲び給ひぬ
おやさしき人柄にじむお話の自づと胸に沁み入りにけり

自分の心と友の心を深く理解した

(福岡大学 科目等履修生 小林拓海)

今回の合宿で和歌のすばらしさを改めて知ることが出来ました。合宿では、どの講義でも和歌にふれ、ゆつくりと味はふことができます。日頃、和歌を詠まうと思ひ作ら、なかなか書けません、すばらしい和歌を味はふ合宿では不思議と詠むことが出来ました。そして、その和歌を友達と相互批評し合ふことは、相手の心を深く知り、また、自分の心と言葉の異なるところを確認することで、自分の本心に気付くことが出来ました。自分の心と友の心を深く理解する体験が出来るのはここだけであらうと思ひます。敷島の道、和歌が日本の国がらを表現し、皇室の民を想ふ心、民がそれに答へようといふ心そのものが、日本の文化伝統であり、私達の心の底に流れるものだといふことを知りました。

富士の下学びし文化と伝統をより深めしと強く想ひぬ
如何にして日本の国がら伝へむと思ひて合宿過ぎてゆくなり

自分の意志で行動することを学んだ

（長崎大学 教 四年 榎本 仁）

合宿教室を通して、伊藤哲朗先生の「付和雷同しないこと」「行動のための決断を先延ばししない」といふお言葉が、私の生き方でありたい方向に導いて下さったと考へました。今まで、自分の思ひといふものを大切にせず、他の人の意見に流されてしまふことが多くありました。自分の言動に責任が持てず、決断をいつまでも出来ず、結果的に自分の意志で行動することが出来ていませんでした。伊藤先生が具体例を挙げながら話をして下さったので、自分の至らない部分が見つかりと見え、これからは決断をし、行動に移していく訓練を実生活の中で実践します。また、古典輪読で聖徳太子の十七条の憲法を学んだのですが、いかに自分が以前やっていた学びが浅く、人の心の性質を実人生の中から見出し、ただのスローガンとせず、具体的な現実の中に「和の世界」を実現させようとした聖徳太子を表面的にしか見てゐなかつたことに気付かされました。これから聖徳太子は何を仰りたかつたのかといふことを学んで実生活に活かしていきたいと考へました。

班長

作り手の話を聞きて心寄せ思ひに近き歌にし給ふ

カメラ・レポート 3



合宿導入講義。東京大学客員教授・元内閣危機管理監 伊藤哲朗氏は、危機に即時に方針を決定すべきリーダーは、最善を判断する国家観、歴史観に裏打ちされた勇気が不可欠で、これを養ふため、自分の頭で考へ、付和雷同しないで勇気をもって自分の意見が言へるやうな本当の学問に励んでほしいと述べた。

和歌に触れに来た合宿

(立命館大学 法 三年 小野寺 崇良)

今回の合宿は私にとつて「和歌に触れに来た合宿」と言つても良いかと思ふ。近頃は、若者でも日本を大切に思ふ方も多くなつてゐるさうだが、日本の文化やその精神にまで気持のある人は余り見かけない。私自身も大してそのやうな機会もない中でこの国文研合宿は和歌の精神を体感する重要な機会であると思つて参加した。今回の合宿でも、万葉集や神話、御製、志士の歌など、どの講義でも歌が紹介され、十七条憲法や天皇陛下のお言葉なども取り上げられる中、その「一貫性」を強く感じた。「千数百年も前の人の想ひが、歌を通して理解できるのは、凄いことだと思はないか」と講師が問ふてゐるが、私はそれと同時に、「先人が詠み、想ひを伝へてきたものと同じ方法で自らの想ひを表現できる」ことに感動する。私のやうな拙い歌でも、何か先人と一つに連なつてゐる、同じ土台の上で言葉を交はしてゐるやうな気持ちちがしてくる。「ただの言葉」ではない、「生きた想ひ」に変はつて感じられたやうな気がした。

友どちと語り学びしこと糧にあゆみ進めん敷島の道

心を通はせる友との出会ひ

(京都産業大学 経 二年 船岡龍一)

去年も参加させて頂き、今年も楽しい四日間となり、本当によかつたです。オリエンテーションで仰られてゐたことですが、「和」といふものが合宿のテーマでした。合宿導入講義は非常にわかりやすく具体例を用ゐて説明して下さいました。そして、次の班別研修では初めて出会った友らと話し合ひ、今私たちの求められてゐるものが、国家観と歴史観であり、リーダーシップでありました。次の日には、石平先生の「中国の覇権戦略と日本の課題」といふ題でお話しされました。現在の日本の危機や私たちが今やるべきことについて認識を改めました。その後富士山に登り、友と心を通はせながら、短歌を作成しました。全体批評、そして班別批評では、澤部壽孫先生も交へての批評会となりました。この時、確かに班員達と心を通はすことが出来たと思ひました。合宿最後の班別研修では語りあふ時間が足りないまでとなり、本当に友が出来てうれしい合宿でした。

友どちと満天の星を見上げつつ富士の麓で皆と語らふ

見上ぐれば富士の高嶺に真白なるかさぐもかかり美しきかな

来年の合宿までに学ぶこと

(早稲田大学 教 一年 嶋田裕一)

私は、四年前の阿蘇合宿以来四年ぶりの参加でした。阿蘇合宿の野外研修では阿蘇火口に出かけ、雄大な自然、エメラ

ルド色のカルデラ湖に圧倒されました。そのときの気持ちを歌に詠んで提出しようと思いましたが、語彙不足、表現不足で閃きもなく納得できる歌が詠めませんでした。四年の月日が流れ、自分自身の人生で受験やさまざまな失敗、経験などを経て今年の短歌創作には自信をもって臨みました。そして一昨日、短歌が完成したときの手応へたるや何とも言へないものがあり、これは高く評価されるだらうと思つてをりました。しかし、澤部壽孫先生から表現上の注意を受け、自分の實力はまだまだだと実感致しました。来年も参加することに決めてあるので、そのときまでに今回見つかった課題を克服します。

薫陶に心友を得る会宿にまた参らむとぞはや決まりたる

「詔」の性格を学ぶ

(元新潟工科大学教授 大岡 弘 69歳)

前田秀一郎先生は、御講義において、聖徳太子の「憲法十七条」中の第三条「詔を承りては必ず謹め」について、明確な御見解を述べられた。すなはち、第三条中の「詔」とは、衆議をつくした上で作成された御裁可を受けた公文書の内容を指すのであって、今上陛下が先月八日に「個人として」と断られた上でお述べになられたビデオメッセージのお言葉とは、その性格を全く異なるものではないのかと。この御指摘は納得のゆくものであった。

カメラ・レポート 4



講義。評論家 石平先生は、中国の王朝は、易姓革命で交替しても、華夷秩序を維持することでは一貫してゐる。中国の歴史に根差した華夷秩序再興のための覇権主義に日本が対処するには、日本人のための日本人による憲法改正が大きな課題だと指摘された。

國武忠彦先生の御講義をお聴きして

國のこと思ひなさいと語られし恩師の教へを師は語らるる

あたたかなつながりを感じた

（全日本学生文化会議 清川信彦 26歳）

今回の合宿教室で、和歌には心を通い合わせる力があることを改めて実感しました。男子学生二班は、班別相互批評で、自分の素直な気持ちを詠み込んだ和歌を共有したり、相手の気持ちに合った言葉がさがしたりすることで、少しずつ皆の心が開かれ、とても和やかな雰囲気になっていきました。心の内を正確に表現する和歌だからこそ生み出された空間だと感じました。このような実感から、日本の国柄とは、和歌によつて天皇と国民が心を通い合わせる、そのような国柄なのだと感じました。君民一体の国柄、和歌によつて天皇と国民が心を通わせ合い、互いのために命を投げ出し合う関係こそ、日本の国柄であると感じました。このような天皇と国民のあたたかなつながりがある日本の国柄を感じたなら、日本の存亡がかかった大事なときに、「外国に逃げよう」「戦争が終わるまで牢屋に入っておこう」とは思えないのではないかと思えます。「何とかして日本を守りたい」という愛国心、国を思うまごころは、和歌を詠み、和の心、あたたかなつながりを実感すること、御製を仰ぎ、歴代天皇の御心に心を澄ませることによつて生み出されると確信しました。私自身も日々、

和歌を詠み、日本人が感じていたあたたかなつながりを感じることを、御製を仰ぐことを大切にしながら、日本が抱えている課題に立ち向かっていきたいと思います。

男子学生二班で班別相互批評をせし折

友どちのまごころを言の葉にあらはさむとて皆で悩みぬ友どちの心の内を聞きたれば自つと笑みのこぼれくるかな合宿を終へても和歌を詠み交はし友らと心を通はしてゆかむ

女子班

古典を通して自分を知る

（全日本学生文化会議 柘島明実 27歳）

今回の合宿では「古典を通して自分を知りたい」という問題意識を持って臨みました。輪読では十七条憲法の「群臣共に信あらば何事か成らざらむ」が特に心に残り、この太子の確信に驚くと共に、「信」とは何なのか、どれほど大切なことなのかをもっと考えたいと感じましたが、その答えは今林賢郁理事長の、「日本の国がら」の講義中の言葉から得ることができました。「日本の国柄が最も表れたのは終戦の時だった。昭和天皇の『要は国民全体の信念と覚悟の問題であると思ふから、この際先方の申し入れを受諾してよろしい』という言葉は、まさに国民を信頼されている証である。」皇室存亡の

危機の中でも昭和天皇は国民を信じ国民を案じられ、国民もまた陛下を信じそれぞれの立場で復興を成し遂げていったのだと思います。日本は確かに天皇と国民の「信」によって築かれてきた国だったのだと、深く思いを致しました。私自身も、「太子の確信を胸に刻み、今起こっている『生前退位』の問題についても、陛下を信じて行動していきたい」という自分の思いに気づく事が出来ました。自分自身を知ることが出来た合宿となりました。ありがとうございました。

太子の言ふ「信」とは何かを心に留め合宿教室に臨みたりけり
君臣の信あればこそ国難を乗り越え来たる歴史を学ぶ

大君への「信」を心に深くして日々つつとめをおこなひゆかむ

私と古典をつなぐ『何か』が生まれた

（長崎大学 教 二年 代田瑞希）

今回の合宿では、先人の心を「偲び」、先人に「心を寄せる」ことを通じ、私の中に自分と古典をつなぐ『何か』が生まれたように感じます。班別討論で、自分たちなりに御製の諳解や憲法十七条の読み解きをすることができた時、また、自分の思いにぴたりと当てはまる和歌が作れた時には、ほうと息をつくしかできませんでした。「美には人を沈黙させる力があるのです。絵や音楽が解るといえるのは絵や音楽を感じることで。愛することです。」（小林秀雄）という言葉のような体験をしたのだと思います。この美しい日本の姿(言葉や和歌、

カメラ・レポート5



班別研修。講義後、班に來られた石平先生をお迎へし、質疑応答がなされた。

歴史)をもっと知りたい、そして教壇に立つ者としてこれを教えていかねばならない、と思いました。

古典にふれし折

先人の強く美しき言の葉の心にしみいり涙あふるる

先人の思ひを継ぐは今生きる我らであると強く思ひぬ

心動かされる体験

(長崎大学 教 二年 津田真木)

この合宿で特に心動かされたのは、「歌は心のありのままを詠むもの。『思ふ』ことが何もかも元である。」という國武忠彦先生の言葉や、「旅行をした時に詠んだ歌は、時間が経ってもその時の情景や思いが蘇ってくる」という岩越豊雄先生の言葉でした。歌を詠むのは苦手でしたが、今回、富士山に登った時の感動を素直に歌に詠んでみました。そして「自分の感動を形に残せて、時間が経っても感動が蘇って来るなんて、歌は素晴らしい。感動を歌にしたい。」と思い、心動かされた「言葉」と「自分の体験」とが一致したと感じました。今日からはここで得た心動かされる体験を自分の言葉でサークルの同士に伝えていきたい、伝えずにはおられないと思います。日本の事を一番に思う仲間でありたいと心から思います。

感じたることをそのまま我が歌に詠まむとの思ひ強く湧き来る

る

古典の面白さを知った

(國學院大學栃木短期大學 人間教育 一年 佐藤理沙)

この合宿は、学生の頃に参加したことのある父が私の知らぬ間にハガキを出していました。「自分を成長させることができる」とは聞きましたが何をすることも分かりませんでした。最初のうち、古典が苦手な私は古典のどこがそんなに面白いのだろうと思っていました。昔の人の思いをより深く知るに従い、日本人の感性はすごいと思うようになりました。昔の人の思いや日本のすばらしさに改めて気づかされ、日本人で良かったと思うと同時に、もっと皆さんと古典を読んでみたくになりました。合宿に申し込んでくれた父と、古典が面白いと思わせてくださった女子班の皆さんに感謝したいです。

世の中は学ぶべきこと多かりけり先人からも班友からも
書を読み友らと語れば祖先らの心に我もつながる思ひす

講義「日本の国から」

(日本語教師 鈴木 のり子 53歳)

「日本の国から」の講義では、御製に表れたお気持ちや背景を学び、今まで知らなかった歴代天皇の御姿を知ることができました。それらを通して理解できたのは、「日本の君主である『天皇』とは、武力や財力を以て民の上に君臨する存在な

のではなく、民の苦楽に心を寄せ、国柄を守る事に自らを捧げている存在である」という事でした。他者を慮る事や、公を重んじる事を美徳と捉える心は、東日本大震災の時にも明らかとなったように、日本人の気質の特徴的な部分であると言えますが、これらの事を、歴代天皇は自らの使命として実践して来られたのでしょう。現行憲法に唱われた「象徴天皇」という曖昧な言葉も、日本的な美徳を象徴する存在という意味に於いて、図らずも真実を映し出すものとなっていると思われました。合宿での学びを通し、様々な疑問に対して自分なりに答えを見い出して来られた事を感謝致します。

乙女らの思ひ素直に伝へむと語り合ひたる姿うつくし

国柄の継承

（太成殿本宮 高見澤 玉江 48歳）

もし自分が日本に生まれ育っていないからきつと日本に憧れたのではないかと改めて感じる合宿だった。国を創り上げてゆく根幹に真心があり、国民を宝として御心を掛けて下さる皇室、保身の為でなく国柄を守り続けていらつしやつた歴代天皇の御存在。そうしたことの礎となる古典が今現在にも生き続けている。全ての事が時代の変化にあいながら継承され、継承に努める人が居る。それは、日本の古典が実感の継承でもあるからこそ可能なのではないかと感じた。そうした日本に生まれ育つた事の幸福を、どのように自分も継承



短歌創作導入講義。東京ホワイト歯科 須田清文氏は、淳香皇后の「やつがしら絵巻」連作四十首を紹介し、日常の素朴な感動を自分の心を見つめて正確に表現していくことが大切であると説いた。

できるのか。当たり前と思っていた事を先ず見直し、日常生活、自分の足下を見直し、真心を以て背のびする事無く、一つ一つ行つてゆく事を大事にしたいと改めて思つた。

師と友らの助けを得つづ直したる我が歌よめば心晴るるも
学生とともに在りたる数日は新鮮な空気が吸ひ込む心地

我が思ひ歌に詠まむに言の葉の見つからずしてもどかしきかな

胸の内に抱き続けし国思ふ心表す術を学ばむ

合宿所感

（寺子屋石塾 岩越豊雄 72歳）

○全体について。教育勅語の冒頭に「我が皇祖皇宗国を肇むること宏遠に徳を樹つること深厚なり」とある。この合宿で改めて天皇を中心とする日本の国柄のすばらしさを学んだ。聖徳太子、古事記、万葉集、明治天皇の御製等歴代天皇の御製を学び直し、子供達に伝えると共にこれからも日本の国柄のすばらしさを伝えて行きたいと思つた。

○班について。女子班の班長という事であったが、梶島さんという適任者がいたので班別研修の進行を替つてもらいスムーズに話し合いが進んだ。女子大生三人、前の合宿参加者が三人の班。初めて参加した女子大生、大変受けとめもよく、是非前参加者のように、互いに学びを深め来年も友達を誘つて参加するようお願いしたが、それも可能のように感じた。

○運営について。①慰霊祭は天候がよければ星空の下大自然に囲まれた広場だと思つた。（雨の場合はしかたないが。）②最後に今後の事を話し合う上でも、最終日班別研修の時間を取つてほしい。

朝の富士の空に向ひて皆ともに君が代歌ひ日の丸揚げる
西日あたる富士のみ山をあふぎつつ君が代歌ひ国旗を納む
皇太子のお手植松のそのそばで君が代歌ふことのかしこき

社会人班

班員の皆さんに勇気をもらつた

（天本和馬 66歳）

社会人班として充実した三泊四日間でした。今回は特に同班の社会人の方々から教えられることが多かつた。社会人班員の方々には特に自らの社会人生活の中である種の志をもつておられた。例えば現下の日本を取り巻く社会情勢に対する共通する危機的な認識を持つておられ、心強く勇気をもらつた。班別討論では講義で指摘された教育の問題、日本の国防への無知、歴史観の欠如など危機の本質まで遡つてお互いに深く合うことが出来て有意義でした。以下いくつか印象に残つた講義について。石平先生…長い中国の歴史の中で常に華夷秩序に従つた覇権を求めていることを事実を通して話してくだ

だった。前田秀一郎先生・憲法十七条の解釈に新たな側面を付加して講義された。ただし慣れ親しんだ私には理解しやすかったが初めて聞く方には理解が難しかったかもしれない。須田清文先生・香淳皇后の連作短歌に大変心打たれた。

前田秀一郎先生のご講義をお聞きして

その昔ともに学びし古の憲法十七条を説いて止み給はず
朗々と憲法解釈述べ給ふあらたないのち吹き込むことに

歴史観と国家観を身につける必要を強く感じた

(日本大学名誉教授 夜久竹夫 68歳)

今回で五回目の合宿参加だった。次第に日程に慣れて来て今までより講義の内容を考える余裕ができた。最近の情勢に関連して伊藤哲朗先生の危機管理のお話の中の歴史観、国家観と国民理解との整合性が重要であるという指摘と石平先生の中国の歴史観と対日観についての解説が印象に残った。

ところで最近は経済と学問、技術、教育の分野で日本は外国の圧迫を受けている。国内でそれを進める側の論拠は短期的な業績主義と国際化や多様化を良しとする主義である。それらの主義は外国の歴史観や国家観に影響を受けていて歴史もあり強力である。

我々の仕事の組織の現場で、それらに抗して、国民文化の継承と発展に寄与するためには、強い歴史観と国家観を身につけて、それらを組織の理解と整合した形で説く事が重要で

カメラ・レポート7



野外研修。宝永火口にて。

あるとあらためて思った。

神居ます富士の麓の学び舎でみ国を守る心を学ぶ

合宿でいくつかの大切なことを学びました

(旭化成ホームズ株 市成照一 62歳)

この六月に国民文化講座の受講を機会にこの合宿に参加しました。合宿に参加して以下のような感想を持ちました。

一、石平先生の講義を聞いて「中国はなぜ日本を侵略しようとしているのか」という以前からの疑問が解決しました。

二、聖徳太子十七條憲法第二一条の講義で「日本は昔から神々の国なのになぜ外来の宗教である仏教を取り入れたのか」をもっと知りたくなりました。

三、和歌創作では自分の思いを五七五七七の言葉で表現する楽しさを知りました。

四、國武忠彦先生のお話して「学ぶ」「思う」「工夫」に感銘を受けました。「学ぶ」だけでは不十分、しかしそれすら自分には足りませんでした。「思う」は自分の中で思索を巡らすこと。「工夫」は世のため人のために行動することと理解しました。大変ありがとうございます。

合宿に学びし事は宝なり吾が人生に力得たれば

小中学生に日本の誇りを継承してもらいたい

(日本バーレーンガイנגェルハイム株 出村信隆 59歳)

この合宿は教養を深め視野を広げる好機と思ひ参加した。

先輩方の相変わらずのパワーと熱、また息子くらい若い人たちの意見に感動。勉強させて頂くばかり。伊藤哲朗先生、石平先生のお話から「茹でガエル」の逸話を思い出す。「熱い」と思った時は熱湯の中、どうにもならぬということのなきように若い世代に日本の誇りを継承してもらわねばと。そのため無知なる己は何ができるのか。小中学生が日本の文化・歴史・伝統に興味を持つきっかけ作りに注力したい。六十路となる今、野外研修で上った富士山で言えば六合目、頂上は近くて遠い。これまで自分を支えてくれた全ての方々に恩返しができると良い。日本人に生まれてきてよかったと誰もが思える日本にせねば。只々感謝。

富士登山

六合目は人の六十路か我はさらに高みを目指し生きむと思ふ

ありがたい合宿だった、参加してよかった

(元私立中学高等学校教諭 永井敏勝 47歳)

以前から合宿に参加したいと思っておりましたが思い切って参加してよかったです。短歌創作には全く自信がありませんでしたが、先輩方のユーモアのある和やかな雰囲気の中で思いが短歌に仕上がっていく喜びを感じました。これからも同じ思いを持つ者が集まる学びの場を大切に行きたいと

思っています。私はこれまでに折に触れて京都伏見桃山御陵、
 樞原神宮、皇居の清掃奉仕あるいは各地の戦没慰霊祭等に参
 加してきました。それはもっと日本を知りたいとの思いから
 です。この合宿でも朝の集いでのお歌の紹介、最後の國武忠
 彦先生のご講義の若き友らに語りかける言葉「思ふこと」に
 大切なことをあらためて気づきました。

宝永火口登山口で

古^{じしん}ゆ天皇^{すめらみみ}しらす我が国の幸ある歴史学びてゆかむ

合宿で感じた共感と感動を大切にしていきたい

（全日本学生文化会議 坂本匡史 28歳）

伊藤哲朗先生のご講義で「リーダーには歴史観、国家観が
 必要である」というお話に驚きを覚えた。しかし聖徳太子の
 十七条憲法を班員と一緒に読んでそこに記された日本人の生
 き方は私たちと大差がなく、国のリーダーとして聖徳太子が
 十七条憲法で示された国家観が私たちの中に確かに生きてい
 ると感じた。聖徳太子は「共に是れ凡夫のみ」とおっしゃり
 人の有様を見つめ共に歩もうとされたのである。「彼是とする
 ときは則ち我は非とす、我是とするときは則ち彼は非とす」
 と示されたことに感動を覚えた。さらにその理想を現代にま
 で生かし続けてきた先人にも感動を覚えた。今林賢郁先生が
 講義でご紹介された孝明天皇の將軍徳川家茂への御宸翰に込
 められたお思い「汝の罪にあらざ朕が不徳の致す所」に見ら

カメラ・レポート 8



古典講義。山梨科学アカデミー会長 前田秀一郎氏は、聖徳太子の憲法十七条には、
 現実の人間の弱さや醜さを具体的に描写されながらそれを許容されるのではなく、
 人々と共に超克して、和を実現しようとの強い御意志が込められてゐる、と説いた。

れるように十七条憲法の理想は脈々と受け継がれていることを実感した。この共感と感動を大切にしていきたい。^{のり}
今生きる人の心に生き生きとよみがへりくる十七条の憲法

全てが新鮮な体験だった

(榎まるぶん 長嶺悠樹 24歳)

この度の合宿では様々の体験をさせていただきました。講義、講話、富士登山、慰霊祭と全てが初体験でとても心に響きました。全てが初体験ということもあり、班別研修ではただ皆様の話を聞いているだけしかできませんでした。又、日本の歴史や学力の不足も相まってすべてが新鮮に感じました。あたかも自分が「外国から来た」ような気持ちにさえなっていました。しかし私も日本人です。この合宿を通して今まで日本という国について何も知らなかったことがとても恥ずかしくなりました。これからは日本人として日本のことをもっと学び、歴史や文化を大切にしていきたいと感じました。

合宿に学びしことを糧にしてわが人生を生きてゆきなむ

この合宿には正しい歴史観国家観の

道筋が示されてゐる

(榎オートボックスセブン 小田村 初男 66歳)

今回の合宿教室は事前の天気予報に反し天候にも恵まれ野

外研修、短歌創作も雄大な富士山の五合目六合目、宝永火口を巡ることができ、素晴らしいものとなった。合宿を通し我が国を取り巻く危機の現状が明らかとなり、それに対処する為には正しい歴史観、国家観が必要であることが示された。

更に正しい歴史観、国家観を身に付ける為には学んでいくべき手懸り、道筋が分かり易く示された。まだまだ学ぶべき事は多いが更に励んで行きたいと思ふ。また若い人たちがこの合宿で積極的に学び、全体感想自由発表でしっかりとした感想、意見を表明してゐた事にいつもながら大変頼もしく感じた。

万葉に歌残したる防人の故郷近く友と集ひぬ
うるはしき富士の麓ゆ旅立ちて筑紫をめざす防人偲ぶ

国文研班

国を思ふといふことを考へさせられた合宿だった

一 昨年の淡路島での合宿から、社会人になって三回目の参加となった。
(西松建設榎 蔭山武志 40歳)

人生初の富士登山であった事、また天候にも恵まれたこともあり、非常に感慨深い思ひであった。

合宿最後の講義に、國武忠彦先生より、学問と思ふことに関する心揺さぶられる講義をいただいた。

また、国を思ふといふことを改めて考へさせられる合宿でもあった。国を思ふといふ気持ちを自分のものとして考へられる人が少なくなつてゐる様に感じられる今の時代において、どのやうに発信していくべきか、どう自分のものとしていくかについて、もつと思ひ、見つけていかなければならないと思つた。

壇上での学生の発表を聴いて

自らの思ひをまとめ人前で話す姿をうれしと思ふ

合宿で学びし言葉を自らの言葉と重ね思ひ深まる

これから少しづつでも学んで行きたい

(千葉県庁 秋山信之 51歳)

北濱道先輩にお声かけいただき、参加させていただきました。久しぶりに先生方や諸先輩・諸友にお会いすることができ有り難く思ひます。

今林賢郁先生の御講義後の班別研修で、一人ずつ感想を述べた際に、私は思ひがまとまらないまま感想を述べたところ、岸本弘先輩から、日頃の疑問や思ひに対しどのやうに御講義を受け止めたのかを話してほしい、といふ趣旨の御指摘をいただき、日頃の勉強の大切さを思ひました。御講義のメモや合宿の資料を読み返し、少しづつでも勉強してゆきたいと思ひます。

合宿地のバス停に到着し柴田悌輔先輩にお会いして

カメラ・レポート9



講義。国民文化研究会理事長 今林賢郁氏は、「神武天皇即位建都の大詔」を紹介し、初代の神武天皇から今日に至るまで、歴代天皇は国民を「大御室」として常に大切にされて来たことを述べ、かうした事実への認識を深めることは現在に生きる国民の務めではないかと語った。

元氣かと明るく声をかけくれし先輩の笑顔に心なごみぬ

四十七年ぶりの合宿

（齋藤 實 68歳）

私の合宿参加は、大学を卒業する昭和44年が最後であり、47年ぶりに参加をさせて頂きました。この間、国文研の方々とお付き合ひも必ずしも密なものではなく、ごく限られた御付き合ひに止まっておりました。

然し乍ら、合宿が始まると、班別討論でもその時の隔たりがあたかもないかのように感じられ、しかも、初めての若い仲間の方々とも何の拘りもなく率直なお話することが出来ました。最初の長い当合宿への不参加による些か気後れしたような気持ちは意外なほど消えてしまいました。

そのこともあり、各講義は、気持ちを集中させてお聞きすることが出来ました。特に、今林賢郁理事長の講義では「事実を確り理解するということ」「言葉も事実であること」の言葉と共に「ひとのきもちを知りそれに従おうとすること」の大切さを、改めてお教えいただきました。ありがとうございました。

物凄く貴重な講義だった

（榊ダシク 佐野宜志 33歳）

國武忠彦先生がご講義の中で、「人情は、はかなく、たよりないものである。」という本居宣長の言葉をご紹介されていたのだが、この解説で先生は「人の心は、くだくだしく、定まり難く、めめしいもの」と仰りつた。

日頃、「心を磨く」というと、美しい物事に気付くとか、優しい心を育てるとか、上昇志向的な感情のみを鍛えると思われがちだ。しかし日常のごく平凡な生活の中で「はかなく、たよりない」心を見つめる、はつきり自覚するということが「思」を学ぶことの一つなのだと思いついた。物凄く貴重なご講義だったと思う。

バス停にて

頂きを雲に隠せし青黒き富士の姿を静かに眺むる

自分自身を見つめ直すきっかけを
与へていただきました

（榊テレビ西日本 穴井宏明 34歳）

今回会員発表をさせて頂いたとき、私が学生時代にどんな質問をしてきたか、社会人になって何を感じてゐるのか自分自身を振り返り、自分自身を見つめ直すきっかけを与へていただきました。リハーサルは、小柳志乃夫さん、須田清文さん、池松伸典さんにご指導を賜はり誠にありがとうございました。御講義は今林賢郁先生の「日本の国がら」が印象に残りました。「宮中見聞録」に記された昭和天皇の御製など歴代の

天皇陛下がいかに国民を思ってくださいましたのか、また生前退位が話題となっていてゐる中で、今上天皇の御言葉や皇后陛下の御言葉を拝読させていただく中で、今上天皇が日本国憲法に記されてゐる「象徴」といふ文言について厳しく深くお考へになられ、「象徴」に命をふきこんだとの今林先生の御話には、はっとさせられました。

会員発表

去年の夏会員発表せし高木兄たかぎの紹介うけて壇上に立ちぬ

今後も学びを続けていきたい

(上野学園高等学校音楽科講師 武澤陽介 36歳)

多くの感動を得た合宿だった。今林賢郁理事長のご講義は、改めて天皇陛下のご存在のありがたさを認識でき、また國武忠彦先生のご講義は、後に続く仲間に対する誠の想いの調べを聴く想いだった。

全体感想発表での学生の言葉を、胸が熱くなる想いで聴いた。ある学生が、苦手だった古典の文学に触れ「美しい」と思ったという。この素直な気持ちの吐露は、聴いていて涙が出る思いだった。

今後も学びを続ける決意を新たにしたい。

学生の全体発表を聴きて

一言の言葉を美しと言ふ若人の直き心の嬉しかりけり

カメラ・レポート 10



会員発表。㈱テレビ西日本 穴井宏明氏は、小林秀雄氏の「立派な芸術といふものは、正しく、豊かに感ずる事を、人々に何時も教へてゐるものなのです」といふ文章を信じて、これからも豊かに美しく感ずる心を育てるやう学んでいきたいと語った。

日本の国柄に適った考へ方を
教へていただきました

（茨城新聞社 佐川友一 51歳）

学生時代以来二十八、二十九年ぶりに夏の合宿に参加させていただき、とても嬉しく思っております。懐かしい友人や先輩方との再会、さらに新しく知り合ふことができた方もあり、充実した時を過ごすことができました。

伊藤哲朗先生のリスク管理をテーマにした御講義、石平先生の隣国・中国の覇権戦略を巡る御講義は共に我々日本人の国家意識の覚醒を促されるやうな思ひが致しましたし、前田秀一郎先生の聖徳太子の十七条憲法を解説された御講義は、人と人との間柄、君臣の上下関係の在り方について、改めて日本の国柄に適った考へ方を教へていただきました。

今林賢郁理事長の御講義は、ズバリ「日本の国がら」がテーマでしたが、君が民を思ひ、民がその思ひに応へることで歴史を織り成してきた日本といふ国の歩みの「事実」を、歴代の天皇様の御製に仰ぐことができ、目をひらかれる思ひでした。

言の葉の奥に湛ふるお心を心つくして汲みとらんとす

新たな学びの多い合宿であった

（日産自動車健康保険組合 奈良崎 修二 60歳）
三年ぶりの合宿参加であったが、新たな学びの多い合宿であった。石平先生の「華夷秩序」の復興といふ、中国史を貫く大戦略に関する御講義は、日本の政官財界に存在する極めて甘い国際情勢認識を一蹴する如き明解なものであった。

また、今林賢郁先生の「日本の国がら」のお話は、今上陛下から、時代を遡りつつ歴代の天皇のお言葉を迎えられ、まさに神武天皇以来の君臣一和たる国がらを示されたもので、感銘致しました。

今林賢郁理事長のご講義の中で

終戦の大御歌四首みな共に誦み進みたり涙こらへつつ

今日的課題を明確に指摘された

（元座間市立中原小学校 松本洋治 66歳）

伊藤哲朗先生、石平先生の講義は、今日的課題を明確に指摘されたもので我々が考える大きなヒントをいただいたように思う。今林賢郁先生の講義も日本の国がらを事実に基づいて天皇陛下の和歌を通して国民とのつながりをわかりやすく話して下さったように思う。

富士登山も宝永山まで歩くことができ、みなさんと交流できたことは有意義であった。

和歌創作も勉強になった。

本当に有難うございました。

基本的視座を与へて戴いた

(三菱地所㈱ 青山直幸 67歳)

今回の合宿は、残念ながら、参加者は少なかったが内容の濃い合宿であつたと思ふ。伊藤哲朗先生の危機管理の話、石平先生の中国の覇権戦略の話は、現実の外交、防衛戦略を考へる上での基本的視座を与へて戴いたやうに思ふ。前田秀一郎先生の十七条憲法の話、今林賢郁理事長の日本の国がらの話は、日本の国柄の最も重要な「天皇と国民の間柄」に帰結する話であつた。理事長の話の中にあつた「事実を正確に理解し、伝えていくこと」こそ、我々に課された使命であると思ふ。

今林賢郁理事長の御講義を聞きて

「日本の国がら」を思ふ

古代よりおおみだからとみ民らをいつくしむ心繼ぎて来られし

いにしへゆ伝へ来たりし国民の深き絆を守りゆきたし
世の様は変はりゆくとも天皇の民思はるるみ心変らじ

歩みを止めないでゆきたい

(元富山県立富山工業高等学校教諭 岸本 弘 71歳)

最終日の國武忠彦先生のお話をお聞きしながら、合宿の歩

カメラ・レポート 11



創作短歌全体批評。国民文化研究会副理事長 澤部壽孫氏は、短歌創作は、感じたことをありのままに表現するために最も適切で正確な言葉を見つけることが基本であると述べ、参加者が詠んだ歌の一語一語をたどりながら最も適切な言葉を見つけ出す作業を具体的に示した。

みを一一つ心の中で確かめることが出来ました。そのタイトルが「思ふこと」であつたやうに、つまるところ「思ふこと」――お互いに心を働かせて、相手のことを思ひやることに、この合宿の目的（それは過去の合宿も同様）があることを再認識させられました。

私共が、それは間違つてゐると感ずることといふのは、一人一人の人間関係であつても、又、対国家間の問題であつても、相手を踏みこじるやうな行為、言動を平然として為すものに對して、反発することは、人間として失つてはならないことでありませう。

合宿の参加人数は年々少なくなり、勧誘することも絶望に近い状況に追ひ込まれてをりますが、しかし「0」ではない。一人でもゐる限り、一人でもあることを信じて歩みを止めないでゆきたいものです。

本当に良い合宿でした。ありがとうございました。

昨夜しばらくの時間を今林賢郁さんと語り合つて

君と二人語りてゆけば若き日と変らぬ時に浸りてありき

神さりし人のことども語りつゝ残されし時を共に刻まむ

国民文化研究会

学生の素直な気持ちを感じた

（東京大学 伊藤哲朗 67歳）

昨年引き続きの御殿場の「青少年交流の家」での合宿に参加したが、昨年は従来からの合宿形式であつたのに対し、今回は東日本地区だけの合宿であつた。合宿の日程は、これまでの合宿の日程を踏襲したものであつたが、これまでと一番の違いは参加人数が大幅に少なかったということであり、東西に分けることにより遠隔地への参加が必要となくなり、特に学生の参加が増えるだろうとの目論見がなかつたかどうかはわからない。ただ、講義内容は従来同様充実した内容であつたし、班別研修もしっかり行えていたので、参加者としては有意義な合宿であつたと思う。また、合宿の運営委員長以下の運営にあつた方々、事務局の方々には、人数にかかわらず例年同様のご苦労がありがたと思うし、過不足のない運営には心から敬意と感謝を申し上げる。

最後に学生の班別研修に参加しての印象としては、皆、本当に素直な気持ちを持っているし、こちらの語りかけには十分理解し、反応して、自分の考えをまとめて話をしようとする姿勢は初々しい感じすらした。

私達が学生に語りかけ彼らがこちらの話に関心を持つてくれるような機会と場を平素から多く作れるように努力したいと思う。

学生の勧誘及び合宿の設営と運営、本当にありがとうございました。

学生の班別研修に参加して

若きらと語れば吾も若き日に還る心地し言葉弾むも

若きらの素直なる言葉聴きをれば伝へたき思ひ胸に湧き来る

御殿場の研修所で夜空を見て

見上ぐれば広がる空に星々の光輝き満天に充つ

都会では見られぬほどの数多なる星輝きて大空を覆ふ

大空をうねりて流るる天の川天横切りて木々の端に消ゆ

「国平らか民安かれ」を改めて痛感した

(拓殖大学 山内健生 71歳)

合宿内容としては申し分ないので天候にも恵まれて富士五合目登山も叶って幸ひであった。

講義について記せば「我が国を取り巻く危機」が自然災害を多く例示しつつ語られたが、人災と背中合せなことがあらためて浮上されたやうに、平生の心構へのあり方を問はれた次第であった。石平先生による歴史的な中国人の深層意識にある華夷秩序から説き起された中国政府の対日戦略には、新たな視点が与へられた感じである。マスメディアが一向に機能しないわが国の現状は恐ろしいことだと改めて強く思った。理事長の「国がら」についての講義では、昭和天皇の御聖徳によって、敗戦といふ最大なる国難をのり越えられたのだと心底から思った。「国平らか民安かれ」のお祈りとともにある国民のありがたさを改めて新たに痛感した。

カメラ・レポート 12



創作短歌全体批評。具体的な講評により浮び上る歌の情景に、思はず笑ひが起る。

このとしても新たな力の湧きくるを覚ゆる合宿いま終らんとする

富士の嶺にかかる白雲のその上に頂き見えてうれしかりけり

山肌にかかる白雲たちまちに吹き流さるるか頂きを覆ふ

富士山を朝に昼に夕べにも仰ぎし今年の合宿教室

日本の国柄の自覚がはつきりと語られた

（昭和音楽大学 國武忠彦 78歳）

今回は、参加者数は少なかつたかもしれませんが、大変充実した合宿でした。奥で色々とお苦勞された方々に感謝申し上げます。特に今回は、国家の危機についての自覚、それは普段の文化・伝統、歴史の認識、すなわち日本の国柄の自覚がはつきりと語られたことが大きな印象として心に残りしました。課題は大きいのですが友と力をあわせて一層学んでいかなければならないと思いました。やはり普段なかなかか会えぬ友と久しぶりに話ぐできましたことを嬉しく思いました。多くの友が参加しやすい合宿が他に考えられるのかということでなかなか名案も浮かばず、みんなと知恵を出し合って考えていくしかないと思いました。いずれにしましても友がいるということ、話し合える友がいるということをつくづくと嬉しく思いました。

帰ったら課題ははつきりしておりますので頑張りたいと思います。本当にありがとうございます。

太子の御著書を生きる力としてきた

（公益社団法人山梨科学アカデミー 前田 秀一郎 68歳）

四十三年ぶりにご講義を拝聴し、班別研修にも参加させて戴くことができました。久し振りに拝聴した質の高い魂に訴えるご講義に感銘を受け、班別研修での心を開いた討論を深しく、また懐かしく体験できました。また、運営委員長の小柳志乃夫さんから聖徳太子を主題とする古典講義のご依頼を戴き、浅学を顧みずお引き受けしました。ご依頼を戴いてから半年間、太子の憲法十七条に取り組みました。古典講義であることを考慮し、太子が憲法に込められた思いを御言葉に添ってお惚びし、参加された皆さんにお伝えしたいと準備しましたが、力不足で原稿を読む部分や他からの引用に依る部分が多く、皆さんの心に届く講義ができず、誠に申し訳なく存じます。

黒上正一郎先生の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」を大切な古典として輪読し、理解できた内容を生きる力としてきた私どもにとって、太子自身の御著書を正確に読解することは極めて意義深く、必要と存じます。今後、より多くの方が太子の御著書の読解に取り組まれ、咀嚼して紹介して戴ければ幸いです。

最後になりましたが、本合宿の実現のため、お忙しい中にもかかわらずご尽力戴いた国文研究会員の皆様にご心からお礼申

上げます。

四十五年ぶりに加来至誠さんに会ひて

聖徳王作り給ひし憲法を我が講ずるを聴かむと君来つ

忙しき君にあらむに遠きより駆けつけくれぬ有難きかな

久しくも会はずをりしに和やかに昔のままに君は語らふ

落ちつきで静かに語りゆく様にとしつき努め来し君思ふ

合宿は絶やさずに続けたい

(元日商岩井(株) 澤部壽孫 75歳)

実り多い御殿場合宿を終へるに当り、先ず小柳志乃夫運営委員長を始めとする運営委員の諸兄に厚く御礼を申し上げます。

学生の数が少なく寂しい合宿でしたが、やはり合宿は絶やさずに続けたいと強く思ひます。来年は東西合同にて九月に御殿場で再び開催することを提案します。その為に精魂を傾けたいと思ひます。

慰霊祭

師の君と先輩と友らのみ霊たち天降りますらむ風のさやげば

大空にあまたなる星輝けば我が合宿をみそなはずらむ

全体意見発表を聞きて

学生達の語るを聞けば「よく教ふればこれに従ふ」のみ言葉

思ふ

新たなる友ひとり連れ学生達の来む夏の合宿に来たれと念願

カメラ・レポート 13



講話 (右)。上野学園高等学校音楽科講師 武澤陽介氏は、「祖国と音楽」と題し、シヨパン、シベリウス、スメタナ達の祖国への思ひを、その音楽に惚んだ。慰霊祭の説明(左)。元神奈川県立小田原高等学校教諭 原川猛雄氏により、慰霊祭の趣旨が説かれた。

ふ

合宿を終へて

集ひ来し人皆の力統べられて見事に成りぬこれの合宿は
若きらの輝く顔を喜びの言葉を胸に山降り行く
来む夏の合宿を目指し精魂を傾け生きむ友らとともにも
恙なく終へし合宿営みし友らのご苦労にただ謝しまつる
至らざる我に過ぎたる友ら有りと身に沁み思ひぬこれの合宿つどひ
に

第六十一回全国学生青年合宿教室に参加して

(元外務省 加来至誠 67歳)

前田秀一郎さんの講義および今林賢郁理事長の講義を拝聴し、男子学生の班別討論にオプザーバー参加し、また懐かしい皆様にお会いできましたこと、大変意義深い時を過ごさせてくださいました。このように合宿教室の継続、運営に努力されている皆様に心から感謝申し上げます。

今回、前田秀一郎さんと学生時代以来の再会することができ、その前田さんが聖徳太子について講義されるのを聴かせていただき、感激いたしました。この国文研合宿教室において古典講義として聖徳太子が復活したことは本当にうれしく思います。前田講師は、この講義のために大変な準備を重ねられたことと拝察します。ご努力に敬意を表します。時間の制約上、難しかったものと思いますが、聖徳太子の生きた時

代、その人間像についても少しお話があれば、なお講義への理解が進んだのではないかとも思われました。

今林理事長の講義にも大変啓発されました。特に明治天皇がその御宸翰の中で「艱難の先に立」と誓っていらしたことに感銘を覚えめました。世の中が激変し、荒波の世界に乗り出した明治日本。満十五歳で御位につかれたばかりの明治天皇がこのように国民に対して宣言されていらしたことが、その後明治日本の歴史を想えばなおさらに深い感慨を覚えます。

なお、限られた班別討論オプザーバーの経験であり、正鵠を得ていないかもしれませんが、私が拝見した限りでは、参加者は文献の読み下し、意味をとることに苦心していました。

これは古典に接するときには、通らざるを得ない難所であり、長い目で見ればこのような鍛錬も必要であると思いましたが、合宿の限られた時間の中で、皆が沈黙考する時間が少なからず生じるのもつたいに思いました。それよりは、特に印象深かったところを述べ合うなどして、より積極的に皆が話し合うようになっていく方がよいのではないかと感じました。

これは合宿教室全般の教育方針に関わることもかもしれませんが、私が発言するのは適切でないかもしれませんが、私の印象として、若者たちの知識が足りないところに日本人として身につけておくべき知識を注入する、という面がやや強く出すぎているのではないかと感を持ちました。

確かに知識面で啓蒙するということは必要でありましょう



若き友らに語りかける言葉。昭和音楽大学名誉教授 國武忠彦氏は、合宿の三泊四日を振り返り、学問とは臨機応変に現実の問題に対応できるころの工夫・活用であり、わが国を取り巻く課題は多いが、私たちは、積極的に智慧を働かせてこれに応へて生きていかなければならないと語った。



全体感想自由発表。「国家の危機にあつてはリーダーに歴史観・国家観が不可欠だといふことを学んだ」「歴史的視点から行動する中国の国家戦略を知った」「歴史と伝統を考へることは憲法を考へることに繋がると思った」「日本人として誇りを持って生きてきたい」「和して同ぜず、といふことの大切さが本当に分った」「和、はスローガンではなく太子の御体験から生れた言葉だといふことを学んだ」「明治維新の際の『天下億兆一人も其処を得ざる時は、皆朕が罪なれば…』といふ明治天皇のお言葉に心が動いた」「皇室の下にある幸せを実感した」「古典に触れてこんなに美しい言葉があつたのかと驚いた」「『古事記』の百年前に国家の歴史があつたことを知った」「班別の短歌相互批評で、素直な気持ちで語り合ふことは凄いいことだと思った。「和、といふものを実感した」「初めて歌をつくつたが、相互批評で作者の思ひを深く知つて良かった」等の感想を登壇した参加者が述べた

が、私は、生き方を定めていくためには、一人ひとりの心、就中、本心あるいは志を問う、ということが大事であると思います。そして煩惱に翻弄されやすい心の奥には、人生を通じて果たすべき使命をいなく本心が息づいている、その本心に即して生きる時、人は艱難を乗り越え、元気に歩むことができる、と考えます。

そのような本心を引き出すという点について、合宿教室においてより取り組むことができないものだろうか（私に具体的な考え方があるわけではありませんが）との感を覚えました。一部のみの参加をもって、このような感想を述べると、失礼を恐れます。御寛恕願います。

言葉の力を感じた合宿だった

（株）柴田 柴田悌輔 76歳

今林賢郁理事長の講義、「日本の国がら」は、實に素晴らしい講義でした。講義内容の充實と共に、特筆すべきは、語り口の魅力です。今回、今林さんは講義の爲の準備を、特にはしなかつたのだらう。何故なら彼の語る言葉には、一切の借り物めいたものを感じられなかった。これは全て彼が自分の言葉で語ったからです。彼の講義は、「語らうとする意思と迫力が、『言葉の力』となつて、聞く者の耳に届いたからです。」これが言葉の力そのものなのです。

慰靈祭に参列して

諒闇の斎の庭に響きける警ひつの聲厳かにして

思はずも頭を深く下げにけるみ霊の聲の聞ゆ氣のして

み祖先らのみ霊を祀る慣しの永遠に續けとただ祈るのみ

運営本部

合宿の運営を終へて

（I B J L 東芝リース株）小柳 志乃夫 60歳

有難うございました。数多くの方の力をたまはりました。様々な人の力に支へられ合宿終へるをありがたく思ふ

学生時代の初心がよみがえった

（東京ホワイト歯科）須田清文 61歳

運営委員長よりの依頼で短歌導入講義を担当させていただきました。短歌創作の方法を述べるのではなく良い短歌を合宿教室の参加者全員で体験して短歌の基本をいくらでも身につけていたのだらうと思つて今回香淳皇后様の「やつがしら絵巻」四十首を手本にやってみました。基本事項をもつと丁寧にやるべきだったし、説明不足も感じました。

同期同年代の友らが中心となつての合宿教室で学生時代の初心がよみがへつてまゐりました。得難い諸先輩ともお会い

する事ができまして有難く思ひました。

合宿教室が続いていくことを望みます。岸本さんを見習っていききたいと思います。

朝まだき頂き見えそむ富士山の高嶺朝日に映えて美し

山肌は朝日に映えてしるけくもあけにそまるをあかずながむる
み友らと富士を仰ぎてさはやかな朝風あびつつ語りあふかな

指揮班

充実した合宿が無事に終了

(東芝電波プロダクツ㈱ 神谷正一 56歳)

病人も怪我人もなく、無事に合宿が終了したことを嬉しく思ひます。運営委員として全日程参加できたのは初めてでしたが、なかなか行き届かなかったことは反省です。

招聘講師の石平先生はじめ、いづれのご講義の内容も充実してみました。今後の自分自身の課題も感じながら拝聴しました。また、天候にも恵まれました。富士山散策は多少厳しいコースでしたが、年配の皆さんも積極的に参加されてゐたのが印象的です。富士山の魅力を改めて感じたところです。

次回開催の課題は多々ありさうですが、継続の重要性は感じます。また、富士の麓の御殿場は合宿適地だと思ひます。

カメラ・レポート
16



閉会式。主催者を代表して山内健生常務理事は「ここでの講義や短歌創作を通して、『大事なことは目には見えない。心で感じなくては分らない』といふことを学んだと思ふ。そこから新たに沢山のことが見えて来たと思ふ。ここでの学びを出発点にお互に励んでいませう」と語った。

晴れてよし曇りてもよしと歌はれし富士の裾野に学ぶ嬉しき朝の富士夕べの富士と様々に見ゆる姿の移りゆきたり

雲をまるとひ隠りたれども雄々しかるそのみ姿の清々しかも

※山岡鉄舟の歌

晴れてよし曇りてもよし富士の山もとの姿は変はらざりけり

合宿継続に力を尽くしたい

(若築建設 池松伸典 60歳)

合宿教室での先生方の御講義・御講話はどれも中身の濃い心にせまる内容であり、これまで続いてきたこの合宿ならではの体験ができた。天候にも恵まれ様々に移りかはる富士の姿を十分に眺めることができ、亡くなられた諸先生方のご加護を感じられた。

一方で新しい参加学生が僅かとなってある現状を考へる時、他団体の多くの大学生をこの施設で見るにつけ、合宿勧誘のために直接新しい学生と会って話してゐない自分が省みられる。

諸先生諸先輩が心を砕き続けてこられた合宿教室が、今後幾分形が変はりながらも続いていくべく力を尽くしたい。自己満足の勉強に終はらず新しい学生と接する機会を持ちたい。

伊藤哲朗先生のご講義が印象に残った

(IMSグループ本部事務局 最知浩一 55歳)

台風の接近で雨の影響が心配されたが、四日間を通して天候に恵まれ、二日目のレクリエーション、慰霊祭も当初の計画通り行ふ事が出来とてもよかつたと思つてゐる。

ただ残念なのは、学生や社会人の参加が例年以上に少なく、さらに今後どのやうにすれば参加が増えるかが喫緊の課題と言へさうだ。

初日の伊藤哲朗先生の導入講義、二日目の石平先生のご講義はとても身に迫る問題として受け止めることができた。特に伊藤先生の「危機に際して国家観と歴史観を持つ」といふ事と「危機に際して人間の本当の姿が出てくる」といふ言葉はとても印象に残つてゐる。この事は、聖徳太子をはじめ、歴代の天皇様がお残しになられたお言葉や御製を味はふ上で如実に感じられるし、また現在の政治家や国家リーダーを評価する上でとても大事な要素であるといふことに改めて気づかせていただいた。

合宿の最終日の朝、集ひの広場にて

雲晴れて雄々しくそびゆる富士の嶺を間近にみれば言葉も出でず

日の本に生まれしよろこび思ひつつしばし見あぐる富士の高嶺を

朝焼けに映えてそびゆる富士の嶺は我が日の本の宝なりけり

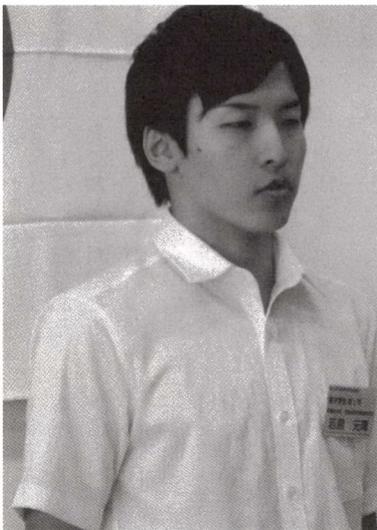
本来の日本人に戻れる努力を

(元神奈川県立小田原高等学校教諭 原川猛雄 68歳)

まづ、小柳志乃夫運営委員長をはじめ皆さんのご尽力のおかげで合宿教室が開催できたこと、又、無事日程が終了したことを本当に喜び感謝したいと思ひます。講義ももちろんですが、先輩諸兄と寝食を共にして過ごした数日間は、触発されること学ぶことが多く、これからの日々の生活に生きていくことと思ひます。内外ともに厳しい環境におかれてゐる日本ですが、日本人自身が自国のアイデンティティに目覚め、国際社会の中で堂々と発言し、存在していけるやうになりたいたいものです。自虐的歴史観や加害者の意識などの呪縛から解放され、本来の日本人に国民全体が戻るやうな努力を続けていかねばと思ひます。

私事ですが、慰霊祭発表の予行練習に合宿前日の忙しいときにかかはらず快くおつきあひいただいた小柳さん、北濱道さんに心より感謝申し上げます。

友どちの心くだきて準備せし合宿ついにその日を迎へり
つつがなく三泊四日も終了し無事閉会式を迎へ来にけり



カメラ・レポート 17

閉会式。小柳志乃夫合宿運営委員長（右）は、全体感想自由発表の中で、「素直な気持ちで語り合った時に、和を感じた」との発言があり、大切なものを掴んでもらへたと有難かった。皆さんのご協力に感謝したいと述べた。早稲田大学政治経済学部二年・若島元暉君（左）の閉会宣言を以て「合宿教室（東日本）」の全日程は終了した。

大合宿を成功させたい気持ちが大事

(元榎講談社 磯貝保博 72歳)

参加者数は少なかったにもかかわらず、講義内容、合宿運営は小柳志乃夫運営委員長を中心として素晴らしいものとなりました。来年の大合宿を今年のように東西に分けてやるのか、もとに戻して全国統一した形態でやるかを至急検討する必要がありますと思ひます。小生としては、参加者数の多寡にかかわらず、全国の会員が一つになって大合宿を成功させようとする気持ちを持つことが大事だと思ひます。従って、元に戻した形態で実施をしたらと考へます。

そのためには、あらためて学生勧誘の方法を皆の知恵をあつめて検討したらと思ひます。その際、大事なのは、ただ呼びかける(ヒラや宣伝)だけでなく、具体的に学生と接触できる方法で勧誘する視点が必要と思ひます。来年に向けて頑張ります。

富士山の気高き姿広やかな心を持ってと我に迫りく

祖国を失うことの厳しさが述べられた

(元三菱重工業株 島津正數 71歳)

中国は我が国の領土である「尖閣諸島」を中国の「核心的利益」の領土だと言明した。中国は新疆ウイグル自治区やチ

ベット自治区と同列の自治区として中国領にするとの認識である。とんでもない認識である。日本として、日本人としてこの問題は実に大きな問題である。伊藤哲朗東大教授の「我が国を取り巻く危機」の一つである。私は日本が直面している「国家の危機」の最大の危機は「尖閣問題である」と考えている。しかし、産経新聞を除く新聞各紙の論調やTVの報道には、国家の危機との認識が欠如しているように思われる。今回の合宿では、石平先生、伊藤哲朗先生、武澤陽介先生の講義・講演で祖国を失うことの厳しさが述べられ、実にありがたかった。

更に、今林賢郁理事長の仰られる「日本の国がら」が今後も永続できるように君臣の情を更に深め、日本国を大切に守る国民でありたいと思う。

昨年と異なり、全日程とも美しい富士山の姿をながめることができたことは誠に幸運であった。富士山はやはり美しい、と思つた。

石平、伊藤哲朗両先生のご講義を聞きて

隣国の覇権主義はものかはと我が国守るつとめ果たさむ

武澤陽介先生のご講義を聞きて

自らの祖国を失ふ悲しさを音楽を通していたましく聞く

日本の国がらを広く知らせたい

(元川崎重工業株 山本博資 75歳)

日程、資料とも良く準備された合宿教室でした。運営委員の皆様ご苦勞様でした。「青年学生」の参加増には知恵を出し合ひませう。

石平さんの講義内容、理事長の講義内容は、出来るだけ早く、国民に広く知らせたいものです。ご検討下さい。

富士山登山（六合目）

火山灰礫れきの交らふ山道に足をとられつゆるりと歩きぬ

あゆみ遅き我に声かけ励ましてくれし友らに謝したてまつる

励むまされ励むまされつつ登り終へ初山踏はつやまは思すがひ清しも

富士が嶺むねを仰むかげみ見ればなびき寄る雲のかたちの面白きかな

宝永の火口の底ゆ絶えまなく吹き上げる霧の視界さへぎる

山肌やまをえぐるがごとかき酒め沢たけのすさまじき跡を見つつ下りぬ

合宿中に創作された『短歌詠草』

——しきしまのみち——



短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多く短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなつてをります。従つて、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとつて、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠つた言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行つた様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深淺、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直に歌ひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」とよんできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによつて、人間にとつて最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合つてきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とのつながりをもつた日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。

現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題がなほざりにされてゐます。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同士の相互批評によつて集中的になされてゆきます。心の奥底に眠つてゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして豊かな人間性を取り戻さうとする試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとつて、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午後、国民文化研究会会員の須田清文氏（東京ホワイト歯科）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌ただしい日程の中で生み出された短歌ではありませんが、作者の集中された内心の働きがはしばしばに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠つてをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となつて参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに国民文化研究会会員の澤部壽孫氏（元 日商石井）によつて、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた講評の中で作者の一語一語に含まれる心を偲はれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、班ごとに班員全員による相互批評が行はれ、各自の短歌の表現をより正確に添削し合ふことを通じ互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寢食を共にし、胸中を披瀝し合つて来た友情の結び付きが、一段と確認されました。短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者一人一人に、言ひ知れぬ喜びをもたらすこととなりました。

ここに収録された短歌の数々は、班員の心を集結して推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読み取りいただければと、心から祈念する次第です。

短歌詠草 (しきしまのみち) 合宿第一回目の創作作品

(班別相互批評をして添削された作品です。尚、第二回目の作品は感想文の末尾に収録。)

男子学生第一班

(株)ラック 高橋 俊太郎

富士登山にて

バス降りて肌に感ずる富士山の日射しは強く風は涼しき

東京大学大学院 理学系研究科 高木 悠

宝永第二火口にてガイドの話を開きて

火口なる僅かの草も生ゆるまで数百年もかかりしと聞く
この草をたよりに木々の少しづつ元に戻る

と教へられけり

いかばかり長き年月かかかるらむ木々のふたたび生え揃ふまで

福岡教育大学 科目等履修生 四年 前川大基

富士登山にて

やまびこの返るを願ひ「ヤッホー」と叫ぶも叶はずさみしかりけり

佐賀大学 まな経 三年 神谷 龍

富士山に初に登れば目交ひに広がる景色の清々しきかな

早稲田大学 政経 二年 若島元暉

宝永火口の獅子岩を眺めて

災ひの噴火の痕と知りたれど思はず見入る獅子の横顔
鹿兒島大学 歯 一年 山口 穰

澄みわたる富士の高嶺の空のごいぶせき

心の晴れてゆかなむ
横浜国立大学 理工 一年 渡辺幹成

ここちよく叫びし友もをりたれど我恥づかしく叫び得ざりき

宝永山の火口あらはれ驚きの声をちこちに響きわたれり
埼玉県庁 飯島隆史

白雲のたちまち消えし富士山の山路に涼風心地よく吹く

富士山を背にしてさけぶ友の声駿河の海にどどくが如し

男子学生第二班

元(株)アルバック 北濱 道

息を切らし登りてゆけば足元の小さき花に心いやさる

若きらの樂しげに歌ふ声聞けば我が身の疲れ吹き飛ぶ心地す

宝永火口
目の前に迫るが如き赤土の山肌眺めただ息を飲む
雲去りし下見降せば縁なす駿河国原広がりてあり

福岡大学 科目等履修生 小林拓海

去年の夏富士の高嶺の見えざれど雲払はれて今日は見えけり

富士山を登りて行けば溶岩を踏みゆく音の高く聴ゆる
窓の外の上にも下にも雲海の広がりをおれば目をみはりけり
見わたせば真白に広がる雲海に龍の形の雲立ちのぼる

長崎大学 教 四年 榎本 仁

富士山の高き頂見上ぐれば登りゆきたき思ひ湧き出づ

班員と共に富士登山して

####

頂に登りてみたくと思へども今回は行けぬ
と悔しかりけり

風吹けば山肌に沿ひ白雲の薄く広がり頂に
向ふ

頂に向ひてなびく白雲を見届けたくとしば
し見つめり

時経ちて坂の下より声のして出発のとき近
づくを知る

立命館大学 法 三年 小野寺 崇良
白雲の上を歩める心地して今日のやまぶみ
樂しかりけり

京都産業大学 経営 二年 船岡龍一
富士山の頂見据ゑいつの日か友らとのぼろ
と我は決意す

軽石に足すべし我が友のつがなけれ
ば笑みかはすなり

早稲田大学 教 一年 嶋田裕一
懐かしき思ひあふるる富士なれど頂ぎに行
けず口惜しかりけり

元新潟工科大学教授 大岡 弘
石平先生の御講義をお聴きして

九条の改正急務と語ります師のみに我も
肯ふ
ゆくゆくは武力対決覚悟せよと迫り給ふる

御言葉強き

全日本学生文化会議 清川信彦

富士山五合目より六合目まで歩みし折に
目交ひに広がる空に白雲の湧きて漂ふ行方
も知らに

足元のおぼつかなければど富士山の大地踏み
しめ我ら進みぬ

友どちと共に登れば足取りも軽き心地に登
りゆくかな

女子班

全日本学生文化会議 椛島明美

富士山
山道をザクザク踏みしめ一歩づつ火口を目
指し歩みゆきけり

道すがらすれ違ふ人らとあいさつを交し歩
めば心地良きかな

長崎大学 教 二年 代田瑞希
富士山に登りて

見も知らぬ人のくれたるあいさつに人の心
の温もり感ず

長崎大学 教 二年 津田真木
晴れ渡る大空のもと大声で叫べば心澄み渡
りけり

富士山の山路を行き交ふ人々と言葉交せば
親しみの湧く

國學院大學栃木短期大學 一年 佐藤理沙

山道に咲ける一輪の花を見て富士のはよく
むいのちを思ふ

富士山を友らとともに歩みゆく今日のひと
とき心に残る

元小田原市立矢作小学校校長 岩越尊雄

朝の雲吹き払はれてくつきりと富士のみ山
の頂の見ゆ

山肌のあかねに輝く美しき富士のみ山のま
なかひに見ゆ

今見えし富士のみ山に雲湧きてたちまち見
えずになりけるかな

新しく噴火せし山宝永山鉄さびのごと山肌
荒れし

雄大な稜線のむかうの白雲と青きみ山の美
しきかな

日本語教師 鈴木 のり子

鎮もれる宝永火口に底より雲湧き出でて
我に迫り來

緑なき山道下りて出会ひける松の香りのな
つかしきかな

太成殿本宮 高見澤 玉江

常日頃仰ぎなれたる富士山の山路を初に踏
みしめ歩む
日の本の宝と仰ぐ富士山を日々に眺むるこ
と有難き
社会人班

宝永火口をのぞむ

天本和馬

山腹をえぐるのごとく削りたる噴火の威力
すさまじきかな
えぐられし火口は今はしづまれど草木も生
えず肌荒々し

日本大学 名誉教授 夜久竹夫
御殿場合宿に参加して

仰ぎ来し富士の高嶺に雲かかりわづかに見
ゆれど心足らひぬ
旭化成ホームズ(株) 市成照一
あな嬉し心ときめきちらちらと見ゆる横顔
美しきかな

日本ペーリンガーインゲルハイム(株) 出村信隆
富士山六合目にて

下手には雲湧き立ちて動かねど上見上ぐれ
ば雲湧き出づる

元私立中学高等学校教諭 永井敏勝

見上ぐれば空晴れ渡りあざやかに富士の高
嶺の聳え立つ見ゆ

全日本学生文化会議 坂本匡史
頂は間近に見ゆれど歩みては八時間かかる
と聞きて驚く
山小屋ゆ駿河の海まで見下ろせば森山越え
て飛び行く心地す

(株)まるぶん 長嶺悠樹
道行けば雲の流れの早くして富士の頂き見
え隠れする
頂きに雲かかることこれからの我が人生に
思ひめぐらす

(株)オートバックスセブン 小田村 初男
雲抜けてバスの着きたる六合目は清々しく
も晴れ渡りたり
宝永の火口目指して登り行けば噴火の跡の
激しさ示す

禍事の起るもありと備へるは人の勤めと師
は宣へり

国文研班

三菱地所(株) 青山直幸

まなかひに広ごれる富士の山すその中に横
たふ愛鷹山はも

久々に会ひし友らと語りつつ山道歩くは樂
しかりけり

山道を登りてゆけば目の前にえぐられしこ
とき火口見え来ぬ
そのかみの噴火の様を想ひつつ広き火口を
しばし見つめぬ

齋藤 實
四十七年振りに合宿に参加して

元座間市立中原小学校 松本洋治
頂に雲一つなく晴れたる今日の山ぶみう
れしかりける
雲流れ山のかなたに広ごれる駿河の海の
眼下に見ゆ
見下ろせる火口の中に一筋の道あゆむ人小
さく見ゆる

日産自動車健康保険組合 奈良崎 修二
めづらしき鳥に思ひを寄せ給ふ皇后の御歌
を皆で誦みゆく

皇后の声におどろき大君もみそのの鳥に見
入り給ひぬ
吹上の庭訪れしやつがしらに心おどらせ歌
よみ給ふ

こまやかに心を寄せてよみ給ふあまたの御歌の調べ美し

(株)日本教文社 坂本芳明
なつかしき学友の来たりにて近況を語りあひつつ作業にはげみぬ

千葉県庁 秋山信之
バス電車乗り継ぎやうやく友ら待つ御殿場の地に我は着きたり
美しき木立に囲まれ御殿場の夕べの集ひはさはやかなりき

(株)茨城新聞社 佐川友一
日本の基を学ぶ合宿にて富士のみ山に初に登りぬ

西松建設(株) 蔭山武志
岩山を上る足元に気をとられ気づけば背後に景色を残す

(株)ロゼッタ 高木雅史
宝永火口にて
草木なくただ赤土と青空の景色広がり恐ろしきかな

(株)テレビ西日本 穴井宏明
会員発表
去年の夏発表をせし我が友に背中を押され壇上に立つ

J A 長野厚生連佐久総合病院 市川絢也
大学卒業後一年ぶりに合宿に参加して

懐かしく思ふ
ひさびさに合宿教室に参加して学生の頃を懐かしく思ふ

元富山県立富山工業高等学校教諭 岸本 弘
富士登山

初めての富士の山道たどりゆく裾野国原右手に見つつ

登りゆく道のをちこち草紅葉砂れきの中に目にしるく見ゆ

宝永の火口の高処風わたり湧き立つ雲を頭上に仰ぐ

頂ゆ左に落つる稜線は長く美しく切れ目もなくして

思はざる好き日となりて友皆と間近に富士の頂を見つ

国民文化研究会

昭和音楽大学 名誉教授 國武忠彦
寶邊正久先生をお偲びして

閑門の流れゆく海しづかにも豊かな眺め思ひ出すかな

「国民同胞」の文編むすべを語られし姿しのばれ悲しかりけり

しきしまの雄々しき歌を詠みまして大きなあゆみ残したまひぬ

み歌には勢ひありて真あり古武土のごとき麗しきかな

(株)柴田 柴田悌輔
合宿に向ふ朝に

あふ向けによこたわりたる空蟬を爪先にてぞわれは払ひぬ

チチチと微かに鳴きて蟬は跳ぶ残るいのちを惜しむ如くに

心なき仕業と我を責めにつつ跳びゆく蟬をしばし見つむる

元日商岩井(株) 澤部壽孫
九月一日、御殿場合宿の準備作業

白雲の裾にたなびき赤銅色き富士の高嶺を仰ぐ今日はも

心知る友らと集ひ合宿の準備の時は楽しかりけり(山本博資、磯貝保博、島津正數、岸本弘の諸兄と)

ひと年にわたる友らの御苦労の積み重ねられ成りし合宿(運営委員会の諸兄のことを)

九月二日朝

博多より夜行バスにて十四時間かけて来たにぬ学生達六人は

伊藤哲朗先生の合宿導入講義を聞く

日の本は危機にあらずや各人国家観持てと獅子吼する君

九月三日、石平先生の「講義を聴きて」

古代より現代までの隣国の歴史を聞けば目の開かるる

一時間半のご講義つかの間に過行く心地に耳傾けり

富士登山

山路ゆくパスの車窓の木々の間に雲払はれし富士の嶺の見ゆ

白雲の流れは疾くたちまちに山頂覆ひ見えずなりゆく

溶岩の続く険しき山道を励まされつつ友と登りぬ(小柳志乃夫さんと)

いつしかに雲払はれし頂を岩に座りて友と眺むる(同右)

拓殖大学日本文化研究所 客員教授 山内健生

石平先生の「中国の覇権戦略と日本の課題」をお聞きして

なまなかに理解しがたき中国といまさらにも思ふ御講義を聞きて

歩みける歴史の違いに意を深くいたすべきぞと強く思ひぬ

華夷秩序を甦へらせんと凶りを深き企みあらためて知る

華夷秩序は過去のことならず今まさにその企てを進めをりけり

難くとも「和して同せず」の思ひにて互に交はる時代の待たるる

憲法十七条の講義を前に

憲法を友らともろ共に読みゆく支度すれば畏し

憲法の御言に心留め聖徳王を偲びまつらむ

東京大学 客員教授 伊藤哲朗

雲流れ霧晴れゆけば赤茶けし富士の山頂現れ出でけり

海眼む雄獅子の如き形して宝永山は聳え立ちけり

獅子の如き山を見れば合宿で獅子吼なされし亡き師思ほゆ

友達と三人で山道登り行く白根に遊びし昔のごとくに

愛鷹の彼方に駿河の海光りはるかに霞む伊豆の山々

運営本部

I B J L 東芝リース 株 小柳 志乃夫
富士登山(Bコース)

見上げればか青の空につきいづる富士の頂間近にも見ゆ

まなしにはるか広がる大富士の裾野の森のはてに海見ゆ

白雲の流れゆくまま刻々と姿を変ふる富士の景色は

健脚のコース歩ける合宿の友らの無事に帰るを祈る

先輩と共に景色を眺めつつ歌詠みゆくは樂しかりけり

東京ホワイト歯科 須田清文
香淳皇后さまの御歌「やつがしら」

四十首の連作短歌を全員で拝誦してまひきたる一羽の鳥へのみ思ひのあふるる

ばかりに伝はりくるかな
出会ひたる一羽の鳥を愛で給ひつきぬ喜びをうたひ給ひぬ

天皇の御まなざしとみことはをおよみにな

られし御歌ともしも
五十年の時をふれども伝はり来やつがしら

へのおふるる御思ひは

指揮班

東芝電波プロダクツ(株) 神谷正一

富士

雲晴れて富士のみ山の頂の見ゆれば友らの
歓声上がる

険しかる散策コースに挑みまず先輩の歩み
は確かなりけり

(株)H I エアロスペース 内海勝彦

宝永第一火口

山に沿ひ続く小道を上りゆけば谷底深く広
がり見ゆる

いにしへの噴火の跡のままに赤き山肌
眼の前に見ゆ

霊峰の猛き姿をうつつにもしるけく残せし
これの火口は

(二回目の作品)

富士を眺めて

朝ぼらけま青に澄める大空にそびえて立て
る富士を仰ぎぬ

山頂は笠雲かかり中々に姿見えこず口惜し
きかな

やうやくに頂見えし霊峰に合宿教室の成功

祈りぬ

若築建設(株) 池松伸典
朝富士の嶺を眺めて

裾野よりたちまち雲の流れゆき富士の山膚
あらはれにけり

山膚を見つむるほどに敷きつめしあまたの
岩の姿見えくる

富士の嶺の生きるがごとくたちまちにvari
ゆく様あかず眺むる

富士の嶺を背にする写し絵撮りくるる友の
心の有り難きかな

IMSグループ本部事務局 最知浩一
富士登山に参加して

五合目へのバスの車窓に富士の嶺の雲の切
れ間に聳ゆるを見つ

「ウォー」といふ歓声上がり友どちと身を
乗り出だし富士を見上ぐる

友どちの願ひ叶ひて富士登山出来る喜びか
みしめ登る

事務局

(公社) 国民文化研究会 事務局長 奥富修一
雲間より夕日の射して富士山の裾野の影を

美しと見つ

元川崎重工工業(株) 山本博資

開会式の挨拶(澤部壽孫副理事長、

小柳志乃夫運営委員長)を聞きて

お互ひに心通はせ合ふことに思ひつくせと
語り給ひき

「み心を動かす」ことを「経験せよ」と若
き友らに求め給ひき

「聴くこと」に心そそげば自づからこころ
開きて通ひあふてふ

元(株)講談社資料センター室長 磯貝保博
山腹を駆け上ること雲走りまたたくうちに
頂き消ゆる

すさまじき噴火の跡や宝永の赤き山肌眼前
に見ゆ

若き日には思はざれども年経れば山を登る
に息切れのする

元三菱重工工業(株) 島津正數
励ましつ励まされつつ宝永のけはしき山路

我ら登りゆく
見上ぐれば茶色く赤き山肌の富士の頂間近

に立てり
宝永の火口を背にして若きらの写真(うつつ)を撮る

は楽しかりけり

(公社) 国民文化研究会 事務局 栗方 恵美子

若き子と集ひの場のふれあひをたのしみつ
つもとまどふ我は

合宿地に寄せられし歌

北海道 大町憲朗
御殿場に若き友らと寄り集ひ合宿宮む友ら
を偲ぶ

あとがき

初冬の候、皆様にはその後如何にお過ごしでしょうか。

福岡市「さわやかトレーニングセンター福岡」、御殿場市「国立中央青少年交流の家」で共に学び、語り合った「合宿教室」から早四ヶ月、三ヶ月が過ぎました。この度やうやくこの「感想文集」を皆様のお手元にお届け出来る運びとなりました。

この「感想文集」は、「合宿教室」の最後に走り書きしていただいた感想文と短歌を（西日本では、その後の「油山慰霊祭」「短歌研修」の概要と詠歌を併せ編集したものです。編集作業は、まづ、それぞれの班の班長に、感想文と第二回目の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人のお心こもる文章・短歌を丹念に読み返し、文字を正確に辿る編集作業は、神経を使ひ、時間も掛かるものではありますが、それは同時に、お一人お一人のみづみづしい心の動きに触れることのできる、心楽しくよるこほしいひと時でありました。

本感想文集編集方針は以下の通りです。

一 「感想文」について

執筆者のお心のうちが最もよく表れてゐる箇所を摘要し、表題も付けました。逆に文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持を辿りながら、原文のニュアンスが損はれないやう加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字および文法上の誤りについては訂正してをります。

二 「短歌」について

「合宿教室」（西日本）では、合宿当日の詠歌は、走り書きの「感想文」に、「短歌研修」での歌は、班別相互批評にて添削されたものを西日本の「短歌詠草」に載せました。

「合宿教室」（東日本）では、二回にわたって短歌を作りましたが、第一回目ものは班別相互批評にて添削され、全参加者それぞれ東日本の「短歌詠草」に収めました。また、感想文の執筆の折に作っていただいた第二回目の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。

どちらも文字表記は、全員歴史的かなづかひに統一し、文法上の誤り等は感想文と同様に訂正いたしました。

この「感想文集」作成のためには、班長の他にも多くの方のご協力を頂きました。特に、今回「合宿教室」が西東分れて開催されたことで、その東日本の分のためのすべてを（株）ダンクの佐野宣志氏に担当して頂きました。心より御礼申し上げます。

カメラ・レポートの写真は、西日本は（一社）福岡中小企業経営者協会の福元晶子さんと福岡県立朝倉高等学校教諭の黒岩真一さんと、東日本は元三菱重工（株）の島津正敷さんとIMSグループ本部 最知浩一さんにお世話になりました。

多くの方のご協力によって出来上がった「感想文集」を、ご精読下さいますやうお願ひ申し上げます。

本文集を読み進むにつれて、「合宿教室」の様々な感動が甦ってくる事と存じます。

お読みの後は、班長、班付、班友、更には他班の方へも、一筆お便りを差し上げていただき、今後も互ひに励まし合ひ学んでゆくとができれば幸ひです。

（北濱 道 記）

第六十二回「公倍教室」(西日本・東日本)感想文集

非売品

平成二十八年十二月二十五日発行

編集兼発行者

公益社団法人 国民文化研究会

理事長 今林賢郁

編集 北濱道・佐野宜志

東京都渋谷区東一―十三―一―四〇二号

〒一五〇〇〇一一

電話 〇三―五四六八―六二三〇

FAX 〇三―五四六八―一四七〇

